心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り

大東文化大学創立80周年誌

DAITO BUNKA
UNIVERSITY
大東文化大学

大東文化大学創立80周年誌

心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り

大正13（1924）年2月11日
大東文化学院開院式

th
創立80周年
DAITO
BUNKA

「大東」の“D”と、「文化」の“B”をモチーフに、21世紀に飛躍する『翼』を表現した斬新なデザイン

21世紀を迎えた今、大東文化学園の新たな伝統の第1ページがはじまります。

シンボルマーク基本デザイン

DAITO BUNKA
UNIVERSITY
大東文化大学

イメージキャラクター
PaRaBun（パラブン）

伝統ある従来の学園章や筆文字に加え、21世紀にふさわしい大東文化学園の新しいシンボルマークを制定するため、デザイン案を広く全国から一般公募しました。

平成13（2001）年12月、大東文化学園の新しいシンボルマークを決定しました。全国から、225点（応募者数103名）の作品応募が寄せられ、学生をはじめとした学園関係者の投票結果を参考に、学内で厳正な審査を行いました。

ロゴタイプ、シンボルマークには、新しい大学像を示すとともに、激動する国際社会の中で果敢に活躍できる力強い独創性と豊かな人間性を備えた人材に育ってほしいとの願いが込められています。また、愛嬌たっぷりのユニークな鳥をモチーフにしたイメージキャラクターは、顔部分の“D”に独創的な情報交流をサポートするパラボラアンテナを、体部分の“B”には都市型大学として高度な人材育成をする場というイメージを、それぞれ表現しています。キャラクターの愛称は、「PaRaBun（パラブン）」。

これらは、学生・教職員・父母・卒業生・地域社会など、学園を構成する関係者すべてに愛着心を持たせ、新時代に広く開かれた大東文化学園を対外的にアピールするためのものです。なお、毛筆によるロゴタイプは、青山杉雨氏の揮毫によるものです。

平成13（2001）年12月1日、
ロゴタイプなどの祝賀パーティー

大東ラグビーのパワーと粘りが炸裂、早明を破り念願の王座奪回に成功

勝利者だけに贈られる栄誉という名の勲章が、若き89人のラガーメンの胸に輝いていました。

冷たい北風がグラウンドを吹き抜ける中、89名の部員が一丸となったパワーと気迫に満ちたプレーに、スタンドの観客から惜しみない声援とエールが送られました。

第31回全国大学ラグビー選手権大会の決勝戦が、平成7(1995)年1月6日、東京・国立競技場に3万4,000人の観客を集めて行われ、準決勝戦で早稲田大学に快勝した大東文化大ラグビー部は、決勝戦においても22対17で明治大学を破り、6年ぶり3度目の優勝を果たしました。

大東ラグビー部は、過去第23回と第25回大会で優勝という栄冠に輝きました。今大会の決勝戦の相手となった明治大学は、3年前の決勝戦で惜敗した因縁の宿敵で、ようやくその雪辱を果たすことができました。

表彰式に臨んだ井沢航主将(当時経済4年・三洋電機)率いる15人のメンバーに賞状と優勝旗が手渡されると、スタンドで試合を見守っていた佐藤定幸学長をはじめ鈴木武夫理事長、父母、卒業生、その他多くの大東ファンから一段と大きな歓声と拍手が沸き起こっていました。

中本博皓ラグビー部部長は、「今回の優勝は89人の全部員の努力の結晶。選手を育ててくれたご両親やご家族の方々に心から感謝を述べたい」と、部員の健闘を讃えました。

王座奪回に成功した、ノーサイドの瞬間

伝統ある箱根駅伝に、堂々の復活宣言、陸上競技部が総合3位に入賞

風速10mの逆風をものともせず、チーム一丸となって緑のタスキをつなぎました。

選手の一人ひとりが、この日を信じて走り続けてきた。
雨の日も風の日も、ただひたすらに、そしてひたむきに。
大東文化大陸上競技部の伝統に新たな一歩を記すために。

新春恒例の通称“箱根駅伝”で知られる東京箱根間往復大学駅伝競走の第73回大会は、平成9(1997)年1月2·3日の両日、往復10区間(214.7km)で争われ、大東文化大陸上競技部が11時間23分49秒の成績で、総合3位に入賞しました。

これまで4度の優勝実績を誇る大東文化大陸上競技部は、実井謙二郎氏(アトランタ·オリンピック男子マラソン代表選手)が主将を務めた平成2(1990)年の第66回大会と翌年第67回において2連覇を達成して以来、上位入賞を果たせずにいました。しかし、平成8(1996)年の第72回大会で5位に入賞し、復活の兆しが見えてきました。

大学旗を持った学生や卒業生、父母、教職員らが選手を激励するため沿道に詰めかけ、また田村房夫常務理事、小野幸二体育センター所長、西牧照福父兄会長ら28名からなる応援団も2日間にわたって声援を送り、選手たちを励まし続けました。大東文化大の関係者すべてが心を一つに結集した、歴史に残る大会の一つとなりました。

2連覇して優勝のテープを切る濱矢選手。
平成3(1991)年1月2日

東松山キャンパスでの初の開催となった、記念すべき80回目の大東祭

すがすがしい秋の空の下、学生たちの若きパワーが祭りを盛り上げました。

東松山キャンパスを会場に開催された大東祭は、地域と密接な関係を築いていくため、市民との交流を深める絶好の機会となりました。

平成14(2002)年11月2日から3日間にわたって、東松山キャンパスで第80回大東祭が開催されました。東松山キャンパスは、昭和40(1965)年に学校用地として国から払い下げられた埼玉県東松山市岩殿に位置する東京ドーム6.2個分の広大なキャンパスで、創立60周年記念事業の一環として昭和63(1988)年に現在の近代的なキャンパスへと一新されました。

これまで大東祭は板橋キャンパスで開催されてきましたが、80回目という記念すべき節目の年に、初の東松山キャンパスでの開催という2つのメモリアルが重なりました。

開会セレモニーでは、実行委員長の西岡篤史さん(当時・中国文3年)が「大東祭は大きな生き物だ。東松山市をはじめ地域の人々、参加団体のみんなで生き物をつくりあげましょう。そして、来場される方々は血。生き物に血を通わせて"ひがしまつりやま"にしましょう」と挨拶しました。学園祭には、東松山市民をはじめ近隣住民の方々も多数来場し、学生たちは地域の人々との交流を深めました。

開会式であいさつする西岡委員長

国際化時代の新たな拠点を目指し、地域も参加しての先駆的なイベント

卓越したスピーチとパフォーマンスに、会場は笑いと歓声に包まれていました。

学生の自主企画による初の英語スピーチ・コンテストは、近隣から集まった高校生や地域の人々などが来場し、500人収容可能な講堂に立ち見ができるほどの盛況ぶりでした。

平成12(2000)年10月26日、東松山校舎六十周年記念講堂において、大東文化大初の英語スピーチ・コンテスト(ESC)が開催されました。このコンテストは、高校生の部と大学生の部からなり、企画から内外への宣伝活動、さらには会場の設営に至るまで、国際関係学部の学生が中心となり運営されました。

ジャズ研究会の演奏でコンテストは幕を開け、片岡弘次国際関係学部長の開会宣言が行われました。応募者75人から予選を勝ち抜いてきた大学生の部20人と高校生の部4人が、趣向をこらしたパフォーマンスを交えてスピーチを披露しました。

栄えある最優秀賞を獲得したのは、法律学科から参加した鈴木理恵さん(当時・2年)でした。高校生の部優秀賞は、松岡早枝子さん(当時・埼玉県立和光国際高校1年)。会場からはスピーチ・コンテストのすべての参加者に惜しみない拍手が贈られ、大会は成功のうちに幕を閉じました。

司会を担当した、森裕嗣さん(右)と大橋優加さん(左)

東洋固有の文化を原点に、
西洋文化を探求しながら
東西文化の融合をはかり、
新たな文化の創造を目指した
建学の精神を心の拠りどころとして、
歩み続けた大東文化大学80年の
軌跡を振り返ってみよう。

心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り

大東文化大学創立80周年誌

From Tetsuo Takeuchi

大東文化大学80周年を迎えて。

未来を見据えるためには、歴史を振り返ることが必要

大東文化学園 理事長
竹内 哲夫

平成15(2003)年9月20日をもって大東文化大学は、創立80周年を迎えることとなりました。

今日、大東文化大学は7学部17学科に加え、大学院の5研究科を擁する文科系総合大学として、学生数も約1万4,000名とわが国諸大学の中でも大規模な大学の一角を占めるまでに至っています。

しかし、この80年を振り返ると、その道は決して平坦なものではなく、時にその存亡の危機に直面したことさえありました。これらの苦難を乗り越えて今日あるのは、この大学にかかわる人たち、すなわち理事、教職員、卒業生、父母の情熱と努力の賜物であり、これを受け入れてくださった篤志の方々のご支援によるものであります。

大正12(1923)年、第46回議会の決議により設立を見た、極めて異色な教育機関として大東文化学院が今日の大学の母胎であり、以来、東洋固有の文化を出発点として、西洋文化を探求、吸収し、東西文化の融合をはかり、新たな文化の創造を目指すとの建学の精神は、現在に至るまで脈々として存在し、まさに現代から将来に向けての時代の要請にも適合した素晴らしいものであり、80周年を迎えるに当たり、改めて私たちに誇りと勇気を与えてくれるよりどころであります。

今日、わが国は、明治維新、敗戦に次ぐ第三の大きな転換期にあると言えます。大学を取り巻く環境も社会、経済の変化に加え、少子化時代の到来を迎えて生き残りをかけた競争が展開されています。延長線をたどるだけでは、未来の展望を開くことが困難な時代です。こんな時こそ、私たちは校歌に「心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り」とあるように、自らの軸足をしっかりと据えて変化に対応する必要があります。その上で、最高の教育機関として社会のニーズに応え役割を果たすべく、それこそ教職員が本気で一体となり、大東文化大学の将来のため取り組まなければなりません。「未来を見据えるためには歴史を振り返ることが必要だ」といわれます。この80周年を期に、先達たちが残した労苦を思い起こして発奮の糧とし、また飛躍へのバネとしようではありませんか。

今、東松山校舎に続き板橋キャンパスの再整備が行われつつあります。完成の暁には、この新しいキャンパスに清新な教育の内容を盛り込んで、大東文化大学の100周年を迎える日まで皆で頑張りましょう。

From Toshiaki Sutoh

80周年を機に、100周年へ向けてさらなる発展を。

社会に深く信頼される個性あふれる大学として

大東文化大学 学長
須藤 敏昭

創立80周年を心から祝いたいと思います。80年の歴史は重く、ここに至るまでの先輩教職員、卒業生の皆さんのご労苦に深く敬意を表します。

50周年、70周年に際しては、それぞれ『五十年史』『七十年史』を刊行しましたが、このたびは最近10年の記録を中心に編纂した『記念誌』とすることといたしました。100周年の折には『大東文化大学100年史』を刊行することになるでしょうが、それを展望しながら、本誌の刊行と80周年記念諸事業が、本学のさらなる発展と飛躍のための貴重な契機となるようにしたいと考えます。

今日、日本の大学はきわめて厳しい競争的環境のもとにおかれ、ここ数年のうちに「勝ち組」と「負け組」との差がはっきり出てくるといわれています。その中にあって、本学は、社会に深く信頼される個性あふれる大学として、この機に大きく前進しなければなりません。

近年、各学部でのカリキュラム改革、環境創造学部、経営学部、書道学科の開設、全授業科目を対象にした授業評価アンケートの導入など、大学の改革・改善に取り組んできましたが、なお一層の努力が必要です。

80周年記念事業を展開するにあたっては、本学建学の精神「東西文化の融合」とこれまでの実績をふまえ、「アジア・世界に開かれた新しい都市型大学の創造」というコンセプトのもとに、中国をはじめとするアジア、環太平洋、さらには全世界との交流を強化することを重視してきました。これは本学が今後も教育・研究において目指すべき基本方向であります。アジアの一員として広い国際的視野をそなえた有為の人材を世に送り出す大学として社会の評価をさらに高めていかねばなりません。

また、本学の伝統である「実力重視」の堅実な学風を維持し、これからも学力、気力、体力を兼ね備えた、真に実力を有する人材を社会に送り出していきたいと考えます。

学友間、学生・教職員間が親密な大学であるという伝統も引き継ぎ、今後も生き生きとした「学びの共同体」でありたいと思います。

80周年を祝うさなかに新しい板橋校舎が完成しつつあることも、私たちに大きな希望を与えてくれます。壮麗な中にも落ち着いた新キャンパスを舞台に、90周年、100周年に向けて旺盛な教育・研究活動を展開していきたいものです。

心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り

大東文化大学創立80周年記念誌●目次

3 「大東」の“D”と、「文化」の“B”をモチーフに、21世紀に飛躍する『翼』を表現した斬新なデザイン
4 大東ラグビーのパワーと粘りが炸裂、早明を破り念願の王座奪回に成功
5 伝統ある箱根駅伝に、堂々の復活宣言、陸上競技部が総合3位に入賞
6 東松山キャンパスでの初の開催となった、記念すべき80回目の大東祭
7 国際化時代の新たな拠点を目指し、地域も参加しての先駆的なイベント

10 大東文化学園 理事長 竹内 哲夫 大東文化大学80周年を迎えて

11 大東文化大学 学長 須藤 敏昭 80周年を機に、100周年へ向けてさらなる発展を

14 大東文化大学校歌

16 第1章 黎明から成熟へ

18 創立に至るまで
20 大東文化学院●九段時代【大正12(1923)年から昭和16(1941)年】
22 Column 1 平沼騏一郎
23 大東文化学院●池袋前期時代【昭和16(1941)年から昭和21(1946)年】
24 Column 2 児玉花外
26 大東文化学院●青砥時代【昭和21(1946)年2月から昭和24(1949)年10月】
28 大東文化大学●池袋後期時代【昭和24(1949)年10月から昭和36(1961)年8月】
29 Column 3 青山杉雨
30 大東文化大学●板橋・東松山時代【昭和36(1961)年8月から平成4(1992)年】
31 Column 4 小林昇

32 第2章 新たなる時代へ

34 第1節 粛々と、変革●模索する教育改革の理念

35 ①多様化する社会に適応したカリキュラム改革を実践
38 ②さらなる質的向上を目指した、入試改革
38 ③全学的行事としてキャンパス見学会を開催
39 ④大学教育と学生による授業評価を考える
40 ⑤自己点検・評価規程を制定
41 ⑥「彩の国大学コンソーシアム」を結成
41 ⑦セクシュアル・ハラスメント基本規則始動
42 ⑧「大学教育の現状と未来を考える連続講演会」を4回にわたり実施

43 第2節 蒼々と、躍進●学部・大学院の整備拡充

44 ①経営学部に、企業システム学科を開設
45 ②経済学部を社会経済学科と現代経済学科に改組
46 ③環境創造学部環境創造学科開設・新人間環境宣言
47 Column 5 第1回内外自然保護・リサイクル事情研修の実施
48 ④日本語を世界の一言語・一文化ととらえる日本語学科開設
49 ⑤漢字文化および仮名文化に立脚する国内初の書道学科スタート
50 ⑥政治学科に平成6(1994)年大学院政治学専攻を増設
52 ⑦文学研究科書道学専攻修士課程が開設
52 ⑧高度な外国語能力を有する人材の育成
53 ⑨経済学部・経営学部の学部教育を土台に大学院教育が一層充実
54 ⑩学部、学科の創立記念を祝うさまざまな行事、祝賀会を開催

56 第3節 森々と、飛翔●全学に広がる国際交流の輪

57 ①学術資料や人の交流による、学術的向上を図る中国との交流
58 ②トンガ王国ツポウ4世国王に名誉博士号贈呈
59 ③アメリカ合衆国ウエスト・フロリダ大学など海外の大学との交流協定
61 ④同時通訳者育成のために、通訳演習室が完成

62 第4節 清新と、共生●地域に開かれた大学を目指して

63 ①書の美学を再発見。全国書道展と書道講座を開催

63 ②アジアの民族と文化を知るために
64 ③大東文化大学と板橋区による地域連携。「地域デザインフォーラム」が開始
66 ④エクステンションセンター開設10周年記念シンポジウムを東松山校舎で開催
67 ⑤ビジネス・インターシップを開始
67 ⑥国際関係学部の民族資料室を公開
68 ⑦ピーター ラビット・デー（英文学会／ビアトリクス・ポター・コレクション）

69 第5節 淡々と、学究●幅広い研究活動

70 ①総語彙26万語の中国語大辞典が完成
70 ②『21世紀の民族と国家』（全11巻）を刊行
71 ③大東文化大学創立七十周年記念論集が完成
71 ④中村邦生文学部教授が文学界新人賞を受賞
72 ⑤学部・研究所が主催して国際シンポジウムなどを開催
74 ⑥書家の上條信山氏が文化功労者に選ばれる
75 ⑦『松方正義関係文書』（全18巻、別巻）を刊行
75 ⑧上方落語を繁栄に導いた立役者、桂米朝

76 特別対談 桂米朝×濱久雄 人間国宝桂米朝師匠、大いに語る

88 第6節 着々と、発展●キャンパスの整備

89 ①知の殿堂としてさらに充実へ、板橋キャンパスに新校舎
92 ②陸上競技部の新合宿所の愛称は「ATHLETE-EGG」
92 ③平成11（1999）年5月、ラグビー部合宿所が竣工
93 ④交換留学生が安全で快適に生活できるために
93 ⑤教育研究における情報環境の進展
94 ⑥平成6（1994）年6月、菅平セミナーハウスが完成
94 ⑦嬬恋セミナーハウスに学問（まなび）の湯

95 第7節 賞賛と、功績●輝く学生の栄光の記録

96 ①充実の司法試験コース、高度な実力を養成
96 ②文学界新人賞の橘川有彌さんが、学長賞も受賞
97 ③権田瞬一さんが、在学中に日展に3回入選
97 ④第14回スペインギター音楽コンクールで優勝
98 ⑤アトランタ・オリンピックのマラソンとレスリングで、本学OBが健闘
100 ⑥金井選手がアジア大会のテコンドーで銅メダル
100 ⑦学生氷上競技選手権大会で、スケート部女子が総合優勝
101 ⑧清水選手が、一般参加としては大会史上初の優勝
101 ⑨山内選手が学生日本一をつかみ、武蔵川部屋に入門
102 ⑩Hakuba杯サマージャンプ大会女子の部で金井選手が優勝
102 ⑪加藤選手、レスリング全日本4大大会で優勝
103 ⑫全国学生躰道優勝大会で史上最多11回の優勝

104 第3章 輝ける明日へ

106 特別座談会 大東文化大学の現況と未来を語る

118 資料編
120 大東文化大学80年の軌跡
124 学部・学科組織表
125 事務組織表
126 土地・建物の面積
127 学生数一覧
128 外国人留学生数一覧
129 歴代総長・歴代理事長・歴代学長
130 大東文化大学第一高等学校
131 大東文化大学附属青桐幼稚園
132 大東医学技術専門学校
133 大東文化大学 父兄会・同窓会

二、あしたに思ふ 遠き道
ゆうべに考へる わが叡知
採長補短 ゆるぎなき
国のもとには 誰が負う

ああ東洋の この文化
負ひてささえむ 日本の
不滅の光り 掲ぐべき
若き力は ここにあり
起ちて護らむ 大東文化
起ちて弘めむ 大東文化

大東文化大学校歌

作詞　谷　鼎
作曲　信時潔

一、流れはるけし　東洋の
古き鑑を　温ねては
知新の実を　かてむと
日夜にはげむ　われらあり

心は放て　天地間
まなこはさらせ　世の移り
澎湃の浪　高くとも
稚さす水脈は　まぎれなし
起ちて護らむ　大東文化
起ちて弘めむ　大東文化

大東文化大学80年の足跡を顧みるとき、それは近代日本における精神の変遷と対峙します。
明治維新以降、怒濤のごとく流入する欧米諸国の文明・文化に翻弄されつつも、
これを積極的に受容し、わずか半世紀ほどで先進諸国の仲間入りを果たした日本にあって、
一途なまでに我が国固有の美風を尊ぶ建学の精神を貫かんとして苦闘の日々を重ねてきました。

大学創立80年の軌跡［創設から平成4（1992）年］

第1章

黎明から

聖廟懐古のために訪れた
古寺の前で。昭和8（1933）年

成熟へ

大学創立80年の軌跡

至るまで

創立に

東洋文化を振興し我が国の伝統の美風を再興しようとの精神から誕生した異色の大学。

日本の近代化とともに衰退の一途をたどってきた漢学の研究を中心に、東洋学術研究の振興に務めることを建言した木下成太郎の「漢学振興ニ関スル建議案」が、本学創立の貴重な第一歩となりました。

大東文化学院開院式で、祝辞を述べる大木会頭。大正13(1924)年2月11日

明治時代、急激な欧米化の移入によって、日本古来の伝統に裏打ちされた固有の文化が見失われつつありました。さらに大正時代に入ると、第一次世界大戦の影響によって物質文明謳歌の気風が社会全体を支配するようになりました。こうした中、漢学を振興することによって日本人古来の道義を取り戻そうとの東洋文化振興の機運が、次第に高まっていきました。

木下成太郎碑の裏文(札幌中島公園)

大正7(1918)年、原内閣の成立とともに、木下成太郎は東洋学芸の振興策について建言しました。そして、大正10(1921)年3月8日の第44国会(原内閣)において、「漢学振興ニ関スル建議案」が衆議院に提出され、満場一致をもって本案を可決し、政府に提出。その2年後の大正12(1923)年の第46議会(加藤友内閣)で予算づけがなされました。

その後、衆議院において再三にわたって「漢学振興ニ関スル建議書」を提出し、政府に対してその実現を促しましたが、なかなか決定までには至りませんでした。そこで、漢学振興に関する推進団体を民間に設ける必要があるとみた有識者たちが団体を組織して、5度にわたる協議会を開催し、大正12(1923)年2月11日大東文化協会を創立しました。

大東文化協会発会式の様子が、当時の東京日日新聞(毎日新聞)に掲載されている。大正12(1923)年2月10日

大東文化協会から大東文化学院、さらには今日の大東文化大学へと至る出発点となった「漢学振興ニ関スル建議案」に示されている内容は概ね次のとおりです。

漢学ハ古来我ガ邦ノ文化ニ貢献シ国民思想ノ涵養ニ資益セシ所大ナルモノアリ。而シテ今後亦之ニ待ツ所少シトセズ。之ガ振興ノ途ヲ講ズルハ刻下ノ急務ナリトス。依テ政府ハ之ニ関シ適当ノ方法ヲ施サシムコトヲ望ム。右建議ス。…

また、理由書には次のように述べられています。

漢学ガ古来我ガ邦ノ文明ニ貢献シ国民思想ノ上ニ資益セシコトノ大ナルハ言ヲ要セザル所ニシテ、今後亦之ニ待ツ所少カラザルモノアリ。然ルニタビ西洋文芸ノ伝来スルヤ人々之ニ走ルニ急ニシテ漢学ハ疎ンゼラレ其ノ神髄ヲ覗フコト漸ク難キニ至ラントス。今日ニ於テ振興ノ途ヲ講ズルハ実ニ急務ナリ。是レ本案ヲ提出スル所以ナリ。

『大東文化大七十年史』10ページより

漢学ハ古来我ガ邦ノ文化ニ貢献シ
国民思想ノ涵養ニ
資益セシ所大ナルモノアリ。

大東文化学院

横須賀軍港を見学し、
軍艦の前で記念撮影を行う。
昭和10(1935)年2月6日

大東文化学院が創立した大正12(1923)年から、
校名を「大東文化大学」と改める
昭和28(1953)年までのおよそ30年間は、
戦禍に巻き込まれ、翻弄されながらも
建学の精神を貫いた気骨に満ちた時代でした。

明治神宮に参拝。昭和7(1932)年

時代

関東大震災や太平洋戦争が人々を打ちのめした暗い時代に、希望の道筋を指し示した大東文化学院時代。

九段

大学創立80年の軌跡
【大正12(1923)年から昭和16(1941)年】

児玉花外の「天鐘追憶の歌」の一節に、「大東文化学院の梧桐の窓の面影に…」とあるように、開校当時の大東文化学院は、梧桐に囲まれた校舎であったといわれています。かつて校舎のあった場所には、現在記念碑が建立されています。

発祥の地である東京・九段に、平成元(1989)年顕彰碑が設置された

大正12(1923)年2月11日、漢学振興策の第一歩として大東文化協会を創立し、同年9月20日財団法人ならびに大東文化学院の設立が認可され、麹町区富士見町6丁目16番地に大東文化学院を開校しました。以来、本学の創立記念日を9月20日とするのは、この日に起因しています。

大正13(1924)年1月11日に第1回入学式を挙行し、次いで2月11日に開院式が行われました。

大東文化学院は、本科3年課程と高等科3年課程からなり、政府からの豊かな補助金に支えられ、全学生に対して授業料が免除されたほか、本科には25円から35円、高等科には50円から80円が支給され教科書も無料という、当時の学生は極めて優遇されていました。

時代は大正から昭和へと移り、昭和12(1937)年7月には日中戦争が勃発、日本は太平洋戦争へと傾斜していきました。そのような中、文部省からの補助金が減らされ、学生たちへは次第に小遣い銭にも事欠くようになっていきましたが、それでも余暇には映画を鑑賞したり人生や哲学を論じ合うなど、青春を謳歌するゆとりがまだありました。

書道部の部員たち。昭和11(1936)年

函嶺蘆の湖畔にて。昭和16(1941)年

大東文化学院事務室の様子。昭和10(1935)年

弁論部遊説隊出発に先立ち明治神宮に参拝。昭和10(1935)年ころ

狭くてオンボロだった九段の校舎に、学生たちは愛着を感じながら勉学に励みました。

書道の講義で教壇に立つ
岡田正之。昭和2(1927)年

図書館で勉学に励む学生たち。
昭和12(1937)年

射撃訓練に励む射撃部。昭和7(1932)年

九段校舎は、元法政大学の旧校舎で傷みがひどく、また敷地が狭かったため、学生たちは窮屈さを感じていましたが、このオンボロ校舎に限りない愛着を感じていたと、当時を知る同窓生は『大東文化大学七十年史』に記しています。

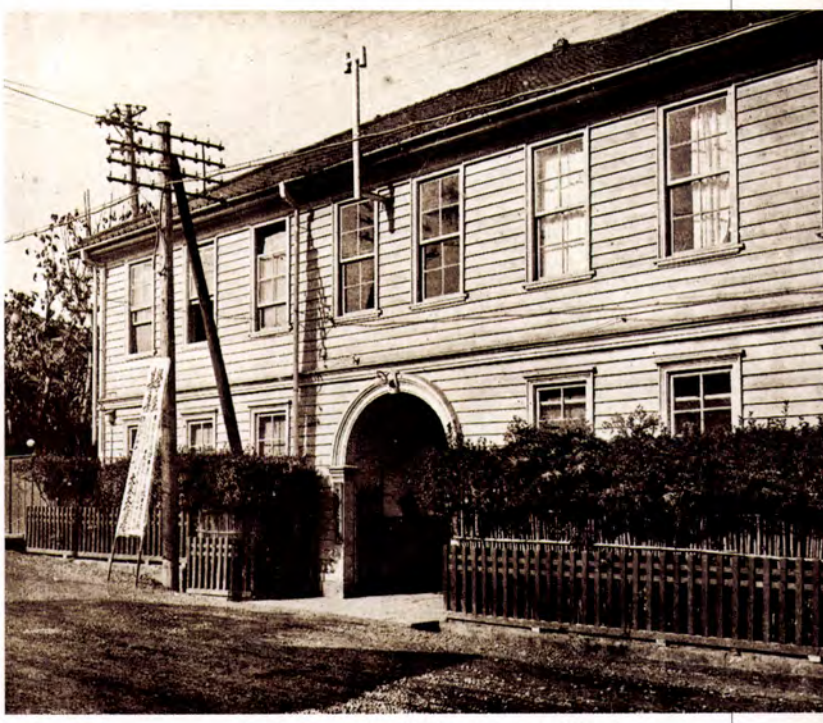
入学宣誓式。昭和12(1937)年

射撃部の部員たち。昭和12(1937)年

弓道部の活動の様子。昭和11(1936)年

昭和13(1938)年4月1日、戦時体制強化のため国家総動員法が公布され、日本はいよいよ戦時色を強めていきます。大東文化学院も時局に沿って学制を改め本科を、従来通りの漢学を主体とする第一部修身漢文科(中国文学科の前身)、第二部国語漢文科(日本文学科の前身)、大陸経営の要員を養成する第三部東亜政経科(経済学部の前身)の三部制としました。

三部制の設置に伴い拡大した学院は、新たな校舎を池袋の地に建設し、昭和16(1941)年2月8日に移転しました。時に太平洋戦争開戦の年でした。



創立当初のモダンな九段校舎。大正12(1923)年ころ

Column 1

平沼騏一郎

Kiichiro Hiranuma

日本の未来をひたすら思いながら、復古的日本主義を貫いた政治家。

岡山県の藩士の息子として生まれ、明治・大正・昭和と、激動の近代日本を駆け抜けた大東文化大学初代総長平沼騏一郎。その生涯は、波乱に満ちた人生でした。

大正12(1923)年9月25日からおよそ一年半にわたり、大東文化大学の初代総長を務めた平沼騏一郎は、明治維新以降、怒濤のごとく流入してきた欧米化の波に呑み込まれ、やがて戦争へと突き進んでいく近代日本の中にあって、波乱万丈の生涯を送ります。

慶応3(1867)年、美作(岡山県)津山藩士平沼晋の子として生まれた騏一郎は、明治21(1888)年東京帝国大学法律学科を首席で卒業後、司法省に入り判事となります。明治38(1905)年に大審院検事、その翌年に民刑局長を兼任し、日糖事件の摘発や大逆事件では主任検事として捜査を指揮しました。そして、大正元(1912)年に検事総長となり、大正3(1914)年には、ドイツのシーメンス社が軍艦の受注に絡み海軍高官に賄賂を送ったとされる『シーメンス事件』の総指揮をするなど、司法界のエリートコースを駆け上っていきました。

大正12(1923)年、第二次山本権兵衛内閣の司法大臣として初入閣したその翌年、後の昭和天皇となる裕仁親王の暗殺を謀った『虎ノ門事件』が発生。この事件は、無政府主義を唱える青年が引き起こした事件でしたが、平沼はその責任をとって辞任しました。

大正13(1924)年貴族院勅撰議員、枢密顧問官となり、社会運動や西洋物質文明を害毒とし、復古的日本主義による国民教化を目指した『国本社』を創立。そして、昭和11(1936)年には、天皇の最高諮問機関である枢密院の議長に就任しました。

昭和14(1939)年第一次近衛内閣の総辞職後、平沼は第35代総理に就任し、国民精神総動員運動を展開します。しかし、ソ連との関係が悪化する中、日独伊三国同盟を結ぶことを主張していた平沼にとって、独ソ不可侵条約が締結されたことは衝撃的で、平沼内閣は総辞職しました。このとき「欧州情勢は複雑怪奇」と放った言葉が流行語にまでなりました。その後、日本の戦況が悪化し敗戦の色が濃くなる中で、ポツダム宣言の受諾に反対した一人と言われています。

昭和23(1948)年、敗戦後の軍事裁判によって、平沼は戦争首謀者として終身禁固刑を言い渡され、昭和27(1952)年に病気による仮釈放の直後、その激動の生涯を終えました。

平沼騏一郎は、西洋化により伝統を失いつつある日本を憂い、復古的日本主義思想を復興させようと活動しました。

前期時代

池袋

大学創立80年の軌跡
【昭和16（1941）年から昭和21（1946）年】

大東文化学院の校舎が九段から池袋へと移った昭和16（1941）年は、日本が戦渦に巻き込まれていった太平洋戦争開戦の年にもあたる、本学80年の歴史の中で最も突出した激動の時代でした。

新入生歓迎会の様子。
昭和19（1944）年

戦況の悪化とともに、東京への空襲は激しさを増し池袋校舎は焼夷弾の直撃を受け焼失してしまいました。

昭和16（1941）年に九段から池袋に校舎を移転したその年の12月、太平洋戦争が勃発します。

池袋の新校舎は、正面が学院事務室、教員室、協会事務所を備えた木造モルタル2階建てで、その裏に食堂兼ホールのあるコの字型の校舎が連なっていました。

東京大空襲によって焼失した池袋旧校舎。
昭和16から20（1941から45）年

戦争が本格化する中、本科18期生は、昭和18（1943）年9月に繰り上げで卒業した後、高等科へ進む者もいましたが、理工系学生以外の学徒徴兵猶予制限が停止され、徴兵年齢も引き下げられるようになり、多くの学生たちは12月1日の学徒出陣で戦地へと旅立っていきました。

昭和19（1944）年からは、残りの全校生が神奈川県の浦賀ドックに勤労動員としてかり出され、油槽船や戦時標準船の釘打ち作業に従事しました。

昭和20（1945）年4月13日夜11時から14日未明にかけ、170機ものB29爆撃機が東京に来襲し焼夷弾を投下。皇居、明治神宮とともに池袋校舎も焼失してしまいました。この空襲による東京の犠牲者は20万人にも上りました。当時、学院の用務員をしていた磯ヶ谷さんは、「職員2人と防空要員の学生10人くらいで泊まり込んでいたが、焼夷弾の直撃を受けたため、重要書類を防空壕へ移して逃げ出すのが精一杯だった。椎名町駅の辺りから校舎が燃えるのを見つめているよりほかに手の施しようがなかった。防空壕の書類も壕内で焼失し、無事だったのはもう一人の職員が身につけていた『教育勅語』だけだった」と、『大東文化大学七十年史』の中で語っています。

海洋班が、学徒出陣を前に記念写真。昭和18（1943）年

酒井忠正総長は、高田馬場に近い邸宅の大きな応接間と別棟の使用人の長屋を区切って、急遽仮校舎としました。跡形もなく焼け落ちた校舎跡には、酒井総長の邸宅までの案内図が建てられ、まるで寺子屋のような授業が行われました。酒井邸での授業は、わずか三カ月ではありましたが、行き場を失った学生たちにとってはかけがいのない心のよりどころとして、本学の歴史に貴重な一時期を記しました。

学生たちを集め教官訓練が行われる。昭和17（1942）年

酒井総長は、焼失した池袋校舎の代わりにと自らの邸宅を供出して、授業を続行させました。

Column 2

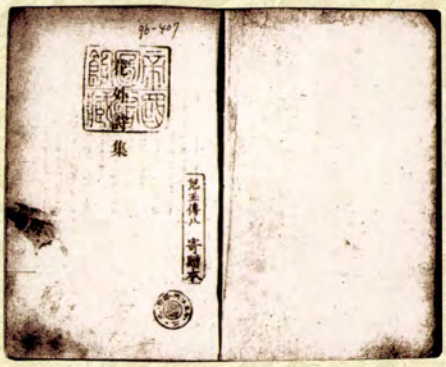
児玉花外

Kagai Kodama

抒情的浪漫主義から博愛主義へ。近体派の詩人、児玉花外の変遷。

文＝鈴木定宏

本学の学生歌を作詞し、明治大学校歌「白雲なびく 駿河台…」を作詞した児玉花外は、近代文学史上重要な位置を占める近体派詩人の十指に数えられる、才能に恵まれた詩人でした。知られざる晩年と本学の学生歌への思いを顧みます。



花外の詩集（児玉傳八氏寄贈）

花外は、明治30（1897）年ころから本格的な詩作活動を始め、河井酔茗らと合同詩集を出版したほか、評論集も創刊するなど、その活動は旺盛でした。土井晩翠や徳富猪一郎との親交も深く、幾多の文芸誌に多くの作品を発表しています。中でも代表作とされる明治36（1903）年『新小説』に発表した「馬上哀吟」は、当時の若者の心を捉え愛唱された作品です。明治32（1899）年共著の処女詩集『風月萬象』の巻頭に見られる「雞の歌」がそうであるように、花外の詩は社会性を帯びた詩であり、叙情詩と社会詩が平行して詠まれていったところに大きな特性があります。

雞の歌

革命をそれ雞の
聲になぞらへ歌はん乎
眠る天地を一聲に
のどけく高く呼びさます
力はにたり光なき
死せる此世に聲揚げて
生命をよばふ人のごと
暗きねぐらに獨りさめ
光を慕ふ眼のさまは
自由の燭を手にとつて
闇世を照らす人のごと

社会主義者片山潜・幸徳秋水らとの交際を深める中で詠まれた諸作品は、発売直前に発禁処分を受けて元版までも押収され、その全ては闇の中に葬られてしまいました。昭和34（1959）年発行の『明治大正詩書人気番付』（日本古書通信社）を見ると、「横綱＝社会主義詩集・花外［明治36（1903）年］、大関＝楚因の詩・透谷［明治22（1889）年］、関脇＝十二の石塚・半月［明治18（1885）年］」と紹介されており、発禁本の『社会主義詩集』が古書蒐集家の間でも、珍本中の珍本とされる幻の一冊であったことがわかります。

明治・大正時代の多くの詩人たちがそうであったように、花外の作品の中にも抒情的浪漫主義が漂います。社会の不合理、階級的差別への反発などを作品の中で展開した点は、大きく評価されるべきですが、発禁事件後の彼の日常生活に、詩の中で展開される社会主義者としての進展があったかという点については、疑問の余地が残ります。むしろ体制下にあって、彼の資質としてもっていた至誠の情が、大きく進展していったと見るべきでしょう。いわゆる、愛国主義的詩人児玉花外と呼ばれる評価ですが、これも花外の真の姿を捉えていません。

昭和9（1934）年、彼は右脚部疾患のため、帝國大学付属病院へ入院し、その後身寄り無き患者として、東京市板橋養育院へ移送されます。血筋をひく者は故郷山口に住んでいましたが、病に苦しむ彼を見舞ったという事実は残されていません。昭和16（1941）年に出版された『児玉花外愛國詩集』は、旧作を中心に編集したものですが、養育院での作品も「養育院即興」と題し所収されています。

また花外は、養育院で日蓮宗僧侶渡辺信覚日統上人と出会い、帰依したことによって人間として大きく進展し、彼のもう一方の資質である博愛の情が開花しました。『娑婆即寂光＝人間が生きる此の世こそが佛の光が行き届く世であり、またそうでなけれ

学生歌

作詞 児玉花外
作曲 梁田 貞

丈夫死すとも楯となる
靖国神社を囲みつつ
万桑(ばんだ)の桜咲くところ
大東文化の源泉に
あした百練の鉄をねる
意気こそ徹れ真心の
雪にそびゆる芙蓉峰

墓碑の裏面には「彼岸光の歌」と題した詩が刻まれています

詩集をかたどった花外の墓。静岡県中伊豆町地蔵堂の上行院

ばならない』という信覚日統上人を通して語られた日蓮の教えの偉大さに感動し、花外は日蓮その人に帰依したのです。彼は波乱の人生を回顧し、帰依により恩讐の垣根を取り除くことができました。この平安の日々に詠まれた作品の中には、抒情的浪漫主義を超えた日蓮主義に基づく自由博愛の詩が多くみられますが、未だ埋もれたままになっています。それらがいずれ世に出る日は、さほど遠くないことでしょう。

花外の墓所は、静岡県田方郡中伊豆町地蔵堂の日蓮宗旧本門宗大見山上行院にあります。見開き型の堂々とした墓石の裏面に「彼岸光の歌」と題した七五調の詩が刻まれています。日蓮門徒にふさわしい慈愛あふれる名詩です。また墓石正面には、次の句が刻まれています。

妙法・霊山院超脱日靖居士
　妙法蓮の露一滴浮世洗ふ　花外

昭和18(1943)年9月20日、花外は敬愛する信覚日統上人の膝に抱かれ、穏やかな臨終を迎えました。世寿70歳の生涯でした。数えて60年後の平成15(2003)年9月20日が、本学創立80年の日にあたることは、まさに奇縁といえるでしょう。

昭和11(1936)年8月24日に詠まれた『天鐘追憶の歌』の中で花外は次のように詠んでいます。

桜花学生群がるる　大東文化学院の
梧桐の窓の面影に　蕭蕭秋涼に歌ふかな

本学の学生歌は彼の傑作の一つとして、花外の脳裏に残っていたのです。

本学の学生歌は彼の傑作の
一つとして、花外の脳裏に
残っていたと、記されています。

時代

戦後の混乱の中、教師も学生も互いに助け合い復活を遂げる貴重な第1ページを記した青砥校舎。

大学創立80年の軌跡
【昭和21（1946）年2月から昭和24（1949）年10月】

青砥

葛飾区青砥町の校舎で授業を行っていた青砥時代は、わずか3年足らずの短い期間でしたが、学生たちにとって、生涯忘れ得ぬ珠玉の3年間でした。

毛筆を使用しての進級試験は、大東文化大の伝統だった。昭和20（1945）年

昭和20（1945）年8月15日、多大な犠牲を払い多くの尊い人命を奪った太平洋戦争は、日本の敗戦という形で終結します。国内は、戦争による破壊と物資の不足で疲弊しきり、人々は食べる物さえもおぼつかない極限の中で、その日その日を必死に生き延びていました。

空襲によって池袋校舎が焼失し、酒井総長の邸宅を仮の校舎として授業は細々と行われていましたが、昭和21（1946）年2月、葛飾区青砥町4番地の新校舎へ移転することができました。戦地から復員してきた後、しばらく郷里に身を置いていた学生たちは、もう一度学問がしたいとの思いを胸に、青砥校舎へと続々と戻ってきました。

国策会社の寮と工場跡を再利用した青砥校舎

校舎は、中川の堤防そばにあった軍需工場の建物に少しだけ手を加えただけの粗末な建物でしたが、大教室、食堂、図書館、普通教室、そして「志道寮」と名付けられた学生寮も備わっており、学生たちはここで寝泊まりをしながら勉学に励みました。このころの学生数は400人ほどで、そのうち2割程度が志道寮で暮らしていました。

しかし、戦後の混乱と困窮した時代の中、食べる物や教科書にも事欠く有様で、勉学の道のりは決して楽ではありませんでした。それでも学生たちは、空腹を知識で満たすかのように書物をむさぼり、また教師たちも謄写印刷機で手作りの教科書を作って授業を行うなど、学問という御旗の下で一丸となって混迷の時代を必死に生き抜きました。

池袋新校舎へ移転するため、青砥校舎を後にする。昭和24（1949）年

青砥時代は、池袋に校舎が再建される昭和24（1949）年までのわずか3年あまりの短い期間で、しかも物資面では貧しい最も過酷な時代でしたが、精神的には満ち足りていた時代でした。

「志道寮」は、池袋校舎移転とともに廃寮となり南寮だけが残った

学生たちは空腹を忘れようと必死の思いで、日夜、勉学に打ち込み続けました。

卒業式で祝辞を述べる土屋学長。
昭和27(1952)年

寮歌祭で寮歌を合唱する学生たち。
昭和45(1970)年

大東文化大学

敗戦の痛手から立ち直り始めはじめた
昭和28(1953)年、大東文化大学と校名を改め、
建学の精神に基づく原点に戻り再出発します。
爾来、「大東文化」という錦の御旗のもと、
50年にわたる発展と繁栄の時代を迎えます。

後期時代

学制改革の渦に翻弄されながらも、自己のアイデンティティーを求道し続けた気骨ある精神に満ちた日々。

大学創立80年の軌跡
【昭和24（1949）年10月から昭和36（1961）年8月】

池袋

高度経済成長に沸いた
日本国内にあって、多くの大学が
学生運動の渦中に呑み込まれ
荒廃していく中、
本学は独自の穏健性を保ちながら
勉学に励みました。

政治経済研究部が開催した、
戸田武雄教授による講演会

昭和24（1949）年の学制改革によって、高等専門学校だった大東文化学院は廃止され、新制の東京文政大学として発足しました。いわゆる「大東文化」と名の付くものは、ことごとく消し去らなければならなかった情勢の中、大学設置の許可を取り付け、財政難を押して校舎の移転を果たした当時の本学関係者の努力は、並大抵のものでなかったと容易に想像できます。

池袋校舎の正門。昭和30（1955）年

青砥校舎から、戦争中に焼失した池袋へ戻ってきたのは、昭和24（1949）年10月のことでした。移転直後の池袋校舎は、木造2階建て1棟だけで、新制大学ブームで施設の善し悪しで入学する大学を決めようとする当時の状況下、1棟しかない東京文政大学への志望者は激減しました。しかし、社会人から入学する者や子育ての終わった親、また女子学生なども加わり、次第に学生数は増加していきました。

昭和26（1951）年、校名を東京文政大学から文政大学へと変更し、さらに昭和28（1953）年に大東文化大学と、現在の校名となりました。「大東文化」という校名に戻すことについては、学院時代の同窓生や在校生、特に学院の第一期生となった卒業生からの強い要望があり、新制大学の一期生から「大東文化大学」の名で卒業証書が授与されることになりました。

高度経済成長の走りの時期である昭和30年代は、日に日に東京が近代的な都市へと変貌していった時期でもありました。そのような中、日米安保問題による学生運動が大きな社会問題となりましたが、学内は平静を保ち続けました。以後、次第にエスカレートする学生運動にも巻き込まれることなく、独自の穏健な校風により平穏に大学運営が営まれました。

新入生歓迎会の様子。黒板には「文政大学」と書かれている

「大東文化大学」の校名が入った
卒業証書を手にした卒業生たち。昭和28（1953）年

昭和36（1961）年9月、新しい板橋校舎が完成し、本学は新たな時代を迎えることになります。

「大東文化」という
校名が復活し、
やがて高度成長時代へ。

Column 3

Sanwu Aoyama

青山杉雨

現代感覚にあふれた、独自の表現様式を確立。

平成4(1992)年書家で日本芸術院会員の青山杉雨・元本学教授が、書家としては3人目という栄誉ある文化勲章を受章しました。

『書道グラフ』No.11・12合併号(近代書道研究所)より転載

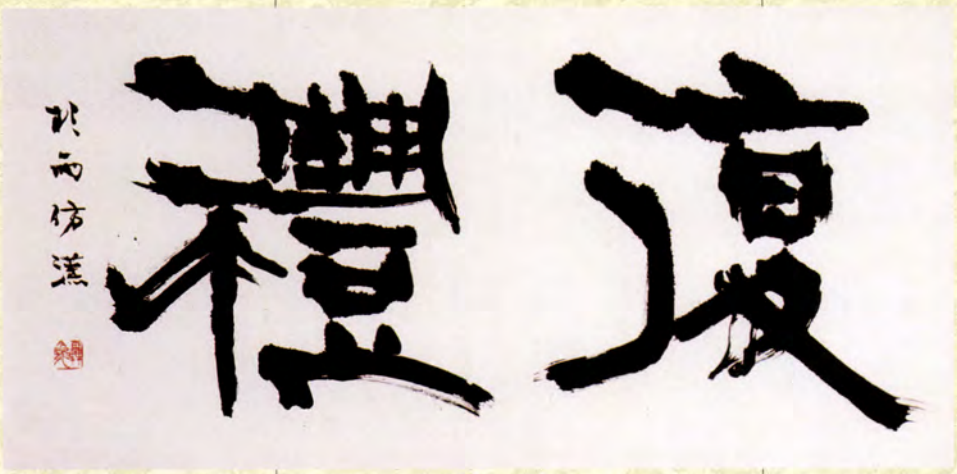
明治45(1912)年、愛知県葉栗郡草井町大字久野に生まれた青山文雄(杉雨)氏は、親類の中に書道家がいたことから書の道へと進み、30歳で書道家の西川寧氏に師事し、本格的に書家の道を歩み始めました。

昭和30(1955)年4月から、本学の講師となり、昭和34(1959)年から昭和61(1986)年まで教授をつとめたほか、昭和44(1969)年から昭和60(1985)年の16年にわたり本学書道文化センター所長をつとめました。

青山氏は、昭和38(1963)年に『周易抄』で日展文部大臣賞を受賞したのをはじめ、昭和41(1966)年には『詩経の一節』で日本芸術院賞を受賞しました。また、謙慎書道会理事長を歴任する傍ら、伝統の書に立脚しながら現代感覚の高い独自の表現様式を確立し、さらには後進の指導や団体の育成、国際交流にも尽力したその功績が認められ、昭和63(1988)年には、文化功労者に選ばれました。

文化勲章の受章に対して青山氏は、「書は美術の中でも、色は白黒、修正はきかないといった特殊な形式をもっています。西洋美術がいきづまったとき、彼らは東洋に何かを求めてくる。そのときに求められるのが書ではないかと、僕は昔から言っていました。その書が日本文化の中でも一層評価されるのは、うれしいことです」と、喜びを語っていました。

昭和31(1956)年以来、近代書道研究所から『書道グラフ』を発行しているほか、『文字性霊』『書の実相』『明清書道図説』など、数多くの著書も出版しています。[平成5(1993)年2月13日没]



『復禮』

青山杉雨氏は日本の書道界に貢献したばかりでなく、本学の教授としても学生たちの指導に尽力されました。

東松山時代

高度経済成長から安定成長時代の日本にあって、本学も飛躍と発展の時代から安定の時代を迎えました。

大学創立80年の軌跡
【昭和36(1961)年8月から平成4(1992)年】

板橋・

学部・学科の増設に伴う学生数の増大によって、板橋キャンパスが手狭となったため、埼玉県に「東松山キャンパス」を新たに建設しました。

緑の田畑に囲まれた板橋校舎。昭和36(1961)年ころ。昭和41(1966)年には、校舎兼体育館が落成し、同50年には五十周年記念館も建てられました。

昭和36(1961)年8月、池袋校舎から板橋校舎(現在地)へと移転し、本学はいよいよ大きく発展、飛躍を遂げる全盛の時代を迎えることになります。

新制大学設立当初の組織だった文政学部(日本文学専攻・中国文学専攻・政治経済学専攻)を改組し、文学部(日本文学科・中国文学科)および経済学部(経済学科)とすることが、昭和37(1962)年1月に認可されました。また、その後も学部・学科を増設し、今日の7学部17学科および大学院・専攻科を有する本学の骨格を築きあげるための重要なステップとなりました。

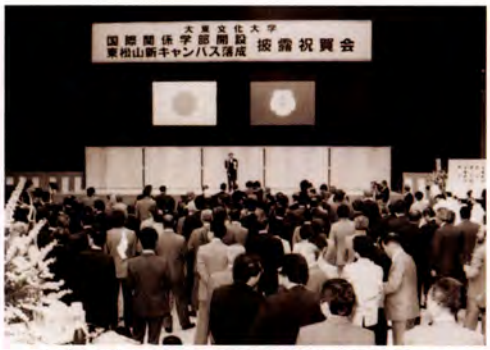
書道文化センター設置10周年を祝い、書き初め大会が催される。昭和54(1979)年1月14日

さらに、この時期は学部・学科の増設に伴い、校地・校舎などの拡張を図る必要性に迫られ、昭和40(1965)年9月に、学校用地として国から払い下げを受けた埼玉県東松山市大字岩殿字長坂の元国有林野3万4,459坪に、広大なキャンパスの建設が始動し、昭和42(1967)年4月に教養部として開校しました。

昭和47(1972)年、順調に右肩上がりの経済成長を続けていた日本に、「日本列島改造論」を旗印として掲げた田中角栄内閣が発足。しかし、その翌年第一次石油危機(いわゆるオイルショック)に見舞われた日本は、風評によるトイレットペーパーや洗剤の買い占めが横行。街からネオンが消えるなど、高度経済成長と成熟期の分水嶺となる大きな出来事でした。本学も同様、急速に発展した時代から安定成長期へと向かい始めていました。

盛大に行われた大学創立60周年の記念祝賀会

それから数年の歳月が流れ、東松山キャンパスの建設は、本学創立60周年記念事業の一環として、昭和58(1983)年から開発造成工事がはじまり、およそ6年の歳月を費やして完了し、自然に囲まれた広大なキャンパスが完成しました。



国際関係学部開設ならびに東松山キャンパス落成を記念して、披露祝賀会が催される

東松山キャンパスは、苦難の時代を乗り切った本学の華々しい発展の歴史を象徴する学舎として、今日も学生たちをあたたかく見守りつづけています。

建学の理念のもと着実に
歩んできたその成果が、今日の
東松山キャンパスとして開花しました。

Column 4

小林昇

Noboru Kobayashi

「本との出会いは、研究者にとって運命的な出会いがある」と語る。

平成5(1993)年2月5日、小林昇元経済学部教授は、学士院会員に選出されたのを祝って行われた本学での記念講演会のため、定年後3年ぶりに教壇に立ちました。

全11巻からなる『小林昇経済学史著作集』(未来社)の3冊

平成2(1990)年、本学を定年退職した元経済学部教授の小林昇氏は、平成4(1992)年末、学士院会員に選出されました。これを記念して、本学経済学部の主催による、「私と経済学史」と題した記念講演会が開催されました。講演の中で小林氏は、これまでの研究から、リスト、スチュアート、タッカーなどによる経済学者の書との出会いについて、「本との出会いは、研究者にとって運命的な出会いがあります。それが一生の研究のスタートになることが多い」と、これまでの研究者としての人生を熱く語りました。

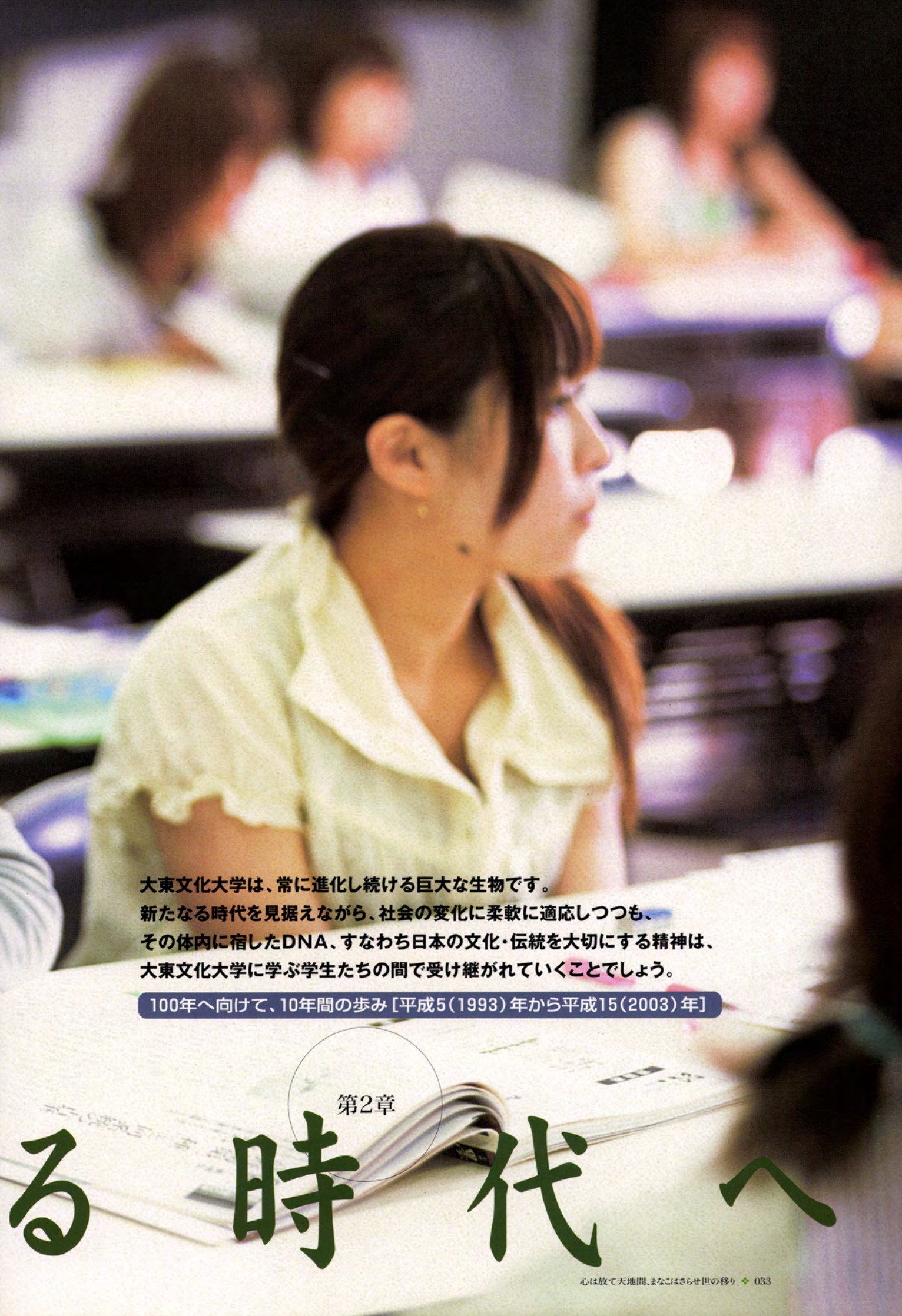
小林昇氏は、昭和18(1943)年旧制福島高等商業学校(現福島大学)の教師だったころ、東北大学からF・リスト全集を借り出し、筆写を続けるうちに『農地制度』という長い論説に行き当り、みるみる目の前が開ける思いがしたと、随筆集『帰還兵の散歩』の中で将来の方向性を決定づけたリストの著作との運命的な出会いを記しています。

昭和19(1944)年、戦況がいよいよ悪化する中、自らの戦死を予感しながらも充実した研究の日々を送っていた小林氏はやがて召集され、30代の一兵士として南方へ送られます。そして、乗っていた輸送船が撃沈され、命からがらベトナムに上陸、南から北へ転戦します。そうした中、軍隊の権力組織の腐敗や現地人の処刑事件などに関わったことへの強い自責の念が、「学問をかざして民衆の知的指導者となる生涯は回避された」という研究姿勢につながったと言います。

昭和47(1972)年に『リスト研究』で学士院賞を、昭和51(1976)年には『国富論体系の成立』でアダム・スミス賞を受賞するなど、小林氏の研究は内外から高く評価されてきました。そして、50年に及ぶ大学教授生活の成果は、全11巻からなる『小林昇経済学史著作集』として、本学在任中にまとめられました。また、退職後は、大阪経済大学のチームによるスチュアート全集三編から五編の完訳を手がけるなど、精力的に活動を続けています。

数々の経済研究書を記してきた小林昇氏の足跡は、本学の誇りとして永遠に歴史に刻まれることでしょう。

新たな



大東文化大学は、常に進化し続ける巨大な生物です。
新たなる時代を見据えながら、社会の変化に柔軟に適応しつつも、
その体内に宿したDNA、すなわち日本の文化・伝統を大切にする精神は、
大東文化大学に学ぶ学生たちの間で受け継がれていくことでしょう。

100年へ向けて、10年間の歩み［平成5（1993）年から平成15（2003）年］

第2章

る時代へ

第2章●新たなる時代へ

第1節 粛々と、変革

近年の社会構造の多様化、国際化などの変動に対応すべく、文部省が打ち出した「大学設置基準の一部を改正する省令」の施行により本学でも、各学部でカリキュラム改革を実施。また本学の質的水準維持向上のため、自己点検・評価の規程を制定。学生参加による授業評価に取り組み、大学基準協会から認定マークが授与されました。

模索する教育改革の理念

模索する教育改革の理念 1

多様化する社会に適応したカリキュラム改革を実践

平成3(1991)年に文部省が公布した「大学設置基準の一部を改正する省令」により、平成7(1995)年度から経済学部と法学部が、平成8(1996)年度には文学部、外国語学部、国際関係学部で新カリキュラムを導入。

教養教育と専門教育を一本化した、カリキュラム改革

各学部ともに共通する改革の特徴は、従来の「一般教育」、「外国語教育」、「保健・体育」、「専門教育」に分けられた科目区分を廃し、新たに「総合教育科目」(一般教養的教育科目群)、「基礎教育科目」(外国語科目、専門基礎科目群)、「専門教育科目」の3つの科目区分を導入したことです。これにより、教養的教育と専門教育とを4年間の教育課程の中で有機的に関連づけ、一本化して学ぶことがでるようになりました。

本学ではこの改革により、建学の精神に立脚しつつ、これまでの実績に加え、今後の流動化する社会に主体的に対応しうる、総合的な判断力と創造力とを兼ね備えた人材の育成、輩出を目指します。

また、経済学部では平成14(2002)年から野村證券株式会社と提携した授業を、経営学部では平成15(2003)年からJR東日本株式会社とタイアップした授業を行うなど、時代のニーズにあったより実践的なカリキュラムを備えました。

平成9(1997)年度の総合教育科目教授要項

昭和47(1972)年度から昭和54(1979)年度分の履修要項

経済学部におけるカリキュラムの改革

経済学部では、平成8(1996)年度に、本学の先頭を切って大幅なカリキュラム改革を実施しました。基礎教育の語学科目が1年次から4年次まで通して履修可能となり、また、開講科目の大幅な拡大、自由な科目履修など学生の主体的な学習を可能にしました。

浜本知寿香先生による経済学部の授業風景

当時の経済学科では、1年次から少人数制の演習科目を充実し、国際化に対応し「地域経済研究」科目を充実するなどの改革をしました。

経営学科では、多様化する学生のニーズに応え、国際化や高度情報化に対応するきめ細かな科目を開講しました。

経済学部はその後も改革を継続し、平成12(2000)年度には経営学部(経営学科・企業システム学科)が、平成13(2001)年度には環境創造学部が分離独立し、また、経済学科を社会経済学科と現代経済学科に改組し、時代に即したカリキュラムで運営しています。

法学部におけるカリキュラム改革の理念

法学部では、「専門的な知識と思考判断力の体系的教育」、「バランスのとれた見識と教養の育成」、「情報の発

教養教育科目と専門教育科目を一本化して、1年次から4年間を関連づけて有機的に学べるシステムに。

英文による法学部のガイドブック
[1996ー1999]

信能力と対話力の養成」という目標を設定して、カリキュラム改革を実施。具体的には、体系的な専門教育を実現するため、1年次に「入門演習」、2年次に「基礎演習」を新設し、1、2年次の早い段階から専門教育を開始して、3、4年次の「専門演習」へとつなげます。また、教養教育科目の整理統合と社会科学方法論などの多様な専門教育科目や情報処理科目を増設しました。さらに、各学科でも独自の取り組みがなされました。

法律学科では、高度な専門性と幅広い視野の修得を目指して、特別法関係や基礎法関係、社会学・経済学などの専門教育科目群にグループ別選択履修制を導入しました。また国際化に対応するため英語教育の必修単位を増やし、対応する科目を新設、英語および第2外国語の重点的学習を可能にしました。

政治学科では、地域からの国際化という学科理念に基づき、海外地域政治研究（欧州統合や中東問題など）を増設して1年次から開講するとともに、国際化に対応して語学教育の多様化（コリア語など）を図りました。また現代行政のニーズに応えるため、公共政策論や行政過程論を新設しました。

「司法コース」のリニューアルについて

法学部法律学科に「司法コース」が導入されたのは、平成元（1989）年のこと。これまでのコース制実施の中で蓄積された経験をふまえて、平成10（1998）年度から、従来の方式に代わる大幅な変更が行われました。また同年度には、本法律学科卒業生（当時・大学院前期課程1年生）が司法試験に合格する快挙があり、翌年もまた1人合格者を出すという快挙が続きます。このような中で司法コースでは、平成11（1999）年度から、司法試験や国家公務員Ⅰ種、法律職の公務員（裁判所職員、労働基準監督官、国会職員）、司法書士などの試験に必要な知識を習得する授業を行い、さらなる合格を目指します。

リニューアル後の特色は、これまでは2年の進級時に司法コースへの選定を決めていたものを、1年次の入学直後に選考試験を実施すること。また憲法・民法・刑法など法律主要科目は、専門クラスを設け、少人数教育を行います。さらに司法コースの1、2年生には、全員に法学研究所の研修講座の受講を義務づけるなどの改革を行いました。また平成14（2002）年度からカリキュラムの見直しをし、法律学科は4コースから3コースにし、「現代社会と法」（演習）を新設し、必修化しました。政治学科は2コ

情報教室での授業風景

成田守先生が教鞭をふるう
文学部の授業風景

本学の歴史ある建学の精神と教育理念に基づきながら、各学部とも今後の流動化する社会に対応しうるカリキュラムに。

外国語学部ロバート・J・シグレー先生の英語の授業

ースから3コース制としました。

外国語学部 新カリキュラムの導入

外国語学部では、平成8(1996)年4月から新カリキュラムがスタートしました。各3学科に共通する大きな改革点は、それぞれ系列またはコース制を導入し、多様化する社会および学生の要望に対応したことです。

中国語学科では、将来日中関係の各方面で活躍できる人材の育成・教育を主軸に、中国語だけでなく中国の社会、政治、経済、文化に関する科目も豊富に盛り込みました。1、2年次では、中国語の基礎学力養成を狙いとするトレーニング中心の科目に重点を置き、3年次には将来の進路なども考慮して、実用中国語系、中国語学研究系、中国現代文化系の3系列に分け、ゆるやかなコース制を採用しました。

英語学科は、学生個々の将来の進路を考慮した科目群を設け、英語学・英語教育学、コミュニケーション・情報、文化・地域の3コース制を導入しました。

日本語学科では、科目群を日本語学・日本語教授法、日本文化・比較文化、情報コミュニケーション、政治経済、地域研究・地域言語、専門演習の5系列に分け、学生各自の学習志向に沿って選択履修できるようになりました。

文学部などの新カリキュラム

平成3(1991)年の文部省通達によるいわゆる「大学設置基準の大綱化」に伴い、文学部でも教育課程の大幅な刷新が行われました。これにより、教養教育科目のより専門性を深めた新カリキュラムがスタートし、必修・選択・自由科目に区分された基礎・専門・総合教育の3教育科目群が、各年次に有機的関連性を持って体系化されました。結果として、各学科の専門教育科目の必要取得単位数は、卒業要件の5割以下になり、同時に進級規程と年間履修単位数の上限規程も廃止されたことから、学生は自由で主体的問題意識に即して、多様な学問体系を履修できることとなりました。平成8(1996)年に施行された現カリキュラムは、多様で柔軟性のあるカリキュラム体系になった一方で、少子化や価値観の一層の多様化などにより、新たなる再検討も迫られています。

一方、平成12(2000)年に書道学科を増設しました。また国際関係学部では、平成12(2000)年4月から1年次にチュートリアル(ホームルーム制)を設け、カリキュラムに加えました。

環境創造学部では、平成13(2001)年創設されましたが、完成年次を迎える平成17(2005)年4月に向けて、新たにカリキュラム改正の検討を進めています。

教壇に立つ小島麗逸先生

法廷教室での授業風景

学生各自の学習志向や将来の目標に応じて自由に選択履修できる柔軟なカリキュラム体系を採用。

模索する教育改革の理念 2

さらなる質的向上を目指した、入試改革

本学の質的水準向上と学内の個性化・活性化を図るため毎年、多様な入試制度を検討し、推進しています。

入試風景。平成7(1995)年2月

有為な人材確保のため、毎年多様な入試制度を推進してきましたが、18歳人口の減少に伴い、本学への志願者が平成4(1992)年度の4万5,019人をピークに平成11(1999)年度には1万4,719人にと大幅に減少しました。

平成11(1999)年より、入試改革をするために「入試プロジェクト」をつくり、「わかり易い入試」を合言葉に一般入試・推薦入試等について全学規模の見直しをした結果、新たに自己推薦入試を導入することにしました。また、平成13(2001)年度からは、センター入試を導入しました。

大学案内(CROSSING)についても「高校生からみた大学案内」をコンセプトとして作成した結果、平成13(2001)年度、サンデー毎日「パンフレットランキング」でベスト20位に入りました。

合格発表風景 平成9(1997)年2月

平成12(2000)年からは、教員・事務職員による「入試アドバイザー制度」を発足し、高校訪問を実施しています。

これらの結果、平成15(2003)年度の一般入試の志願者数は1万7,594人に増えました。また、推薦入試も微量ですが、毎年志願者が増えています。

平成21(2009)年の全入の時代を迎えるにあたり、さらに入試改革と大学改革を実施し、有為な人材確保を目指します。

独自の入試制度と新たな試みを採用し、高度な能力や多彩な才能をもつ人材を発掘。

模索する教育改革の理念 3

全学的行事としてキャンパス見学会を開催

本学の受験希望者やその父母を対象に、毎年趣向を凝らした内容で、キャンパス見学会を開催しています。

書道教室で書道体験を受講する、キャンパス見学会に訪れた高校生とその父母

学校案内などに熱心に見入っていた

大学による高校生・保護者を対象とした説明会の実施内容が、ここ数年の間に大きく変化しています。専門業者による説明会形式から、各大学で独自の「キャンパス見学会」を企画し、全国の高校生を集めて、高校生自身に体験させる形式の説明会が定着化しつつあります。

高校生が大学に直接行き、周辺の雰囲気を知り、直接在学生に学生生活について話を聞くことが、大学受験の志望校の決定に大きく作用しています。

東松山校舎大会議室で模擬授業を受ける

本学では、東松山校舎を中心に平成12(2000)年度から6月、7月の毎土曜日に実施してきました。その内容は、教員による模擬授業・学科別個別相談や入試アドバイザーによる入試概要の説明のほか、現役学生たちによるキャンパスツアーなど毎年趣向を凝らして、高校生の要望に応じています。

高等学校の進路指導部も大学に入ってからのミスマッチを防ぐため、キャンパス見学会に参加することを奨励しているところもあります。

平成14(2002)年度は、キャンパス見学者のうち6割以上が実際に受験するなど入試広報のうえで重要な意味を持っています。

体験授業やキャンパスツアーを通じて、入試広報はもとより、本学の魅力をPR。

模索する教育改革の理念 4

大学教育と学生による授業評価を考える

本学の今後の授業内容および教育方法の改善を進めるため「学生による授業評価アンケート」を実施し、結果報告を続けています。

授業に対する学生たちの率直な意見を集め、学生参加による大学づくりを推進。

大学教育と授業評価を考える
フォーラムのアンケート用紙と報告書

本学全学部全学科とすべての教員を対象にした、本学初めての「学生による授業評価アンケート」が、平成12(2000)年12月4日から16日までの間で行われました。大学院を除き、非常勤講師を含めた全教員が参加し、2,808科目で実施。この授業評価は、「大東文化大学学生による授業評価実施委員会規程」第1条の「自己点検・評価の一環として授業に対する学生の率直な意見を聴取し、今後の授業内容および教育方法の改善を進めるため」に行われたものです。

熱い議論が交わされたフォーラムでの一コマ

授業評価アンケートについて
意見を述べる学生

そもそも本学で自己点検・評価活動が本格的に開始されたのは、平成3(1991)年頃からで、これは文部省などの「大学設置基準改定」による、各大学に自己点検・評価を行い、その結果を外部に公表することを「努力義務」として規定した政策動向に対応したものでした。その後、平成6(1994)年に「大東文化大学自己点検および評価規程」「同・施行細則」が制定され、全学、学部学科などの各段階の点検・評価委員会が組織されました。

調査結果は分厚い報告書にまとめられ、
授業改善に生かされる
(写真は2000・2001年度版)

一方、学生による授業評価については、平成11(1999)年度から教授会を中心に論議されていて、同年7月に各学部から8人の教員を選んでプロジェクトチームを作り、同年12月に一部の学部でテスト的に行われました。その結果を平成12(2000)年3月に学長に答申。それを受けて同年7月に「大東文化大学学生による授業評価実施委員会規程」が制定され、同年12月の「学生による授業評価アンケート」の実施に至ります。

本学初の学生による授業報告アンケートの結果報告は、翌平成13(2001)年6月に完成。その結果を授業にどう生かすかをテーマに、教員と学生両パネラーによる「大学教育と学生による授業評価を考えるフォーラム」が、7月に東松山と板橋の両校舎で開催されました。東松山校舎では150人ほどの学生が、板橋校舎では約100人の学生が参加して、学生と教職員が共に授業の在り方を語り合い、大学の授業や教育方法の改善に役立てるという新しい試みが行われたのです。この「授業評価フォーラム」は、平成13(2001)年度の授業評価アンケートの結果報告を受けて、平成14(2002)年にも開催され、再び板橋、東松山両校舎の会場で意見が交わされました。そして学生参加の大学づくりと授業評価フォーラム定着への一歩が進められ、平成15(2003)年も続けて前期中に実施されました。

模索する教育改革の理念 5

自己点検・評価規程を制定

平成6（1994）年、学内の合意を得て、自己点検および評価規程が制定され、全学規模による具体的な点検・評価活動が開始されました。

絶えず大学の改革・改善に努め、大学の質を維持・向上させるシステムに。

平成3（1991）年7月の文部省による「大学設置基準の大綱化」の中に「自己点検および評価に関する条項」が規定化されたことに伴い、本学内でも自己点検・評価体制についての検討・審議が重ねられてきました。足掛け4年にわたる審議を経て、平成6（1994）年6月に学内合意を得、同年7月の大学評議会、学園理事会の議を経て、「大東文化大学自己点検および評価規程」が制定されました。

財団法人大学基準協会から認定を受け付与された本学の「大学基準協会会員証」

具体的な点検・評価活動は、同年11月から全学規模で開始され、本学事業計画と連動して行われました。本学の「理念・目的」「教育課程」「学生の受け入れ」「教員の研究組織と研究活動」など、数多くの項目について相当な労力と時間を費やし、現状把握や分析・評価が行われました。平成10（1998）年には『大東文化大学の現状と課題』『大東文化大学の分析と評価』という2冊の報告書がまとめられ、学内外に公表されました。

その後、この自己点検・評価活動を主観的な評価に終わらせないために、学生参加の評価体制を取り入れる検討と同時に、大学基準協会の「相互評価」（同協会が個々の大学を対象に行う第三者評価で、日本において最も権威ある大学評価）を受けることを全学の方針として確認します。関連規程を改定し、直ちに作業が開始され、平成13（2001）年8月に『大東文化大学自己点検・評価報告書』を完成。その他の資料とともに大学基準協会に提出し、「相互評価」を受ける運びとなりました。

平成14（2002）年3月8日、本学は「相互評価」の適格認定を受け、次いで同年12月に同協会より正会員証とともに総合評価・認定の認定マークの送付を受けました。平成8（1996）年度以降認定を受けた大学は、本学を含め全国で95大学。また認定を受けた大学は、3年後に「改善報告書」を提出しなければならず、さらに7年ごとに「相互評価」を受け、絶えず改革・改善に努め大学の質を維持・向上させるというシステムになっています。本学においても、すでに改革・改善計画が実行に移されています。

大東文化大学の現状と課題については、数年毎に評価報告書としてまとめられる

模索する教育改革の理念 6

「彩の国大学コンソーシアム」を結成

埼玉西部地域の17大学が協力して、教育研究の高度化と交流の進展を図り、さらに地域社会との連携を深めることを目的とします。

埼玉県西部地域にキャンパスをもつ17大学の参加による「彩の国大学コンソーシアム」が、平成13(2001)年10月15日に結成されました。これは、各大学が協力して教育研究の高度化と交流の進展を図り、学生に価値の高い修学の場を提供するのがねらいです。また、生涯学習や産学官の交流を進め、地域社会との連携を深める目的もあります。

参加大学は大東文化大のほか、跡見学園女子大、埼玉医科大、十文字学園女子大、女子栄養大、城西大、尚美学園大、駿河台大、西武文理大、東京家政大、東京国際大、東京電機大、東邦音楽大、東洋大、文京学院大、明海大、立正大の17大学。まず、大学の修得単位互換と公開講座の共同開催は、平成14(2002)年度からスタート。同年度の本学学生による単位互換履修生の申請者は3人、他大学からの本学への申請者は11人でした。

参加大学は、今後、埼玉西部地域の隣接大学を含めさらに増える見込みと予想されます。

平成13(2001)年10月に結成された「彩の国大学コンソーシアム」友好交流に関わる協定書

学生に価値の高い修学の場を提供。また生涯学習や産学官との交流も推進。

模索する教育改革の理念 7

セクシュアル・ハラスメント基本規則始動

「男女雇用機会均等法改正」の職場におけるセクシュアル・ハラスメント防止対策配慮義務を受けて、本学も委員会を結成し検討を進めました。

落合恵子氏による講演会
平成12(2000)年6月22日開催

平成11(1999)年の「男女雇用機会均等法改正」により、職場におけるセクシュアル・ハラスメントの防止対策が事業主の配慮義務となりました。このことを受け本学は、同年6月に「セクシュアル・ハラスメントに対する指針(ガイドライン)作成委員会」を設置。その後、具体的作業に対応できるよう、「セクシュアル・ハラスメントに対する指針実施準備委員会」と改称して検討を進めました。

セクシュアル・ハラスメントに関する調査用紙

「セクシュアル・ハラスメントのない学園をめざして」と題した報告書

翌平成12(2000)年2月23日の理事会で、①セクシュアル・ハラスメント対応基本規則②セクシュアル・ハラスメントに関する指針(ガイドライン)③セクシュアル・ハラスメント防止委員会規程④セクシュアル・ハラスメント問題調整等委員会規程の4規則が制定されました。これらは、本学において個人の尊厳を確保し、男女平等を実現するために、セクシュアル・ハラスメントが根絶されることを期した施策を定めたものです。この規則が施行された同年4月1日以来、各委員会は各種講演会や研修会の開催、セクシュアル・ハラスメント防止のためのアンケート活動などを継続展開しています。

本学における、個人の尊厳の確保と男女平等を実現するための施策。

模索する教育改革の理念 8

「大学教育の現状と未来を考える連続講演会」を4回にわたり実施

平成10(1998)に開催された連続講演会では、多数の教職員や学生が参加し、大学の現状と本学の未来について、活発な意見が交換されました。

平成10(1998)年の6月16日から7月16日の間、全4回にわたり「大学教育の現状と未来を考える連続講演会」が開催されました。いずれも授業が終了した午後5時から始まり、毎回、多方面で活躍する方々が講演。会場には多数の教職員や学生が参加し、また講演後は活発な意見交換や討議が交わされました。

第1回目は6月16日、板橋校舎1号館の教室を会場に、「大学への注文」というテーマで、倉橋政道氏(埼玉県立伊奈学園総合高等学校校長)と千野信浩氏(週刊ダイヤモンド記者)が講演。講演終了後は、会場に出席した約70人の教職員から、活発な質問が飛び交いました。

第2回目は7月2日、五十周年記念館の大会議室が会場で、「大学教育の将来と私立大学」のテーマで戸田修三氏(日本私立学校振興・共済事業団理事長)が講演し、「大学改革の現状と大学教育の未来」というテーマで山岸駿介氏(多摩大学教授、元朝日新聞編集委員)が講演しました。戸田氏は、自身も委員となっている大学審議会が先に発表した中間報告の「21世紀の大学像と改革方策について—競争的環境のなかで個性が輝く大学」を中心に講演。また山岸氏は「国は大学の改革を本気で求めており、21世紀に向けて、個々の大学が今こそ本気で自己改革に取り組まなくてはいけない」と語りました。大会議室の会場には、前回を上回る約90人の教職員と学生たちが詰め掛け、熱心に講演に耳を傾けていました。

第3回目は7月9日に、板橋校舎1号館の教室を会場に「大学の未来と教育改革を考える」と題して、寺崎昌男氏(桜美林大学教授、前本学園理事)が講演。「私大では、教養知識だけでなく、母校の個性や良さを学生たちに教えることも大切」と指摘しました。

最終回の第4回目は、7月16日に板橋校舎1号館の教室を会場にして、「大東文化大学の改革についての問題提起」というテーマで、諏訪義英学長と小林敏男日本文学科教授の話を軸に討議が行われ、この連続講演会を終了しました。

新世紀にむけ、個々の大学が本気で自己改革に取り組む時。私大では、母校の個性や良さも学生に教えるべき。

第3回講演会、
テーマ「大学の未来と教育改革を考える」
寺崎昌男氏(桜美林大学教授・前本学園理事)

第2回講演会、
テーマ「大学教育の将来と私立大学」
戸田修三氏(日本私立校振興・共済事業団理事長)

第2回講演会、
テーマ「大学改革の現状と大学教育の未来」
山岸駿介氏(多摩大学教授・元朝日新聞編集委員)

第1回講演会、
テーマ「大学への注文」
倉橋政道氏(埼玉県立伊奈学園総合高等学校校長)

近年のわが国における学術研究の
めざましい進展と高度化、また
社会経済の国際化、情報化、
高度成長化に伴い、文部科学省では、
大学および大学院の質的改善拡充と
量的整備を進めます。本学においても
既存の学部・学科を充実させるため、学部の
改組や新学科の開設、大学院を増設して
さらに良質な教育機関を目指します。

学部・大学院の整備拡充

蒼々と、躍進

第2章 新たなる時代へ

第2節

学部・大学院の整備拡充 1

経営学部に、企業システム学科を開設

経済と企業のグローバル化が急速進展する現代社会に対応するために、平成12(2000)年、経営学部に新たに企業システム学科を開設しました。

より実践的教育を充実して、時代の要請に積極的に応えるためのカリキュラム構成に。

平成12(2000)年度4月から、従来の経済学部経営学科を改組して、新たに経営学部が開設されました。この新経営学部は、経済と企業のグローバル化が急速に進展する現在において、本学の「東西文化の融合」という建学の精神を再認識しながら、経営学、会計学、経済学と情報科学における実践的教育の充実を図り、現代社会の要請に積極的に応えることを目的としてスタートしました。

同学部は、「経営学科」そして新しく開設した「企業システム学科」との2学科で構成されます。さらに経営学科は「経営コース」と「会計コース」に、企業システム学科は「ビジネス・システムコース」と「企業情報システムコース」に分かれます。

首藤禎史先生による広告論を学ぶゼミ学生

経営学部の特色としては、経営学、会計学、情報科学、経済学などに関する基礎的教育の充実、実践的な問題解決能力の獲得、インターンシップを取り入れた外部組織との情報交流授業、高度な情報リテラシーの育成、実践的外国語運用能力の修得、豊かな教養教育の実践となっています。

経営学科では、経営学、会計学、商学および情報・システムの諸科目からなり、特に経営学・会計学分野の充実に特徴のあるカリキュラム。また企業システム学科では、経営学、情報・システムと会計学および商学の諸科目からなっており、特に経営学における意思決定と情報・システム分野が充実したカリキュラムになっています。

さらに経営学部のカリキュラムの特徴は、まず公認会計士、税理士、中小企業診断士、情報処理技術者、社会保険労務士などの資格を取得する上での対応科目も充実しており、時代の要請の多いスペシャリスト育成に備えたコース編成となっていること。また、「理論経営学」とともに現実を踏まえた「実践経営学」も体得できるよう、実際に経営現場に携わる企業経営者や経営コンサルタントによる講義、また企業現場の実習やインターン制度を取り入れたこと。そして、学生自身の自己認識や自己啓発が促されるよう、少人数教育のゼミナールを1年次から行うなどの、多彩なカリキュラム構成になっています。

「企業システム演習Ⅰ(永田清ゼミ)」では、インターネットの利用とその問題点を研究している

「経営管理論B」の永林惇先生(経営学部)

学部・大学院の整備拡充 2

経済学部を社会経済学科と現代経済学科に改組

経営学部開設に伴い、経済学部でも改革全体会議を行い、平成12(2000)年度より「社会経済学科」「現代経済学科」の2学科体制でスタート。

平成11(1999)年9月に、文部省に申請していた本学の環境創造学部の設置が翌年12月に認可になったことと、同年12月に経営学部の開設も認可になったことに伴い、経済学部においても、従来の経済学科を見直す方針が理事会で正式に承認されました。これを受け、経済学部では改革全体会議を中心に議論を行い、経営学科の改組と同様に平成13(2001)年4月から、従来の経済学部を「社会経済学科」と「現代経済学科」の2学科体制にしてスタートすることが決まりました。

経済学部の原田喜美枝先生の「基礎演習」風景

新しい経済学部の教育方針は、「少人数教育」のもとで、学生に学ぶ手ごたえを与え、主体性をもった人材の育成を目標とします。また、新設の「現代経済学科」は、現実の経済的諸問題への有効な解決策を見いだす視点を基本に据えて、数量的分析を相対的に重視する学科とします。一方、従来の経済学科は、これまでの伝統を継承しつつ、いわゆる「経済現象」だけにとどまらず、社会を総体として見る視点を重視し、社会思想や歴史的研究、さらには国際的・地域的研究をも重視することとして、新しく「社会経済学科」という名称に変更してスタートすることになりました。

現実の経済諸問題の分析・解決を重視する「現代経済学科」。経済を歴史や思想、国際的視野で研究する「社会経済学科」。

アジア地域の経済発展と国際関係について学ぶ(永野慎一郎ゼミ)

社会思想ー環境思想の系譜について教鞭をふるう馬場靖雄先生(経済学部)

学部・大学院の整備拡充 3

環境創造学部環境創造学科開設・新人間環境宣言

新世紀に向け、社会的変化と時代の要請に応えた社会科学系新学部として、平成13(2001)年、環境の世紀を担う「環境創造学部」が開設しました。

私大の経済学部は、日本の高度経済成長の人材供給源という社会的役割を果たしただけでなく、私大経営においても非常に大きな位置を占めてきました。本学においても、経済学部の学生が在学者総数の45%強を占めていた時もありました。しかし、折からのバブル崩壊や今日に至る閉塞感を伴う長期不況、世界的な規模の自然破壊と環境保護機運の台頭、さらに少子高齢化といった社会構造の急激な変化は、順風に見えた私大運営にも大変革を迫りました。このような時代背景のもと、平成10(1998)年1月、経済学部経済学科の抜本的再編を推進する機関として、「経済学科再編実行委員会」が学科内に設置されることとなりました。

同委員会が打ち出した再編構想のもと、21世紀に向けて社会的変化と時代の要請に応えた社会科学系新学部として、「環境創造学部」設立構想が提起され、平成11(1999)年6月に理事会で正式に設置が認められました。大学サイドでも了承され、同年9月に文部大臣に申請。平成12(2000)年12月に認可され、翌13(2001)年4月に開設し、189人の1期生を迎えて、[環境の世紀]を担う新学部が発足しました。

環境創造学部は1学科制で、入学定員は1学年165人。「より良質の人間環境の創造」という視点のもと、人、モノ、カネを活かし循環させる視点に立って「地球と人間社会を考え働く市民の育成」を教育目標とする学部です。専門教育は、「都市環境」「福祉環境」「地球環境」の3コースで、2年次後期より各コースに分かれます。

都市環境コースでは、日本の土地・住宅問題、都市計画、都市行政、地域研究、町づくりのソフト・ハード面を学びながら、現代人の協同生活世界としての都市、アメニティー都市の創造を担える人材を養成します。

福祉環境コースでは、障害者と健常者がともに快適に暮らせる「ノーマライゼーション」という課題に取り組み、介護、リハビリの演習や現場実習、また福祉制度や福祉ビジネス・マーケットなどを学ぶことにより、福祉環境を総合的にマネジメントできる人材を養成します。

地球環境コースは、「持続可能な循環型経済」という視点から、地球環境、消費者と環境問題、エコ・ビジネスや環境会計を学習の柱に据え、企業や自治体で必要となるエコ・ビジネス、エコ・マネジメントに通じた人材を育成します。

植野一芳ゼミ(環境創造学部)の「社会科学入門」

「環境創造フォーラム創立大会」で講演を行う堂本暁子千葉県知事 平成12(2000)年10月27日

より良質の人間環境の創造という視点のもとで、地球と人間社会を考えて働く市民育成を教育目標とします。

Column 5

第1回内外自然保護・リサイクル事情研修の実施

新設された環境創造学部による、自然保護・リサイクル事情研修。アメリカで実際に環境保護を目的に都市計画を実践する街を見学しました。

マーフリーズボロの下水処理施設を見学した、平山義康先生（後列左）、冨田祐一先生（後列右）と学生たち、そして施設の関係者とともに記念撮影

平成13（2001）年に開設された環境創造学部の第1回内外自然保護・リサイクル事情研修が、同年9月9日から20日まで、アメリカ合衆国テネシー州のマーフリーズボロとチャタヌーガを中心に実施されました。研修参加者は、1年生11人。

研修地マーフリーズボロは、実質的な研修受け入れ先となったミドルテネシー州立大学（MTSU）の所在地。またチャタヌーガは、電気バスの運行と都市再生計画で有名な市です。研修訪問先は、省エネルギーセンター、下水処理施設、廃棄物の埋立地、農業センター、低公害車の研究室、石炭の露天掘り現場、電気バス会社、水族館、政府機関、銅鉱山跡地、自然保護関係のNGO、野生動物保護センター、水力発電所、都市計画センターなど20施設にも及び、それらの施設では大気汚染などの公害防止や自然保護などの分野の専門家から説明を受けました。相当高度な内容もあったものの、学生たちは興味深く聞き入り、環境保全分野を広範囲にカバーできる充実した研修内容となりました。

なお、研修3日目の9月11日にはアメリカ同時多発テロが起こり、研修への影響が懸念されましたが、予定通り無事帰国することができました。

マーフリーズボロの下水処理施設を見学する環境創造学部の学生たち

20カ所に及ぶ施設訪問体験で環境保全分野を広範囲にカバーした充実した内容に。

学部・大学院の整備拡充 4

日本語を世界の一言語・一文化ととらえる日本語学科開設

平成5（1993）年開設「日本語学科」は、日本語学・日本語教育学を核としながら、世界に向けて日本の姿を客観的に語ることのできる人材の養成を目指します。

今後の国際社会で要求される「日本の生き方」を追求する契機になることを願って。

柏木成章ゼミ（外国語学部・日本語学科）風景の一コマ

本学に日本語学科が開設したのは、平成5（1993）年度のこと。それまで外国語学部の日本語教育・日本語学関係の授業は、長らく同学部所属の教員が行っていました。しかし時代の進展に伴い、日本語関係教員の間で学科設立の気運が高まり、外国語学部内で準備を進めた末、学内手続きを経て文部省に申請するに至りました。

日本語学科設立の理念は、外国人のための日本語教師養成という狭義の目的だけではなく、従来の日本語・日本文化に欠けていた側面に新しい光を当て、日本語を世界の一言語・一文化として客観的・相対的に見られる眼を養うこと。そしてその成果が、日本の学校教育にも社会教育にも還元され、同時に世界に向けて日本の姿を客観的に語ることのできる人材を養成することにあります。これからの国際社会で要求される「日本の生き方」を追求する契機になるものとして、本学の日本語学科の設立に至りました。

そのカリキュラム構成は、日本語学、日本語教授法、言語学を中心に、それら基礎教育科目に有機的に関連する日本文化、コミュニケーション、地域研究なども取り入れました。さらに日本人学生には、中国語または英語、外国人学生には、日本語の科目を十二分に取り入れ、また4年間一貫して少人数演習指導体制とするなどの新機軸を盛り込んだ内容としました。

昭和60（1985）年度ころから他大学でも日本語学科創設の動きがあり、あいついで認可されてきました。日本語学科のある大学はすでに20校を数えます。結果的に本学の認可が最後となりましたが、一方で日本語教師養成を主な内容とする大学院が認可されてきています。それだけに日本語学科に課せられた期待は大きく、学科の存在理由や独自性も厳しく問われることになります。

日本語学科の設立理念は、当初から変わらぬものとして、今後も日本語学・日本語教育学を核とし、教育内容のいっそうの充実・発展を目指して絶えざる前進を続けていきます。

教壇に立つ田口悦男先生（外国語学部・日本語学科）

日本文学概説を教える藏中しのぶ先生

学部・大学院の整備拡充 5

漢字文化および仮名文化に立脚する国内初の書道学科スタート

強い要望に応えて、平成12(2000)年度「書道学科」が開設。これにより、伝統ある「大東書道」の教育と研究が一段と充実し、推進できることになりました。

近年の日本の伝統文化に対する国際社会の関心の高まりや、本学内外からの強い要望に応え、平成12(2000)年4月、本学文学部に国内初の書道学科が開設されました。書道学科設立の目的は、漢字文化および仮名文化に立脚する書の本質を、伝統的視点、社会的視点、国際的視点、未来的視点などの幅広い視点から解明し、歴史、理論、技法、表現などを組織的に考究しようというものです。

「書道学」は、本学の前進である「大東文化学院」[大正12(1923)年創設]以来重視し教育・研究してきた分野で、書道研究所は、書道の振興と充実・発展に中心的な役割を果たしてきました。また開設前までは、日本文学科、中国文学科、教育学科の学生に対して書道が履修できるようにしており、毎年約100人前後の卒業生が高等学校書道教員免許状を取得していました。この長い伝統と実績の中で育ててきた「大東書道」の教育と研究が、書道学科の開設によって、一段と充実し推進できることとなりました。

書道学科は、「書学・書道史」「美学・美術学」「書法研究・作品制作」を中心に、書道学の各領域の教育と研究を通して、伝統文化の尊重と発展に努め、創造性に富んだ人間性豊かな人材の育成を目指します。本学科には「書学コース」と「書コース」の2コースを設け、書道学に関する教育と研究に必要な授業科目を設置し、その研究が基礎から発展へと組織的かつ段階的に進められるようカリキュラムを編成。「書学コース」では書の研究と制作にも見識をもった書学・美術学などの研究者の育成を、「書コース」では、書学・書道史、美学・芸術学にも見識をもった書作家の育成を目指します。

創立80周年には、ちょうど4年生までの学生が揃います。現在は、海外(中国)での研修や国内博物館などへの研修、書道用具用材の加工演習、コンピューター・アート研究などの実習科目や実作ゼミ、書学ゼミなどの多彩なカリキュラムに意欲的に取り組み、また放課後の課外セミナーや夏休みの合宿、学生の手によるゼミ展、歓迎展、自主グループ展など、実り多い活動も盛んに行われています。

「大東文化大学書道学科設置を祝う会」であいさつを述べる須藤敏昭学長

楷書法1の授業を行う田中裕昭先生

書の本質を幅広い視点から解明し、書の歴史、理論、技法、表現を組織的に考察研究。

高城弘一先生による授業の様子(文学部・書道学科)

学部・大学院の整備拡充 6

政治学科に平成6(1994)年 大学院政治学専攻を増設

法学部政治学科の開設から完成年次を迎え、さらに充実した教育課程を目指し、大学院法学研究科・政治学専攻博士課程の増設が推進されました。

社会人や有職者への再研修、生涯教育に向け、全国でも先駆的な試みの、昼夜開講制を実施。

より一層優れた高度の専門的職業人としての資質を高める

文部省による大学院の質的改善および量的整備の方針を受け、本学でも、平成3(1991)年に法律学専攻博士課程の増設、同5年に経営学専攻修士課程開設など、既存の大学院の整備拡充に努めてきました。そして、平成2(1990)年に開設された本学の政治学科が完成年次を迎えるにあたり、法学研究科委員会と法学部教授会において政治学専攻修士課程の新設に向けての検討が進み、準備委員会の設置など具体的作業がなされました。

政治学専攻課程の教育目的は、学部から大学院までの一貫した教育研究体制のもと、より一層優れた高度な専門的かつ実践的な知識や理論を新たに修得することによって、より一層高度な専門的職業人(地域社会の政治的リーダーや地方公共団体の中核となりうる行政マン)などの養成とその資質を高めることにあります。

法廷教室での講義の様子

法学研究科政治学専攻博士前期開設

平成6(1994)年4月、本学大学院に法学研究科政治学専攻修士課程(後、前期課程に改組)が開設されました。これにより、すでに平成3(1991)年に設置している法律学専攻に加え、法学部は両学科とも大学院の課程が設置されたことになります。

政治学専攻課程の設立趣旨は、わが国が国際関係においても国内政治においても構造的転換期を迎え、新しい政治システムの構築、高度な専門的知見を備えた中堅指導者の育成が肝要であるという認識のもと、幅広い国際的視野と激動する政治現象の専門的分析能力の修得、ならびに的確な政治的・行政的判断能力とリーダーシップ能力の養成を図ることにあります。

このような趣旨のもとにカリキュラムの基幹科目には、政治学、西洋政治思想史、日本政治思想史、日本政治史を設置し、内外政治システムの理論的・歴史的分析能力を育成します。また国際化時代に対応し、比較政治の分析能力を養成するための近代化の東西比較研究に重点をおいた教育と、現代政治の動向を多角的構造的に分析し、個々の政治・行政課題への適切な判断力と政策形成能力の育成を目指すため、具体的事例研究を重視する演習科目を充実させた編成で組んでいます。

この修士課程の教育目的・人材育成の柱としては、第一に高度な専門的職業人、具体的には地方議会議員、地方公共団体の企画調整・管理部門を担う中核的行政官の養成。また、ジャーナリストや国際交流を促進・支援しうる人材、専修免許状取得高等学校教員の養成。それから、社会人・有識者の再研修とリフレッシュ教育の実施。さらに国際学術交流の一環として、外国人留学生の積極的受け入れ、母国の近代化のためのリーダーの養成を主眼としています。

とくに社会人・有職者の受け入れをめぐって、大学院に昼夜開講を導入し

講義を行う東田親司先生
（法学研究科・政治学専攻）

ました。これは本学において初めてであるとともに、全国的にも先駆的な試みでした。また、本学全体の国際化を促進するため、新たに韓国の釜山外国語大学との学術交流提携に向けた取り組みも行いました。

法学研究科政治学専攻博士後期増設

平成6（1994）年に開設された政治学専攻修士課程が完成年次を迎えるにあたり、同年10月、法学部教授会において政治学専攻博士課程の新設に向けた準備委員会が設置されました。そして平成8（1996）年、法学研究科政治学専攻修士課程を博士前期課程に改組し、その上に博士後期課程を増設。これにより、法学研究科は法律学専攻と政治学専攻がともに博士前期・後期課程をもつことになり、学部教育から大学院博士課程まで一貫した教育研究体制が整いました。

政治学専攻後期課程の設立趣旨は、修士課程設置の趣旨を継承発展させることを基盤にし、設立目的・人材養成の柱として、専門的な政策秘書や上級国際公務員など、広い国際的視野と知識を有した専門的な政策立案・企画能力を有する人材の養成を目指します。外国人留学生を積極的に受け入れ、母国の新しい国家づくりにおけるリーダーとして活躍しうる人材を養成し、政治学分野における国際貢献を行います。また、各人の力量をそれぞれの組織・集団の場で活かすことを希望する職業人の再教育を本課程の重要な社会的使命とし、これには修士課程の趣旨を継続して、昼夜開講制を導入。さらに、博士前期課程終了後、同分野について継続して研究を希望する者（後継研究者）の養成を重視します。

カリキュラムの特色としては、政治学、日本政治史、および日本政治思想史を中心とした基幹研究分野とアメリカ・フランス・ロシア・中国・東南アジアなどの国際関係・地域研究分野、そして先進国の行政と官僚制、都市政治と行動、エスニック集団と多文化共存、マス・メディアと政治などの現代政治研究分野を充実した編成です。

教育指導体制では入学時のガイダンスを徹底し、副指導教授を置いて協同研究指導体制のきめ細かい履修指導を行います。外国人留学生には、ティーチング・アシスタント制度を導入。また、政策秘書や国際公務員志望の学生には、アメリカのユタ大学大学院博士課程（政治学専攻）および同大学付属ヒンクリー政治研究所への海外研修を奨励します。

より高度な専門的職業人や政治リーダーの養成を柱に学部から大学院まで一貫した教育研究体制が整いました。

加藤普章ゼミ（法学部・政治学科）での一コマ

学部・大学院の整備拡充 7

文学研究科書道学専攻修士課程が開設

本学の長い歴史と伝統のある書道教育の中で、待望久しい「書道学専攻修士課程」がスタート。内外から期待が寄せられる研究機関です。

美の本質に迫り、書学・書法を広く考察研究。留学生を交え、活気ある課程に。

東松山校舎コミュニティギャラリーで開催された教員の書作展。学生の父母らが多数訪れ鑑賞した

平成12(2000)年4月に開設した文学部書道学科の完成年次にあたり、その上に書道学専攻の大学院修士課程の設置が検討され、平成15(2003)年4月より文学研究科書道学専攻修士課程が開設されました。本学の永い歴史のある書道教育の中での待望久しい研究機関のスタートで、学内からはもとより、他大学からも期待が寄せられています。

新井光風先生(文学研究科・書道学専攻)による講義の様子

カリキュラムの特徴は、美の本質に迫り、中国書学、日本書学、中国書法、日本書道の4つの体系を広く考察研究していくことを基本科目に置き、さらに文化財の中からの研究資料の発掘やそれらの保存・修復のための「文化財保存修復学特殊研究」、「美術史特殊研究」を設けます。関連科目として、日本文学、中国文学の分野も設置します。

教育目的には、研究者の養成、作家の養成はもちろん、大学教員、高等学校教員の養成、中・高校教員の再研修の場としても活用されます。一方、中国・韓国・台湾などからの問い合わせもあり、外国人留学生を交えた活気ある課程が期待されています。

学部・大学院の整備拡充 8

高度な外国語能力を有する人材の育成

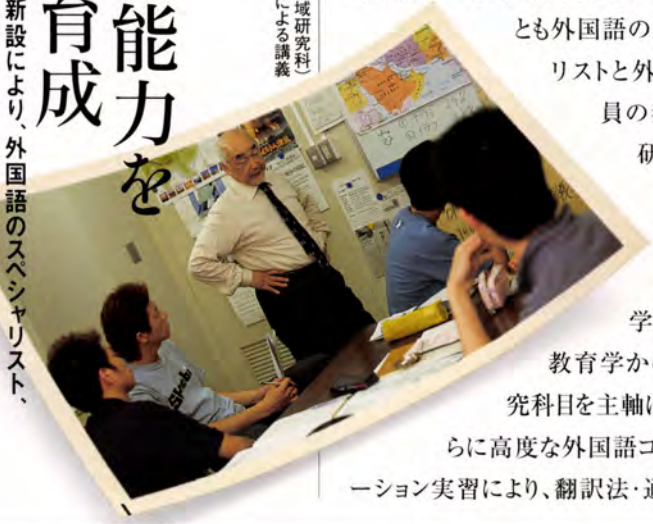
外国語学研究科とアジア地域研究科の新設により、外国語のスペシャリスト、また日本とアジア諸国との交流を担う人材の育成を教育目標とします。

高度な外国語のコミュニケーション実習など、より実践的なカリキュラム構成に。

大月実先生(外国語学研究科)による講義

平成11(1999)年4月に、本学大学院に外国語学研究科とアジア地域研究科が新設されました。これにより、本学の大学院は5研究科9専攻となり、一段と大学院教育が充実することとなりました。

外国語学研究科は中国語学専攻、英語学専攻、日本語学専攻で構成され、3専攻課程とも外国語のスペシャリストと外国語教員の養成・再研修を教育目標とします。外国語学・外国語教育学からなる研究科目を主軸にして、さらに高度な外国語コミュニケーション実習により、翻訳法・通訳法を学ぶ実践的なカリキュラムになっています。また広く国際社会に貢献しうる人材を育成し、社会的要請にも的確に応えていくことを可能とします。



片倉邦雄先生(アジア地域研究科)による講義

アジア地域研究科はアジア地域研究専攻の1課程からなり、昭和61(1986)年に開設された国際関係学部の教育・研究をふまえ、深く専門分野を修得し、地域言語をも理解した上で、日本とアジア諸国との交流を担う人材の育成などが設置の趣旨です。さらに平成13(2001)年4月、同研究科に博士課程が増設されました。

学部・大学院の整備拡充 9

経済学部・経営学部の学部教育を土台に大学院教育が一層充実

平成5(1993)年、経済学研究科に経営学専攻、さらに平成7(1995)年に博士課程を増設し、経済・経営の両学部を土台にした大学院教育が整いました。

急速に変化する経済・経営環境に対応し、より高度で専門的な経営実務家の養成を目指す。

大河内暁男先生
(経営学研究科)による講義

平成5(1993)年4月、本学大学院経済学研究科に経営学専攻が増設され、経済学研究科は経済学専攻(博士課程前期課程・博士課程後期課程)に経営学専攻修士課程が加わり、経済・経営両学科を土台として大学院教育が実施されることとなりました。

経営学専攻では、社会の要請に応じて経営・情報・会計に関する高度な理論と技術的能力を備えた専門的職業人の養成を目指してきました。また、実社会で活躍中の職業人に高度な教育の機会を提供することも重要な使命としてきました。

さらに平成7(1995)年4月には、同経営学専攻修士課程に博士課程後期課程を増設。設置の目的は、経済・経営環境が急速に変化する中で、多様化・高度専門化した企業経営に対応し、より高度な学際的理論を備えた専門的経営実務家を養成することにありました。また、経済学専攻同様、優秀な留学生の受け入れや社会人の生涯学習にも対応してきました。

そして平成15(2003)年4月には、経済学研究科経営学専攻から独立して、経営学研究科経営学専攻として開設され、博士課程前期と後期が設置されました。

学部・大学院の整備拡充 10

学部、学科の創立記念を祝う さまざまな行事、祝賀会を開催

本学の創立時代から変わらぬ理念と歴史を誇りに、時代の要請に対応した新しい教育の取り組みと発展をたたえ、各学部学科の創立を祝う行事が催されました。

大東文化学院創設とともに歩んできた文学部。日本の高度経済成長とともに発展してきた経済学部。

経済学部創設60周年記念事業

本学経済学部は、本学の前身で大正12(1923)年に創設された大東文化学院時代に発し、昭和13(1938)年に改組された本科第3部東亜政経科を母体としています。平成10(1998)年に創設60周年を迎え、さまざまな記念事業が行われました。

平成10(1998)年10月16日には、東京・帝国ホテルにおいて経済学部創設60周年記念講演と記念祝賀パーティーが開催されました。水口弘一氏(経済同友会副代表幹事・野村総研顧問)による「日本経済の現状と展望」と題する講演の後、引き続き記念祝賀パーティーを来賓など約240人を迎えて開催。会場では鈴木一道学部長による、「経済学部は昭和37(1962)年の改組以来、経済学科・経営学科とも飛躍的な規模拡大を遂げ、現在は5,000人の学生を擁します。また大学院開設による教育体制の充実も図られ、今後も時代に対応し、社会のニーズに適応した教育体制を図る意向」という挨拶や、諏訪学長からは「経済学部の環境創造学部構想をはじめとする学部・学科の改組を含めた改革こそ、学部のみならず本学の歴史に新しい一歩を築く」との言葉がありました。

経営学科創設30周年記念祝賀会。平成4(1992)年12月17日、グランドヒル市ヶ谷

経済学部創設60周年記念祝賀パーティー。平成10(1998)年10月16日、帝国ホテル

また平成10(1998)年11月6日には、本学経済研究所主催により「日本経済ルネッサンス—明るい未来を展望するために」と題する記念シンポジウムを板橋校舎で開催。本学経済学部の山本孝則教授と大杉由香講師による報告発表の後、東京大学社会科学研究所の橋本寿朗教授による講演が行われました。

さらに平成11(1999)年3月1日には、『大東文化大学経済学部創設60周年記念論文集』が発行されています。

経営学科創設30周年

本学経営学科が開設されたのは、昭和38(1963)年4月。その創設30周年記念祝賀会が、平成4(1992)年12月17日に東京新宿のグランドヒル市ヶ谷において開催されました。祝賀会では、中本博皓経済学部長や穂積学長、鈴木理事長が「文科系総合大学として発展してきた本学の中で、発足以来、本学の大きな柱の一つとして成長してきた学科であり、大学院新設の計画[平成7(1995)年開設]もあり、今後の発展が望まれる」などの祝辞を述べました。会場には来賓をはじめ、経営学科OB・OGら約200人が集まりました。

法学部創設20周年記念講演

本学法学部が、平成5(1993)年で創設20周年を迎え、その記念講演会が、同年6月22日に東松山校舎記念講堂で行われました。アメリカ合衆国ワシントンD.C.のアメリカン大学学長ミルスティン法学部教授を講師に招いての講演で、演題は「アメリカにおける刑事司法制度概観」。

ミルスティン教授による講演は、アメリカの刑事裁判の仕組みを具体的かつ詳細に説明し、アメリカの刑事裁判で特徴的な陪審員制度について、留学中の日本人高校生を射殺した容疑者が無罪となった判例などをあげて受講生の関心を集めました。

平成15(2003)年は創設30周年を迎え、学生や父母に向けて「あなたの

文学部創設70周年記念祝賀会。
平成5(1993)年9月20日、
池袋ホテルメトロポリタン

アイデアで法学部をもっと元気に!」の懸賞論文を募集するなどの記念アイデア・コンテストの企画を立てました。

文学部創設 70周年記念祝賀会開催

本学で最も古い歴史をもつ文学部は、平成5(1993)年9月20日で創立70周年を迎え、同年11月3日、文学部創立70周年記念祝賀会が東京・池袋ホテルメトロポリタンで、来賓や同窓生、現役教員など約200人の出席者を集めて盛大に開催されました。

教育学科創立25周年記念式典。
平成9(1997)年10月11日、
グランドパレスホテル

祝賀会は、濱久雄文学部長による開会の辞で始まり、佐藤学長や鈴木理事長の挨拶の後、来賓の方々の祝辞が続きました。また、その時来日中だった北京外国語学院の王福祥院長が、文学部創設70周年を祝う自作の詩を披露するとともに、北京外国語学院と本学との10年に及ぶ交流がさらに続くことを願うと祝辞を述べました。

法学部20周年記念祝賀会。
平成5(1993)11月6日、
板橋校舎大学院棟大会議室

教育学科創立25周年記念 シンポジウムと記念祝賀会

昭和47(1972)年に開設された教育学科では、平成9(1997)年10月11日に創立25周年記念行事として、「子どもは変わったか?これからの教育を展望する」をテーマに記念シンポジウムを板橋校舎1号館で開催しました。竹内常一国学院大学教授など6人のパネリストが参加し、激変する現代社会で、現在の初等教育を取り巻く環境や教育の在り方などについて活発な討論が繰り広げられました。

続いて同日の夕刻には、創立25周年記念祝賀パーティーが東京・千代田区のグランドパレス・ホテルで盛大に行われました。会場には、来賓や全国から駆けつけた卒業生や学園関係者、教職員ら約180人が出席。卒業生と在学生によるフルートとピアノ演奏で幕を開け、挨拶や来賓の祝辞の後、退職した教員、年度別卒業生による挨拶なども行われ、終始祝賀ムードに溢れていました。

英米文学科創設 30周年記念祝賀会

昭和42(1967)年に創設された英米文学科の創立30周年記念祝賀会が、平成10(1998)年10月17日、御茶ノ水・東京ガーデンパレスにて開かれました。諏訪学長の祝辞で「漢学の伝統ある本学に、西洋を学ぶ異色の学科の創設であり、創設当時は教授の方々の並々ならぬ苦労とご尽力があった」ことなどが披露され、その苦難を乗り越えて、現在の入学定員の増員や海外留学制度など教育課程の充実、大学院の設置など今日の発展に至ったことを称え、今後のさらなる展望に期待したいと述べました。祝賀会には、卒業生など120人ほどが集まりました。また祝賀会に先立ち、同日午後に板橋校舎1号館で、作家丸谷才一氏による「夏目漱石」をテーマにした講演会を開催。丸谷氏による漱石の秘密に迫る作品の解説に、学生たちは興味深く聞き入りました。

社会の変化や要請に応えて開設され、躍進してきた各学部学科。時代の波を乗り越え、今後の更なる展望が期待されます。

第2章　新たなる時代へ

森々と、飛翔

第3節

全学に広がる国際交流の輪

本学の海外の大学との学術的交流および交換留学生による国際交流の歴史は長く、古くは28年も交流が続く大学もあります。この事業は、本学の理念「東西文化の融合と研究」に基づくものであり、それは単なる言語の修得だけではなく、その背後に流れる文化や伝統、精神に触れ、理解し学んでいかなければならないとするところからきています。年々交流校は増え、現在、本学との交流協定校は、海外16カ国45大学に及んでいます。

全学に広がる国際交流の輪 1

学術資料や人の交流による、学術的向上を図る中国との交流

日中間で初めて大学同士の交流協定締結となった本学と北京外大。その学術交流は、24年後の現在も変わらず続いています。

本学と伝統的に深い関わりをもつ中国との交流。その中国での協定校は、現在8校になります。

前身の大東文化学院時代から、中国とは伝統的に深い関わりがあった本学ですが、中国の国立北京外国語学院（のち北京外大）と正式に交流協定を締結したのは、昭和55（1980）年のことです。日本と中国との平和友好条約が締結された後、両国間で学術交流や留学生の往来が増えてきて、新時代の友好政策の要請に応えられる人材を相互に養成することがその目的です。北京外大は、中国で最も権威ある外国語学校で、24の言語を教える中、特に高度の日本語人材養成に力を入れ、国の重点校となっています。

交流協定の調印は昭和55年（1980）年7月1日に北京外大内で行われ、協定書は即日発効。日中間で特定の大学が交流協定によって提携を実現したのは、これが初めてのことでした。協定の主な内容は、北京外大は、本学のために夏季中国語セミナーを開講すること、両大学は教員などを相互に派遣すること、本学側から研究生（留学生）を送るなどです。この協定に基づき、同年7月末にはさっそく第1回研修団34人を派遣しました。

北京外大とはその後も協定を更新し続け、現在までその交流はすでに20年以上になります。現在も毎年夏、本学から20から30人の語学研修生が留学し、約1カ月の間北京外大で学んでおり、本学でも北京外大から客員教員や研究員、留学生を受け入れています。

山東大学で講演を行う須藤学長

山東大学のキャンパス模型を見学する

また平成12（2000）年10月12日には、中国山東大学と学術交流協定を結んでいます。山東大学は100年近い歴史をもつ中国の国家重点大学の一つで、同年の7月には山東工業大学と山東医科大学と合併し、より大規模な総合大学となっています。また同大には世界に誇る考古学博物館もあります。

学術交流協定の内容は、互恵平等の原則に基づき、交換学生（1年以内の修学期間）の派遣、研究活動のための交換教授の派遣、学術資料刊行物の交換を行うなどです。本学はこの学術交流協定により、中国語の修得ばかりでなく、その背景に流れる文化的伝統と精神も理解し、学術の向上を目指します。山東大学との協定締結も合わせ、本学と中国での協定校は、全部で8校となりました。

山東大学（中国）との学術協定の調印が終わって握手を交わす須藤学長と展清学長（山東大学）

交流協定20周年に再度協定をした後、握手を交わす須藤学長と陳乃芳学長（北京外国語大学）。平成12（2000）年5月、北京外国語大学にて

全学に広がる国際交流の輪 2

トンガ王国ツポウ4世国王に名誉博士号贈呈

23年前、トンガ王国からの二人の留学生を皮切りに始まった本学との交流。以来、国王の教育振興、国際友好促進の功績を称えて、本学初の名誉博士号を贈呈。

トンガ王国との交流は、20年以上の歴史があり、本学のみならず、日本とトンガとの国際友好にも多大に貢献。

トンガ王国タウファアハウ・ツポウ4世国王に、本学から初の名誉博士号が贈呈されたのは、平成7(1995)年9月21日のことです。

トンガ王国と本学との交流は、昭和56(1981)年に経営学科に初の留学生2人が入学したのを皮切りに、今日まで20年以上も続いています。かねてから親日家であったトンガ国王と本学の中野敏雄名誉教授との交流から、本学への留学生受け入れ依頼の話があり、実現したものでした。トンガ王国からの留学生は、学業はもとより、文化、スポーツ面でも活躍。特にトンガのナショナルスポーツでもあるラグビーでは、大学ラグビーのみならず、日本や世界の舞台で活躍し、日本ラグビー界に新風を送り込みました。以来、本学で学び卒業したトンガ王国からの留学生は、学部、大学院、別科研修生を含め、既に16人を数えています。

トンガ国王は、国の発展の礎は教育にありとの考えで、これら留学生たちが日本の大学を卒業して帰国し、トンガ王国の発展に内外より寄与することを常に願っていました。

以上のことから、ツポウ4世国王は、国家元首として自国の発展と教育の振興に多大な実績を挙げられたとともに、経済・文化など多方面にわたる交流を通して、日本との友好の促進など国際協調に大きく貢献されたとして、本学の名誉博士の称号が贈られることとなったのです。

本学から初の名誉博士号を授与されたツポウ4世国王。式帽も合わせて贈呈された。平成7(1995)年9月21日

ツポウ4世国王の一行は、学位贈呈式のため本学東松山校舎をご訪問になり、記念講堂において、佐藤定幸学長から名誉博士の学位記および学位章を贈呈されました。

佐藤学長は「ツポウ4世陛下は、国家元首として自国の教育制度の確立をはじめとして、新しい国づくりのために尽くされるとともに、アジア・太平洋の平和と繁栄を目指し幅広く貢献されておられ、心から敬意を表する次第です。貴国と本学との交流が、今後ますます密接に広がっていくことを祈念しています」と挨拶。続いて国王は、「トンガからの留学生が貴学で学問やスポーツなどの各分野で活躍させて頂いて感謝しています。今後とも温かい友情を貴学とトンガの間に、さらに日本国全体の間に育てていき、将来さらに日本とトンガの友好関係が大きく花開くことを期待しています」と英語でスピーチし、近藤正臣経済科教授が通訳をしました。贈呈式は、吉田茂文部省高等教育局長、吉川毅男外務省欧亜局大洋州課調査官をはじめ、来賓など約460人が出席して行われ、この様子は翌日の各新聞の社会面やNHK総合テレビのニュースでも紹介されました。

竹内理事長、須藤学長、辻野常務ら一行8人が、トンガの国王ツポウ4世国王を表敬訪問。平成13(2001)年8月27日

全学に広がる国際交流の輪 3

アメリカ合衆国ウエスト・フロリダ大学など海外の大学との交流協定

本学の学生が、国際人としての知識と素養を身につけられるよう、各国の大学と交流協定を締結し、相互の学生交流を積極的に行っています。

本学がはじめてグリフィス大学（オーストラリア）と交流協定を締結して以来、中国やアメリカをはじめ、世界の様々な大学との交流の輪が広がり続けています。

ウエスト・フロリダ大学

昭和38（1963）年創立の州立大学。フロリダ州ペンサコーラに位置する。学生数8,000人。クラスは少人数制により個人指導が行き届く。1,600エーカー（東松山校舎の21倍）のキャンパスには、緑豊かな自然が溢れています。平成8（1996）年に交流協定を結び、現在までに本学から20人以上が留学している人気の大学。

北京外国語大学

北京外国語大学は本学が中国で交流協定を結んだ初めての学校です。昭和16（1941）年の創立で中華人民共和国の中でも歴史の古い教育重点大学の一つ。中国語、英語、フランス語、アラビア語など31専攻があり、学生総数は約3,600人。

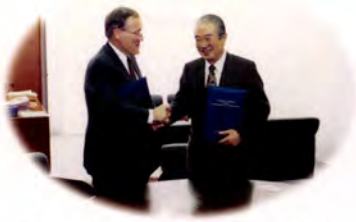
本学からは短期留学はもちろん長期留学のほか、学部学科を越えた夏期研修団を派遣しています。

高麗大学校

高麗大学校は、大韓民国の民間資本で設立された最初の大学。明治38（1905）年の創立で延世大学と並ぶ私立の名門校。ソウル市内の広大な敷地にあり、韓国の早稲田大学と言われています。本学と協定を結んだ最初の韓国大学。協定校留学のほか、奨学金留学の対象校となっています。学生数は2万3,000人。

大東文化大学協定校

平成12(2000)年9月27～29日に開催された、
第1回広島平和教育セミナー



コーカ・カレッジ(米国)との協定に調印した
本学佐藤学長とジェームス・ダニエル学長。
平成7(1995)年11月27日

グリフィス大学ロイ・ウェブ学長が、
本学を訪問、諏訪学長と懇談。
平成9(1997)年1月

平成15(2003)年4月現在・署名者は最新更新時

	●大学名	●区分	●国名	●署名者(大東文化大学)	●署名者(協定校)	●協定内容	●締結年月
1	グリフィス大学	国立	オーストラリア	学長 佐藤定幸	学長 L.R. Webb	学部	1975.04
2	北京外国語大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	学長 陳　乃芳	学部・教員	1980.07
3	パジャジャラン大学	国立	インドネシア	学長 須藤敏昭	学長 H.A.Himendra W.	学部・大学院・教員・現地研修	1985.07
4	チュラロンコーン大学	国立	タイ	学長 須藤敏昭	学長 M.R.Kalaya Tingsabad	学部・教員・現地研修	1985.11
5	上海師範大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	学長 楊　張廣	学部・大学院・現地研修	1987.12
6	高麗大学校	私立	韓国	学長 須藤敏昭	学長 Jung-Bae Kim	学部・教員・現地研修	1988.03
7	カラチ大学	国立	パキスタン	学長 杉本良吉	学長 Manzooruddin Ahmed	現地研修	1988.03
8	ハノイ国家大学	国立	ベトナム	学長 須藤敏昭	学長 Phung Huu Phu	学部・大学院・教員・現地研修	1988.10
9	ワイカト大学	国立	ニュージーランド	学長 杉本良吉	学部長 フオルカー・フェルマン	語学研修	1989.11
10	シーラーズ大学	国立	イラン	学長 穂積重行	学長 S.Reza Ghazi	現地研修	1991.10
11	ラジャスタン大学	国立	インド	学長 穂積重行	学長 Rameshwari Sharma	現地研修	1992.02
12	ヴィクトリア大学	国立	ニュージーランド	学部長 三好郁夫	総務部長 Andrew Neeson	語学研修(英語)・学生	1993.10
13	釜山外国語大学校	私立	韓国	学長 諏訪義英	総長 曹　圭香	学部・大学院・教員	1994.01
14	東呉大学	私立	台湾	学長 須藤敏昭	学長 劉　源俊	学部・大学院・教員	1994.06
15	ウエストミンスター大学	国立	イギリス	学長 須藤敏昭	学長 Geoffrey Copland	学部・教職員	1995.01
16	ユタ大学	州立	アメリカ	学長 佐藤定幸	学長 Arthur K.Smith	大学院・教員	1995.05
17	アレキサンドリア大学	国立	エジプト	学長 須藤敏昭	学長 M.A. Mahgoub	学部・現地研修	1995.05
18	ウエスタン・シドニー大学	州立	オーストラリア	学長 須藤敏昭	学長 Janice Reid	学部・大学院・教員	1995.11
19	コーカー・カレッジ	私立	アメリカ	学長 佐藤定幸	学長 James D. Daniels	学部・教職員	1995.11
20	ウエスタン・ミシガン大学	州立	アメリカ	学長 佐藤定幸	学長 Elson Floyd	学部	1996.01
21	ウエスト・フロリダ大学	州立	アメリカ	学長 諏訪義英	学長 Morris L. Marx	学部・教職員	1996.10
22	ウィンザー大学	国立	カナダ	学長 諏訪義英	学長 Ron W. Ianni	学部・教職員	1997.03
23	中山大学	国立	中国	学長 諏訪義英	学長 王　明	学部・大学院・教員	1997.04
24	ジョージア大学	州立	アメリカ	学長 諏訪義英	学長 Michael F. Adams	学部・教職員	1998.08
25	キール大学	国立	イギリス	学務局長 小林 茂	学局 E.F. Slade	語学研修	1998.09
26	ノーザン・アリゾナ大学	州立	アメリカ	学長 諏訪義英	学長 Clara M. Lovett	学部・教職員	1998.10
27	復旦大学	国立	中国	学長 諏訪義英	国際文化交流学院長 朱　立	学部・大学院・教員	1999.01
28	ジャワハルラルネルー大学	国立	インド	学長 諏訪義英	学長 Asis Datta	大学院	1999.02
29	サザン・コロラド大学	州立	アメリカ	学長 諏訪義英	学長 Tito Guerrero Ⅲ	学部	1999.03
30	パンジャーブ大学	国立	パキスタン	学長 須藤敏昭	学長 Lt.Arshad Mahmood	学部・現地研修	2000.03
31	山東大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	学長 展　涛	学部・大学院・教員	2000.10
32	ブレシア大学	州立	アメリカ	学長 須藤敏昭	学長 Sr. Vivian M. Bowles	学部・教職員	2000.12
33	ニュー・イングランド大学	州立	オーストラリア	学長 須藤敏昭	学長 Ingrid Moses	学部・教職員	2001.01
34	北京師範大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	学長 袁　貴仁	学部・大学院・教員	2001.01
35	国立中山大学	国立	台湾	学長 須藤敏昭	学長 劉　維琪	学部・大学院・教員	2001.03
36	モハメッドⅤ世大学	国立	モロッコ	学長 須藤敏昭	学長 Said Bensaid Alaoui	大学院	2001.04
37	ブリテッシュ・コロンビア大学	州立	カナダ	学長 須藤敏昭	学長 Jane Hutton	現地研修	2001.06
38	延世大学校	私立	韓国	学長 須藤敏昭	学長 曹　哲鉉	現地研修	2001.08
39	成均館大学	私立	韓国	学長 須藤敏昭	学長 Yoon-chong Shim	学部・大学院・教員	2001.11
40	リン大学	私立	アメリカ	学長 須藤敏昭	学長 Donald E. Ross	語学研修	2001.12
41	中国美術学院	国立	中国	学長 須藤敏昭	院長 許　江	書道研修	2002.02
42	国立台湾芸術大学	国立	台湾	学長 須藤敏昭	校長 王　銘顒	書道研修	2002.07
43	吉首大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	校長 游　俊	学部	2003.01
44	サウスイースト・ミズリー州立大学	州立	アメリカ	学長 須藤敏昭	学長 Ken Dobbins	学部・大学院・教職員	2003.01
45	西北大学	国立	中国	学長 須藤敏昭	学長 孫　勇	学部・大学院・教員	2003.03

全学に広がる国際交流の輪 4

同時通訳者育成のために、通訳演習室が完成

大学院レベルの通訳者養成コースでは日本初、「経済通訳論」コースが開設。プロの同時通訳者を養成するための演習施設が設置されました。

通訳演習室でのワークショップは、さながらミニ国際会議のような臨場感。

プロの通訳を養成する施設として板橋校舎研究管理棟に設けられた「通訳演習室」

平成7(1995)年4月、本学大学院経済学研究科に、新しく「経済通訳論」コースが開設されたことに伴ない、翌年の平成8(1996)年4月には、プロの通訳者を養成するための施設として、本学板橋校舎の研究・管理棟の5階に、通訳演習室が設置されました。また、「経済通訳論」コースは、大学院レベルの通訳者養成コースとしては日本初のコースです。

この通訳演習室を活用して、平成9(1997)年9月24日には、本学とゲーテ・インスティテュート(ドイツ語とドイツ文化を紹介するドイツ政府の教育機関)との共催で、会議通訳者のためのワークショップ(研究会)が開催されました。このワークショップには、大学院で経済通訳を専攻する大学院生をはじめ約20人の学生が出席しました。

まず午前中に、ジュネーブ大学のジェラール・イルク教授(国際決済銀行主任通訳)による「国際会議の種々のタイプと通訳者の戦略」と題する講演が行われ、午後には、同じくジュネーブ大学のレイモンド・ボワイヤット教授による「通訳の声」をテーマに講演およびエクササイズを行いました。

講演に続いて、相澤啓一筑波大学教授をはじめ、本学からは経済通訳論を指導している近藤正臣教授、水野的講師、アンティエ・ヴィッツェル講師らも参加して「社会文化的視点から見た通訳者の役割」について活発な意見が交わされました。

これらワークショップによる研究会は、すべて日本語と英語、ドイツ語の間で同時通訳されて進行し、さながらミニ国際会議の様相で行われました。

パジャジャラン大学の学長が来校した際、通訳演習室で。平成12(2000)年5月19日

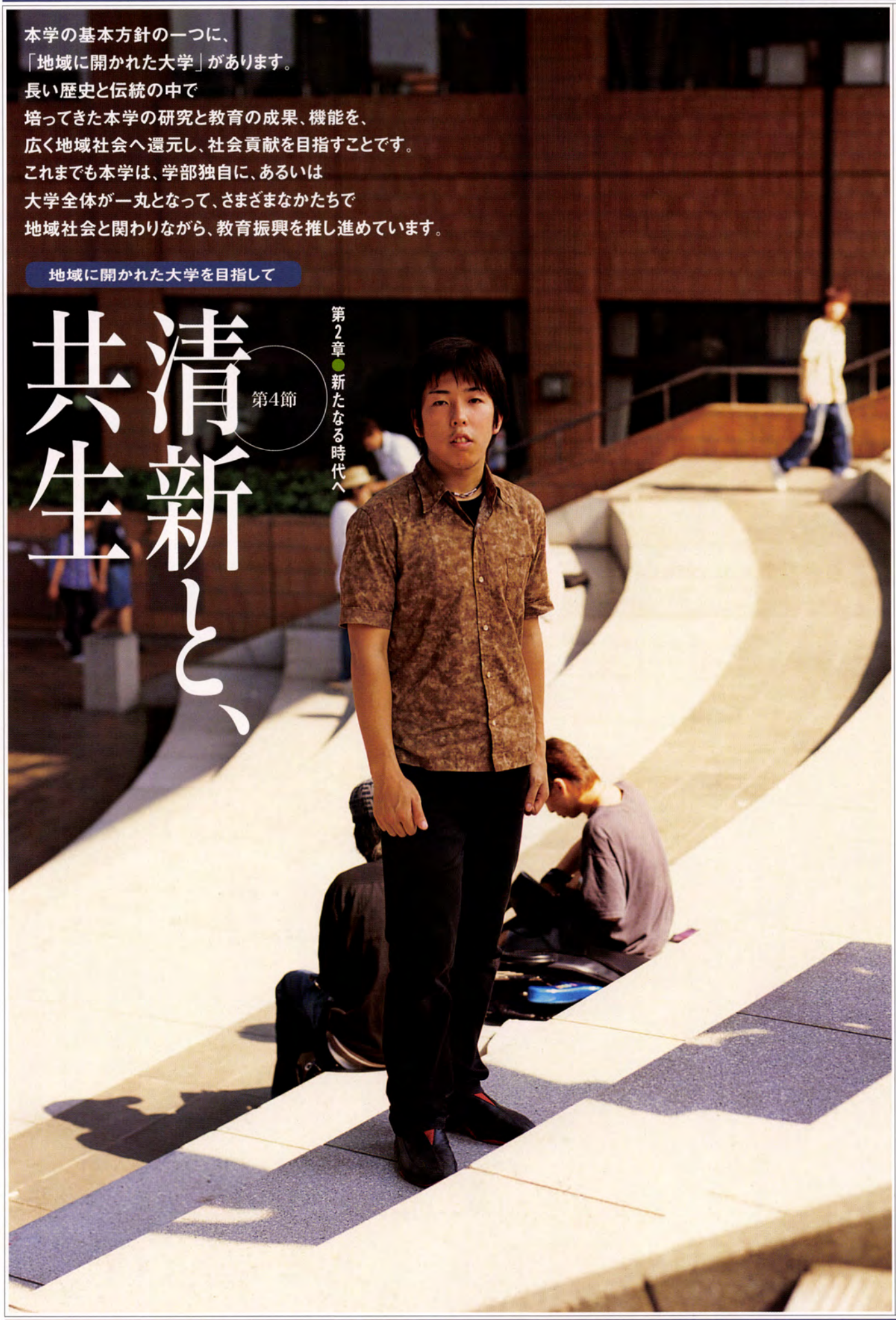
本学の基本方針の一つに、
「地域に開かれた大学」があります。
長い歴史と伝統の中で
培ってきた本学の研究と教育の成果、機能を、
広く地域社会へ還元し、社会貢献を目指すことです。
これまでも本学は、学部独自に、あるいは
大学全体が一丸となって、さまざまなかたちで
地域社会と関わりながら、教育振興を推し進めています。

地域に開かれた大学を目指して

第2章●新たなる時代へ

清新と、共生

第4節



地域に開かれた大学を目指して

1 書の美学を再発見。全国書道展と書道講座を開催

公正かつ厳しい審査で定評のある本学主催の「全国書道展」は、44年の古い歴史を誇る権威ある公募書道展です。

本学の伝統ある書道学を、2日間にわたり高校生のために公開する「書道講座」。

真剣な表情で書道に励む高校生たち。
全国から200人もの参加者が集まる人気講座の一つである

書道に長い伝統と実績をもつ本学が主催する「全国書道展」は、毎年1回秋に実施される公募書道展で、その歴史は古く、平成14(2002)年11月の開催で第44回目を迎えました。この公募展は幼児から一般まで応募できること、また審査が厳しいことでも定評があり、特に高校生の応募が多いのが特徴です。第44回の応募総数は、約2万2,400点。「いい作品は必ずとる」と言う方針で行われる審査は、まさに厳正・公正で、本学の書道教員が責任をもって審査にあたります。

全国展の入選作品展示。平成14(2002)年11月

また、本学の書道を広く高校生にも公開しようという意図で平成6(1994)年から始めたのが、「高校生のための書道講座」。夏休み中に2日間にわたって開講される講座で、毎年関東近郊を中心に、全国の高校から200人ほどの参加者が集まっています。この講座は本学書道研究所の主催によるもので、同研究所は、平成12(2000)年の本学文学部書道学科の設置に向けた準備と申請に、大きく関わりました。

地域に開かれた大学を目指して

2 アジアの民族と文化を知るために

昭和61(1986)年から始まった「アジアの民族と文化」がテーマの公開講座は、本学の東洋研究所が主催する、広く一般市民のための公開講座です。

本学が培ってきた研究の成果を地域社会の方々にも公開する催し。

遠藤光正元研究所長の講演

本学の東洋研究所主催による「アジアの民族と文化」と題した公開講座が、平成14(2002)年11月7日、同14日、同21日の3回にわたって行われました。会場は、本学大東文化会館の大会議室。

1回目は、田辺清国際文化学科教授による「東西の肖像画にみられるこころの描写」というテーマの講演。2回目は、岡崎邦彦東洋研究所助教授による「最近の中国事情—政治・経済・文化そして生活」についての講演。岡崎助教授は、同年3月から6カ月間中国で研修し、北京外国語大学を中心に山東省などを回って実施した、日中友好都市調査について報告をしました。そして3回目は、東洋研究所元所長で兼任研究員の遠藤光正氏による「嵯峨天皇と渤海大使王文矩」について2時間ほどの講演を行いました。

受講者はのべ100人ほどで、この「アジアの民族と文化」をテーマにした公開講座は、毎年実施する方針です。

東洋研究所が主催し、一般市民を対象に開催されている公開講座

地域に開かれた大学を目指して 3

大東文化大学と板橋区による地域連携。「地域デザインフォーラム」が開始

新時代に向けて克服しなければならない地域社会の課題について、本学と区とが「協働」して考え、明確なビジョンを示すことを目的にスタート。

大学と地方自治体が共同研究により政策を提言。全国でも極めて珍しい、先駆的な試みです。

地域デザインフォーラム開始

本学はかねがね「地域社会に開かれた大学」を基本方針とし、本学が培ってきた研究と教育の成果・機能を地域社会へ還元し貢献することを目指してきました。その試みとして、エクステンションセンターを中心にオープンカレッジ講座を開催し、地域への要求に応えられる体制を努めてきました。

そのような中で、本学と板橋区との共同研究についての話が持ち上がり、約半年間の準備期間を経て、平成12(2000)年5月18日、「地域デザインフォーラム」(地域連携研究)の協定書の調印に至った次第です。この地域デザインフォーラムは、本学と板橋区が「新しい時代に向けて克服すべき地域社会の課題に挑戦して、心豊かにいきいきと生活できる板橋を創造する」ことを目指したもので、本学が一丸となって地域社会と関わる初めての試みです。また、地域が抱える政策課題を自治体と大学が共同研究する試みは、全国的にも珍しく先駆的なケースです。調印式には、大学側から須藤学長、竹内理事長、和田守法学部長ら9人が、板橋区側からは石塚輝雄区長ほか助役、収入役ら6人が参加しました。

地域デザインフォーラム協定書に調印。板橋区役所にて。平成12(2000)年5月18日

共同研究の期間は当面Ⅰ期2年間で進め、平成12(2000)年度の研究は、主に現状の把握、課題の摘出、課題についての整理・研究、解決策についての検討を中心に進めました。大学側からは中村昭雄政治学科教授を中心に、法学部、経済学部、経営学部から11人の教員が、板橋区側からは係長以上の職員12人が参加。参加者は、研究の主体となる3つの分科会に分かれ、月2回ほどの分科会で研究を進めました。3つの分科会は、地域社会Ⅰ(まちづくりとコミニュティ)、地域社会Ⅱ(福祉)、地域社会Ⅲ(産業振興)とし、分科会ごとに市民活動調査、高齢者意識調査、先進地視察などを実施。全体での合宿研修も行いました。

平成13(2001)年3月10日には、「パートナーシップを基本理念とした地域社会の在り方について」というテーマで、地域デザインフォーラムを本学で開催。日本NPOセンター常務理事の山岡義典氏を講師とした基調講演に続き、区内の産業界、NPO団体、区民によるシンポジウムを行いました。このほか公開講座も開催し、共同研究の成果を区民に公開しました。

また同年3月には、研究員1人1万字というレポートを作成し、320頁に及ぶ「共同研究中間報告書」をまとめました。なおこの年には、地域デザインフォーラムのホームページも開設しました。

2年目にあたる平成13(2001)年度の連携研究は、最終報告書をまとめることを念頭に、基本的には12年度の研究を継続発展させました。各分科会は研究会のほかに、調査結果の分析、ヒアリング、合宿、視察などを行って、最終報告の作成にあたりました。

さらに同年12月7日、須藤学長と石塚区長の出席のもとで「地域デザインフォーラム」を開催。諸井虔・太平洋セメント相談役(地方制度調査会会長)を講師に「分権型社会における区市町村の役割と住民意識の在り方」というテーマで基調講演が行われました。その後シンポジウムでは、各分科会から研究成果の報告がありました。

大学院で講義する石塚区長。
平成14(2002)年4月

そして平成14(2002)年3月26日、本学板橋校舎で2年間にわたる板橋区と本学による地域デザインフォーラム(地域連携研究)の『最終報告書』(全386頁)の報告会が行われました。

この共同研究を通して、法学部と経済学部では、平成12(2000)年から板橋区においてのビジネス・インターンシップを開始。さらに翌13(2001)年からは、板橋区との連携歴史講座「高島秋帆学」も開講しました。一方、大学院法学研究科では、平成14(2002)年から、板橋区の部長クラスが講師となる「現代政治論特殊講義Ⅱ」も新設されました。こうして2年間の地域連携研究は、地域社会の課題に具体的な政策を提言するなど、多くの成果をあげて無事終了しました。

平成14(2002)年度からは、第2期としてこの地域連携研究を継続発展。すでに第2期の研究活動として、本学と板橋区内の産業界と区が連携し、新しいシステムに基づく産業振興を進めました。具体的に「起業アイデア・コンテスト」が実施され、2人の学生起業家が誕生しました。

この連携研究が、今後も本学の教育と研究にとって刺激的なものとなり、地域住民の信頼に応え、実りある成果が達成できるよう目指していきたいものです。

環境創造講座スタート

本学と板橋区共催による「板橋・環境創造講座」も開催。この講座は、平成13(2001)年4月に本学に開設された環境創造学部の講義の一環として開かれ、「かけがえのない自分たちの都市環境・生活環境を、いかにしたら創造できるか」を主体的に学ぶことを目的にして、社会人、大学生、高校生を交えて考えようとする講座です。

講座の第1回目は同年4月12日、本学板橋校舎1号館の教室を会場にして開催。受講生約40人と大学関係者、高校生、区役所関係者など約120人が集まり、石塚区長と本学須藤学長による基調講演が行われました。この講座は7月19日までの毎週木曜日の夕方に開催され、本学教員や板橋区環境保全課職員の講演とパネルディスカッションも行われました。

本学板橋校舎で行われた地域デザインフォーラムの最終報告会。
平成14(2002)年3月26日

本学と板橋区の共催による「板橋環境創造講座」。
平成13(2001)年

公開講座の開催や産業振興も進めるなど、多くの成果をあげ、今後も連携研究による地域社会への貢献・共生を目指します。

地域に開かれた大学を目指して 4

エクステンションセンター開設10周年記念シンポジウムを東松山校舎で開催

本学が長年培ってきた知的財産を広く地域社会に開放、還元する方針に基づき、平成5(1993)年に開設した、生涯学習のためのオープンカレッジです。

平成5(1993)年4月に本学で開設した「エクステンションセンター」は、大学の知的財産を広く地域社会に開放するという方針に基づいて開設された、生涯学習のためのオープンカレッジです。発足時はわずか2講座という形でのスタートでしたが、現在では春期、秋期をあわせて200近い講座を開講するまでになりました。講座の内容も、「東上線沿線学」、「郷土の歴史を学ぼう」などの地域に沿った歴史講座をはじめ、語学、文学、考古学などの一般教養から、陶芸、パソコン、フィットネスなどの趣味、実務、健康に至るまで多種多様にわたります。会員数も年々増加し、現在1,730人ほどを擁し、センターの規模、講座内容でも今や東上線沿線の大学では屈指の存在となりました。

安岡路洋氏(古民具鑑定家)を招いて「お宝鑑定」
平成11(1999)年11月13日
東松山校舎記念講堂

平成10(1998)年10月24・25日の両日には、エクステンションセンター開設5周年を記念したシンポジウムが、本学東松山校舎・記念講堂にて開催されました。「稲荷山古墳の鉄剣研究20年の成果と課題—115文字の銘文が語る古代東国と大和政権を改めて考える」というテーマで、30年ほど前に埼玉稲荷山古墳から出土した辛亥銘鉄剣(国宝金錯銘鉄剣)から115文字の銘文が検出されてから20年になったのを記念し、日本、韓国、中国の古代史・考古学研究の第一人者11人を招いてのシンポジウムです。2日間の講演には、エクステンションセンター会員120人を含むのべ600人を超える参加者があり、熱心に受講していました。

平成14(2002)年10月26日には、開設10周年イベントとして、沖縄民謡の上原正吉さん一行による「宮古調琉歌(ナークニー)」の公演を東松山校舎記念講堂で行いました。この席で、開設時から尽力された金井塚良一氏、金子廣行氏、倉田信靖氏に感謝状が贈られました。このエクステンションセンターには2つの役割があり、1つは常に地域と密接なつながりを目指してともに歩む存在、もう1つは学生たちの知的向上と就職に役立つ資格講座の増強です。平成13(2001)年ころからスタートしたダブルスクールは、板橋校舎、東松山校舎、大東文化会館を会場に、秘書技能検定や簿記検定、宅地建物取引主任者の受験対策講座など、計41講座を導入して取り組んでいます。

発足時はわずか2講座でのスタートが、現在では内容も規模も充実拡大し、200講座も開講。

平成14(2002)年10月
エクステンションセンター
10周年記念、沖縄民謡公演
東松山校舎記念講堂

地域に開かれた大学を目指して 5

ビジネス・インターンシップを開始

平成11(1999)年から試みが始まったビジネス・インターンシップ。地域連携研究の一貫で、板橋区役所と東松山市役所での研修も始まりました。

学生が実社会の現場で体験研修しながら学ぶ、ビジネス・インターンシップ。

平成12(2002)年9月
研修先の日興産業株式会社で

本学で最初にインターンシップを試みたのは平成11(1999)年で、経営学科のゼミと板橋区との共催により、板橋区内の製造業3社の協力で実施されました。8月下旬から3週間の期間で、経営学科の3年生22人が参加。インターンシップとは、学生が企業や地方自治体などの現場で仕事の一端を担当させてもらい、体験研修しながら勉強する方式ですが、製造業の現場に文科系の学生が入るのは珍しい例で、地元企業の理解と協力の結果、実現しました。

また、板橋区と本学との地域連携研究(地域デザインフォーラム)の一環として、ビジネス・インターンシップが開始されることになり、平成12(2000)年から法学部政治学科の新カリキュラムに設置されました。研修先は板橋区役所内で、地方行政機関の現場体験を通して、学生たちに区政および地域社会を身近に学んでもらうのが趣旨です。その後、東松山市との連携も得られ、平成15(2003)年度からは、東松山市役所インターンシップ研修もスタートしました。

地域に開かれた大学を目指して 6

国際関係学部の民族資料室を公開

アジア諸国の社会や文化に知的関心を広げる場として、国際関係学部が学部創設時から構想し、民族資料室を手がけました。

週2回の定期公開となり、地域の小学生の「総合学習」の場としても活用されています。

アジジ諸地域の文化に対する
知的関心を広げるために集められた資料

国際関係学部の民族資料室は、学部創設時より、アジア諸地域の社会や文化に対する知的関心を広げる場として構想され、資料収集に着手しました。資料整理にとりかかったのは平成3(1991)年からで、資料室も東松山校舎の第2研究棟から、現在の同管理棟の4階に移転しました。

平成5(1993)年1月に初めて3日間の学内公開を行い、東は韓国から西はエジプトまでのアジア全域にわたる珍しい楽器や生活用具、民族衣装など民族資料に、多数の見学者が訪れ好評を得ました。資料室は同年6月から週1回の定期公開となり、平成8(1996)年以降は週2回の一般公開に。近年では、地域の小学生の「総合学習」の場としても利用されています。

東松山校舎管理棟に
設置された民族資料室

現在の標本資料は約800点で、文献資料(図版・図録)約250点をはじめ、映像資料、音響資料、地図類が公開されています。この資料室を、学生たちの現地研修や卒業研究、または個人旅行などにも情報提供できるよう、アジア地域研究の総合情報センター的機能をもつ資料室に育てようとしています。

地域に開かれた大学を目指して 7

ピーターラビット・デー（英文学会／ビアトリクス・ポター・コレクション）

文学部英米文学科の発案で集められたビアトリクス・ポター・コレクションから、広く全国に開かれた学会を目的に「ピーターラビット」をテーマに開催。

所蔵コレクションには、現在入手困難な資料が多く、その質の高さでも評価されているコレクションです。

平成13（2001）年6月23日、本学東松山校舎六十周年記念講堂で英文学会による「ピーターラビット・デー」と称した春期学会が開催されました。英文学会は、英米文学科の専任教員や学生、大学院生、卒業生で構成され、年2回の学会を開催。今回は広く全国に開かれた学会を目指し、世界中に多くの読者をもつ児童文学の傑作『ピーターラビット』をテーマに開催したものです。作者ビアトリクス・ポターの生涯のビデオ上映や『ピーターラビットのおはなし』の英語と日本語による朗読会、ピーターラビットの研究で知られる吉田新一立教大学名誉教授の講演ほか、数々の展示や閲覧コーナーに、多くの一般人や学生が集まり楽しみました。

この学会で披露した資料、書籍は、本学図書館・文学部英米文学科所蔵のビアトリクス・ポター・コレクションによるもので、平成12（2000）年度から英米文学科の発案で始められたものです。このコレクションには、貴重な初版本や今では入手困難な資料も含まれ、各地で開催される「ピーターラビット展」にも多数貸し出されるほど、その質の高さが評価されています。いずれ一般公開しながら、ポターファンとともに研究の輪を広げようと考えています。

明治35（1902）年発行
タイトル名「The Tale of Peter Rabbit」初版本
作者・ビアトリクス・ポター

明治26（1893）年発行
タイトル名「A Happy Pair」
作者・ビアトリクス・ポター

明治35（1902）年発行
タイトル名「The Tale of Peter Rabbit」初版本
作者・ビアトリクス・ポター

本学が実践してきた教育ならびに学術研究の
集大成とも言うべき論文などの知的資産が、
書籍という形となって結実しています。
また、長年培ってきた本学の知の集積を
広く一般の人々へと還元するため、
公開講座やシンポジウムなども開催しています。
本学は、こうした地道な活動を通じて、
社会に開かれた大学を目指していきます。

幅広い研究活動

淡々と、学究

第5節

第2章●新たなる時代へ

幅広い研究活動

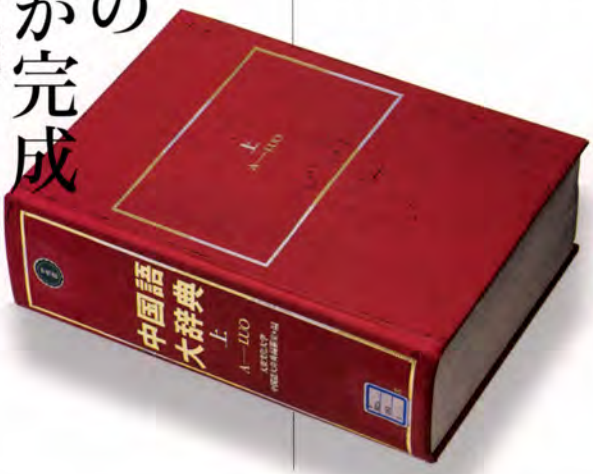
1 総語彙26万語の中国語大辞典が完成

創立60周年記念事業として十余年をかけて編纂、中国語辞典として最大規模の内容を誇ります。

中国語辞典として最大規模の内容を誇る『中国語大辞典』（全1巻、2分冊）が、平成6（1994）年3月に完成し、角川書店から発売されました。創立60周年記念事業として、昭和57（1982）年4月から十余年をかけたもので、編纂室では「国際化時代に贈る中国語辞典の決定版。研究図書、実用図書としても最高の内容」と自負しています。

本文約4,200ページ、親文字1万5,000、見出し語26万語。編纂方針は①語彙の処理には中華民国以降の特に昭和24（1949）年の解放後の研究成果を取り入れる②虚詞は記述を平易、詳細にする③語彙の範囲を拡大し、普通語、方言、専門語のほか、現代で使用される古語にも広げる④古い白話語（口語・俗語など）は宋代以降の文学に見られるものを取り入れ、現代語に継承されているものは年代順に掲出する⑤例文を多くし、読む辞典としての性格を強く出す、の5項目。B5判、上製箱入り。

日中交流の架け橋となるばかりでなく、研究図書、実用図書としても最高の内容。



幅広い研究活動

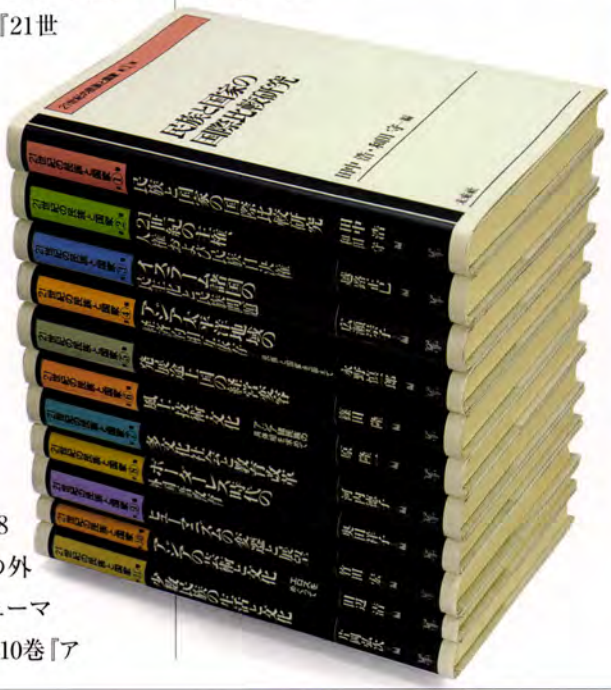
2 『21世紀の民族と国家』（全11巻）を刊行

創立70周年記念として進めた学術調査・研究事業。5年の月日をかけた研究成果に、国内外から高い評価。

平成5（1993）年から5年計画で進められた「創立七十周年記念学術調査・研究事業」の研究成果が、平成10（1998）年3月までに『21世紀の民族と国家』として刊行され、国内外から高い評価を得ました。

本シリーズは、第1巻『民族と国家の国際比較研究』、第2巻『21世紀の主権、人権および民族自決権』、第3巻『イスラーム諸国の民主化と民族問題』、第4巻『アジア太平洋地域の経済的相互依存』、第5巻『発展途上国の経営変容』、第6巻『風土・技術・文化－アジア諸民族の具体相を求めて』、第7巻『多文化社会と教育改革』、第8巻『ボーダーレス時代の外国語教育』、第9巻『ヒューマニズムの変遷と展望』、第10巻『アジアの芸術と文化—エロスをめぐって』、第11巻『少数民族の生活と文化』の全11巻です。学内外100人以上の研究者が欧米やアジアなど世界各国を取材。政治・経済・文化など多方面から研究・調査し、まとめあげた70周年記念論集です。

学内外100人以上の研究者が各国を取材、政治・経済など多くの分野から研究・調査。



幅広い研究活動 3

大東文化大学創立七十周年記念論集が完成

創立70周年記念事業の一環として、文学部・外国語学部・経済学部・法学部・国際関係学部の5学部より記念論集を出版。

5学部が総力を挙げた画期的試み。創立70周年記念事業にふさわしい充実の内容。

創立70周年記念事業の一環として企画されていた『大東文化大学創立七十周年記念論集』三巻(上・中・下)が、平成6(1994)年1月に完成しました。

A5判の上製本で、各600ページ。上巻は文学部と外国語学部、中巻は経済学部、下巻は法学部と国際関係学部となっています。巻頭の発刊の辞では、「5学部総力を挙げての『記念論集』は、本学にとって画期的試みであり、大東文化大学創立70周年を記念するにふさわしい充実した事業となった」と述べています。

幅広い研究活動 4

中村邦生文学部教授が文学界新人賞を受賞

1、444篇から選ばれた力作『冗談関係のメモリアル』審査員の作家ら「大きな変化を予感させる」と絶賛。

軽妙な会話を通じ現代の複層性を照射した作。「仕掛けと詐術も凝らしてあります」と中村教授。

文学部の中村邦生教授が平成5(1993)年12月、『冗談関係のメモリアル』で第77回文学界新人賞(文藝春秋社主催)を受賞しました。応募総数1,444篇から選ばれ、日常生活における軽妙な会話を通じて、現代の複層性を照射した力作です。審査員で作家の柴田翔氏は「今の時代の深層でひそかに進行する大きな変化を予感させる、主題の鮮明な現出という点で第一に推す」と絶賛しました。

中村教授は「表層的な笑話として楽しんで下さって一向に構いませんが、同時にいろいろな小説上の仕掛けと詐術もひそかに凝らしてありますから、その点にも気付いてくださればなおありがたい」と喜びを語りました。中村教授は、昭和53(1978)年、文学部教養課程専任講師に着任。現在文学部教授になりました。多数の研究論文や創作のほか、バーセルミの『罪深き愉しみ』などの翻訳があります。

第77回文学界新人賞を受賞した中村邦生先生(文学部)

幅広い研究活動 5

学部・研究所が主催して国際シンポジウムなどを開催

研究成果の発表や議論の場として、テーマを決めて数々のシンポジウムを開いています。

中国・韓国・台湾・沖縄の研究機関と協力し、東京での開催を機に始まったシンポジウム。

経済研究所では、中国・韓国・台湾・沖縄地域の研究機関と協力し、各国持ち回りの国際シンポジウムを共同開催

「朝鮮半島の雪解けなるか？」と題して開催された、第3回国際比較政治研究所国際シンポジウム

しています。これは平成5(1993)年1月に東京での開催がきっかけでした。本学経済研究所、上海国際問題研究所、ソウル大学経営研究所、台湾逢甲大学の4研究機関の研究者が出席して、「東アジアにおける国際経済協力」を共通テーマに討論し、共同シンポジウムから始まりました。

第1回国際シンポジウムには、ソウル大学から5人、上海国際問題研究所から5人、台湾から2人の学者が来日。在日の学者や日本の学者が加わって、活発な討論が展開されました。

初日は一般向けの経済シンポジウムで、中国、韓国、台湾、日本の4人の学者による特別講演で構成されました。さらに2日目は専門家たちによる学術シンポジウムとなり、東アジア4カ国の地域の学者による報告が行われ、それに基づく討論がありました。

大陸と台湾の学者が同席することは最近は珍しいことではありませんが、これを契機に、上海での開催時は台湾の学者も招待することが確認されました。また北朝鮮からも参加の意思表明があったことが紹介されました。東アジア地域は政治的に複雑な問題があって、名称の問題にも苦労しましたが、中国の学者から「東アジア四カ国・地域」と呼んだ方が望ましいという提案があり、今後そのように統一することで意見の一致をみました。一方で韓国の学者から東アジアの経済協力を推進するためには、この地域における政治的安定、緊張緩和、戦争回避が必須条件であり、この地域の問題を解決するためには北朝鮮の参加が必要であるので、次回から北朝鮮を参加させるために努めてほしいという提案がありました。

環境創造フォーラム大会シンポジウム

第2回シンポジウムは、平成5(1993)年、12月9・10日に上海で開催されました。本学から永野慎一郎経済研究所長を団長に高山洋一教授、近藤正臣教授、渡部茂教授、竹内亨夫教授の5人が参加。ソウル大学から5人、台湾から2人の学者が参加しました。さらに上海国際問題研究所を中心に中国の専門家約40人が参加し、「東アジア地域における経済協力に関する新構想」について討論が行われました。

開会式は、李儲文上海国際問題研究所名誉所長・上海市政府顧問の司会で始まり、徐匡迪上海副市長、永野慎一郎所長、李正浩ソウル大学経営

研究所長の祝辞がそれぞれ述べられました。

開会式の後のシンポジウムでは、陳佩堯上海国際問題研究所長が「中国の改革・開放とアジア太平洋地域の経済協力」と題して基調講演し、日本側からは永野所長が「東アジアにおける地域協力−日本の立場」について、また韓国側からは金正年ソウル大学教授が「東アジア経済協力の現況と提言」、台湾からは簡宣博逢甲大学教授が報告しました。この他にも中国の学者による報告があり、本学の参加者は全員司会やコメンテーターとして活躍しました。

平成6(1994)年、10月にソウルで開催された第3回に続いて、第4回シンポジウムは、平成8(1996)年の12月9・10日に、台湾逢甲大学で開かれました。

この年は中・台間の緊張が高まった悪い時期に重なったために中国からの参加はありませんでしたが、本学や沖縄国際大学など日本側から19人、韓国ソウル大学から5人の海外参加者に加え、台湾の学者40余人が参加。2日間にわたって8人の報告をもとに真摯な討論が展開されました。

本学からは中本博皓経済研究所長を団長に、8人が参加しました。近藤正臣教授が「日米構造協議(1989から90)の意味」と題して報告を行い、中本教授はセッションの司会者として、さらに渡部茂教授、岡田良徳教授らがディスカッションに参加。2日間のシンポジウムの後、主催者側の企画により新竹科学工業団地や故宮博物館を視察し、台湾の経済が急速に発展していることを実感し、中国の歴史の奥深さと優れた文化を感じました。

共同シンポジウムは以後も、東京、上海、ソウル、台湾と持ち回りで開催されました。相互理解と学問分野での交流を一層深めつつあります。一方で、シンポジウムを通じて、実際にたくさんの政策提言がなされており、その中で実行に移されたものも少なくありません。

平成5(1993)年、本学経済研究所、上海国際問題研究所、ソウル大学経営研究所、台湾逢甲大学の4研究機関から始まった同シンポジウムには、10年の時を経て、沖縄地域から沖縄経済学会が加わり、一方で台湾逢甲大学に代わり台湾綜合研究院が、また、ソウル大学に代わり韓国産業人力公団(CHD)が新たに加わっています。

平成15(2003)年10月には、第12回東アジア地域国際シンポジウムが東京の大東文化大学で開催されます。

各研究機関が相互に訪問することで、相互理解と学問分野での交流を深めるだけでなく、多くの政策提言が実行に移されています。

法学研究所の主催による「少年法改正を考える」と題した公開法律シンポジウム。

第20回経済シンポジウムで演壇に立つ猪瀬直樹氏

「ドル・リスク−世界経済不安定化の震源−」と題して開催された、第21回経済シンポジウム

幅広い研究活動 6

書家の上條信山氏が文化功労者に選ばれる

書教育の振興に尽くし、独自の書風確立に高い評価
本学OBとして初の栄誉に輝きました。

書家で本学OBの上條信山（周一）氏が、平成8（1996）年の文化功労者に選ばれました。長年にわたって書教育の振興に尽くす一方で、「信山流」といわれる新鮮かつ重厚な独自の書風を確立した功績が讃えられました。本学OBとして初の栄誉で、上條氏は「書の世界は奥深く、芸術として無限の美しさがある。今後も自分の考える美しさを表現できる作品を書くため、さらに精進していきたい」と喜びを語りました。

上條氏は長野県出身。大東文化大学の前身の大東文化学院本科9期・高等科16期を卒業。宮島詠士に師事し、正統な中国古典の書法を学び、昭和26（1951）年・同28（1953）年の日展で特選を獲得するなど数々の賞を受賞。日展理事として後進の指導に当たる。教育者としても活躍し、昭和24（1949）年から2度も文部省教育課程審議会委員を委嘱され、昭和31年から59（1956から84）年まで本学で非常勤講師、昭和41から46（1966から71）年まで東京教育大学（現・筑波大学）教授をつとめるなど、書教育に力を尽くしました。［平成9（1997）年2月12日、90歳で没］。

「信山流」という斬新な書風を確立した上條周一氏の重厚な書

「書の世界は奥深く、芸術として無限の美しさがある。さらに精進していきたい」と上條氏。

幅広い研究活動 7

『松方正義関係文書』（全18巻、別巻）を刊行

明治・大正期の政治経済研究を大きく前進させた労作。本学の一大事業としても高い評価を集めています。

松方家の協力で主要な関係書類を資料収集 研究班による22年の努力が実を結び完結。

明治の政治家松方正義

東洋研究所による『松方正義関係文書』（東洋研究所刊行、全18巻、別巻）が、平成10（1998）年10月に刊行されました。完結を祝う祝賀会が東京・千代田区のアルカディア市ヶ谷私学会館で開かれ、当主の松方峰雄夫妻も出席して盛大に開催されました。

『松方正義関係文書』の研究は、明治時代の財政史上に中心的な役割を果たした政治家の松方正義について、故・藤村通元教授（本科15期、同研究所兼任研究員）を長とする研究班が、昭和51（1976）年に開始。大久保達正兼担研究員・経済学部教授を中心とする研究班が事業を継続し、国立国会図書館などに分散していた主要な関係書類などを、松方家の全面的な協力を得て資料収集。昭和54（1979）年11月から第1巻の発行を開始し、22年の努力が実を結んで完結しました。明治・大正期の政治経済研究を大きく前進させ、本学の一大事業として高く評価されています。

幅広い研究活動 8

上方落語を繁栄に導いた立役者、桂米朝

平成14（2002）年度の文化功労者に本学で学んだ落語家の桂米朝氏。衰退しつつあった上方落語を再興・発展させた功績を讃えて。

たゆまぬ研究と確かな学識に裏打ちされた理知的で華やかな技芸を持つ「人間国宝」。

平成14（2002）年の文化功労者に、本学で学んだ落語家の桂米朝（本名・中川清）氏が選ばれました。

米朝氏は、本学の前身である大東文化学院本科第20期生。在学半ばで大阪に戻り、衰退しつつあった上方落語を、笑福亭松鶴や桂春団治らとともに再興し、現在の発展にまで導いた立て役者として知られます。

「仕事が趣味」と語る米朝氏は、研究熱心で漢詩や漢文を愛し、古典落語の発掘に取り組むなど話の数は130を超え、高座はCDやビデオとして保存されて全国のファンを楽しませています。たゆまぬ研究と確かな学識に裏打ちされた、理知的で華やかな技芸を持ち、平成8（1996）年には、関西の落語家として初めて重要無形文化財保持者「人間国宝」に認定されました。落語家としては柳家小さんに続いて2人目でした。昭和62（1987）年には紫綬褒章を受賞。著書に『桂米朝落語全集』（全7巻）など多数。

平成8（1996）年春、
重要無形文化財保有者（人間国宝）に認定
撮影・宮崎金次郎

大東文化大学創立80周年記念◎特別対談

人間国宝 桂米朝師匠、大いに語る

本学の前身である大東文化学院本科第20期生で、関西の落語家としては初めて「人間国宝」に認定された桂米朝師匠。米朝氏と同期で、本学元教授の濱久雄文学博士が、学生時代から今日に至るまでの足跡を克明にインタビューし、人間国宝・米朝氏の魅力と神髄に迫りました。

文=濱 久雄

日時◎平成14(2002)年8月21日
場所◎大阪ベイタワーホテル

対談参加者

人間国宝●桂 米朝
文学博士●濱 久雄

撮影・宮崎金次郎

初学徳に入るの門なり

米朝●江戸時代の落語に『郭大学』というのがある。これは『大学朱熹章句』のパロディです。ご存知のように、「御亭主の曰く、大廓は格子の内にして、初客床に入るの門なり」、寝床に入るということですな。

濱●「子程子いわく、大学は孔氏の遺書にして、初学徳に入るの門なり」ですね。初めて学問やる人が徳に入る門だっていうのを。

米朝●それが原典ですわね。「初学徳に入るの門なり」と言うのを「初客床に入るの門なり」と言う。それからあとは、「今において古人学をなすの次第を見るべき者は独りこの篇の存するに頼る」なんて、そこのところのパクリはないんですよ。どうもところどころ。一番おしまいはどうだったかな、あれ。これは高座でしゃべる場合はまたしゃべり方は違うたんやろうけども、短いものにまとめたものがある。刊行されているんです、これ。

この間のあれ、濱君の文章(「大東文化学院の想い出」、大東文化大学新聞参照)を読ましてもらって、いろいろ思い出しましたが、加藤梅四郎先生。あの人に『孝経』を教わったんや。

濱●あれ『孝経』だった。『御注孝経』でしたね。

米朝●それから鈴木由次郎さんの『十八史略』ね。『文章軌範』は詳しくやった。猪口先生だった。

濱●1年生の時でしたね。記憶に残るのは笠井南

米朝 確かに、旧制中学の漢文の教科書というのは、ずいぶん程度高いし、豊富やったからね。

学生時代に学んだ漢学が、後の米朝師匠の落語家人生に多大な影響を与えた。

村先生の『唐詩選』でしょう。

米朝●それはそうですよ。

濱●何といってもね。

米朝●あれは一番もう、強烈な記憶。

濱●この前大東へ来られて特別講義をされたとき、色紙に李白の客中行の「ただ主人をして、よく客を酔わしめば、知らずいずれの処かこれ他郷」と書いてもらったけれど、これはみんな暗記させられたんだ。

米朝●そうやな。玉碗盛り来る琥珀の光、ただ主人をしてよく客を酔わしめば。知らずいずれの処かこれ他郷。

濱●そう、蘭陵の美酒、鬱金香が起句ですね。

米朝●もう10年ちょい前になるけどね、小松左京が中国へ行って、私は行かなんだけども、渭水のほとりへ来て、これが渭水か。あれが渭城ですと。それで、とたんに彼、「渭城の朝雨軽塵を浥す、客舎青青柳色新たなり」と感動したが、だあれもわからへん、同行している連中はね。

米朝さんと濱さんのツーショット。米朝「濱さんと一緒に学んだあの時分の大東と、マンモス大学になった大東とは随分違いますからね」。
濱「我々のときは、まだ松下村塾だと言っていたんですもんね」。

濱●小松左京という人は、そういう人なんですか。

米朝●彼は昭和6年生まれやけど、早生れなので、昭和5年の連中と一緒なんです。ギリギリやな、旧制。旧制高校、大阪高校から京大へ行ったのよ。

濱●じゃあ、もう漢文は強いですよ。旧制高校行った人はね。

米朝●ですから、彼の旧制中学、そのときの漢文の知識なのね。確かに、旧制中学のあの漢文の教科書というものは。

濱●程度高いですよ。

米朝●もう随分程度高いし、豊富やったからね。週2時間ぐらいあったんやないかな。「西のかた陽関を出づれば、故人無からん」って、だれもわからへん。それで、通訳の中国人に聞いたら、これも知らない。

濱●そうでしょうね。もう、中国人は古典だめですよ。

米朝●それで、うちに電話をかけてきた。「米朝さん聞いてくれ、だあれも応じてくれへんのや。おれ一人感激しているのにな」。その電話でさんざんぼやいてね(笑)。そんなことがあってね。

濱●これはおもしろい話ですね。

米朝●そしたらね。「なからんなからん故人なからん、西のかた陽関を出づれば故人なからん」やなんか言い出してね。もう……。

濱●今、陽関三畳ってこと知らないでしょう。

米朝●知らないでしょう。その時の電話がコレクトコールで、私がもってしまった。(笑)

濱●だから、そういう点でも米朝さんの漢学は、やっぱり大東に入った何かその自負みたいなものが、尾を引いているでしょう。

米朝●調子がいいからあれ、覚えられるんですかね。

濱●それでは古典落語と漢文との関係はどうなんですか。

米朝●それはあんまりないけれども、さきの『郭大学』のシャレがわかったんだから、案外漢文を知ってたんでしょうね。とにかく調子のいいものは覚えられるということです。暗記というか、私らは覚えなきゃいかんからね。リズミカルな、ですから平家物語の文章なんか覚えやすくできてますよね。

Special Talk

大東文化大学創立80周年記念◎特別対談

人間国宝 桂米朝師匠、大いに語る

桂米朝（かつら・べいちょう）●大正14（1925）年生まれ、大東文化学院中退（兵役に就き復学せず）
昭和22（1947）年7月、四代目桂米団治に入門。大阪北新地で初舞台。
昭和45（1970）年、芸術祭優秀賞受賞、2年連続の栄誉。昭和49（1974）年、株式会社米朝事務所設立。
昭和50（1975）年、第13回ゴールデンアロー賞芸能賞受賞。
昭和55（1980）年3月、昭和54（1979）年度芸術選奨文部大臣賞受賞。11月、米朝落語全集（全7巻）刊行開始。
昭和62（1987）年4月、紫綬褒章受賞。平成8（1996）年5月、重要無形文化財保持者［人間国宝］認定。
平成14（2002）年10月、文化功労者に認定。

神主の家系に生まれながら、どうしても東京へ行きたいとの思いから大東文化学院に入学した。

落語家への道

濱●ところで今回の、米朝さんとの対談は、大正12（1923）年に創立された現在の大東文化大学の前身である大東文化学院に学んだ、人間国宝の桂米朝師匠に、学院時代の思い出や、落語との出会いなど存分に話して頂こうという趣旨なのです。それは私たちの先輩に「人間国宝の桂米朝さんがおられる」という事実を知って貰うことは非常に意義のあることと、広く大東生に大きな励みとなり、誇りと自信にもなると思っているからです。

米朝●うわあ、それはえらいことになった。濱さんと一緒に学んだあの時分の大東と、マンモス大学になった大東とは随分違いますからね。

濱●我々のときは、まだ松下村塾だと言っていたですもんね。

米朝●そうそう、本当にそういう感じですよね。昔の漢学塾というような。独特の雰囲気があってね。またおもしろ味もあったんですがね。

濱●たまに米朝さんは遅刻して来たでしょう。そうすると、教壇の前をこうやって、にこにこ笑いながら、こうやって（右手を少し前に出して、失礼しますといったような格好で）通って、必ず窓際の一番前の席に座っていましたね。

米朝●いつもそこに座っていたのですか。

濱●そう、いつも、そこに座るんですよ。

米朝●へええ。

濱●それで、噂によって、中川君（桂米朝師匠の本名は「中川清」）は正岡容（まさおかいるる）のところに出入りしているようだ。落語やってるらしいぞ。このうわさがパーッと流れたんですよ。僕はあのときから正岡容という人の名前を知ったのです。容というから、落語家にあらず、僕はどういう人かと思っていたのです。『天保水滸伝』の原作者でしょう。

米朝●そうそう、『灰神楽三太郎』の作者でもある。あの人、吉井勇さんの弟子みたいになってね。

濱●それで、しかもそれが大塚の三業通りのところにいたっていうんでしょう。

米朝●まあ、変なところにばっかりいたんですよ、あの人は。

濱●この米朝さんが書かれた『私の履歴書』を見ると、いろんな新事実が出て来ますね。いや、僕は米朝さんが神主さんの出だっていうのを知らなかった。国学院大学に行くところを大東に来たって、これはまたおもしろいですね。

米朝●親類なんかだましてね（笑）。

濱●これは、台靖君も鈴木良雄君も知らないでしょう。

米朝●知らんかもわからんなあ。

濱●この『私の履歴書』を見ればわかるんですよ。

米朝●そんなこと今まで言わんもんね、人に。神宮皇學館へ入れと言われたけど、おれはどうしても東京へ行きたかったんでね。

濱●それがやっぱり成功のもとだったですね。

米朝●また、これは大東とは余り関係ないかもわからんけども、あの時分は芸人にはなれない時代やったんですよ。若い噺家なんか一人もおらん。みんな兵隊にとられるか、軍需工場へ徴用でとられる。ですから、どっか具合よくないやつだけが残ってた。どっかが悪い。もう痴楽さんなんてのは、目は片一方見えへんしね、脚は不自由やしね。

濱●痴楽さんというのは、奥多摩の出身なんですよ。

米朝●もう亡くなったけどね。あの人なんかも、やっぱり身障者であったから残ってたし、戦後ワーッと売り出した三遊亭歌笑なんていうのも、あの人ももう目はほとんど片一方が0.2ぐらいでね。片一方も0.1か何かそんなん。とてもとってもらえないというような状態やったからね。でも、おったんです。そのころは役者でも何でも健康な者は皆とられてね。映画俳優や

濱 中川君は、正岡容のところに出入りしているようだ。
落語やっているらしいぞ。このうわさがパーッと流れたんですよ。

『桂 米朝 私の履歴書』日本経済新聞社
著者・桂 米朝
初版・平成14（2002）年4月25日

役者なんかね、とられて向こうで慰問団をこしらえさせられてね（笑）。軍隊へ来て芝居やってたような連中もおりますよ。

漢詩好きの文学青年だった学生時代

濱●さて米朝さんが、学生時代に一番印象に残った授業はなんですか。

米朝●やっぱり笠井南村でしょう。妙なことを覚えているもんでね、あの時分酒が配給になって、もちろん配給は前から配給なんやけども、どんどん量が少なくなって、飲む配給が1日に杯に3杯しか飲めない。杯に3杯で酔う方法というのを、とくとくとそれを学生の前でしゃべるの。

濱●そうですね。甲陽の一酒徒ということをね。本来は高陽の酒徒で、酈食其（れきいき）が漢の高祖に見（まみ）えたとき、「吾は高陽の酒徒にして、儒人にあらず」といった故事で、酒飲みのことをいいますが、甲州（山梨）出身の先生は高陽を甲陽にかけて云ったんですね。

米朝●戦後お酒が自由に飲めるようになって、随分飲んだらしいな。

濱●だから、私が「大東文化学院の想い出」に書いたように、鈴木君（旧姓高橋君）と一緒に青砥（あおと）の校舎に行ったときには、通夜の飲ですよ。夜通し飲んで、酔眼もうろうとして我々を迎え、もう李白を気取っていたんでしょう。

米朝●そうねえ、だれも呼びに来ないけど。（編集委員会注：『飲中八仙歌』に、「天子呼び来れども船に上（のぼ）らず、自ら称す臣は是れ酒中の仙」とある。）

濱●「唐詩選」の授業のときに、李白は転んでも杯をいつでも水平に保ったということをよく言っていたでしょう。

米朝●あれはね、昔の中国の酒屋なんかにもあったんだけど、絵があるんですよね。舟に、嫌やと言うているのを無理やり乗せようとするときに、つかんでいる徳利は水平に保ってて、こぼれないようにしているという（笑）。

濱●あれ、だれが描いた絵なんですかね。

米朝●さあ、中国からあるんやろうね。画材としてはおもしろいやろけどなあ。「飲中八仙歌」なんていう、杜甫の。

濱●だから、あれを読むだけ読んで解釈しないわけ（笑）。『長安古意』という長い七言の古詩でも。

米朝●長安の都の。

濱●そうなんですよ。「古意」、昔を懐かしむ心を詠じた詩です。そして、どうもこれは教育的でないなあと言って、ニコリとされていたんです。ところで、今でも、色紙には漢文で書きますか。

米朝●いやいや、もう書けませんがな。

濱●いつぞや、「唯だ主人をして能く客を酔わしめば、知らず何れの処かこれ他郷」と漢文で、スラスラッと書いたとき、小川秀男君が、「唯」は「但」だと指摘しましたね。

米朝●これが違う。ああ。そうだ、そうや。

濱●だから、僕はみんな優秀だと思った。あのときに、みんな暗記させられたから覚えている（笑）。

米朝●「中原また鹿を逐（お）う。筆を投じて戎軒を事とす」（『唐詩選』）あれが最初やったかな。

桂米朝師匠は、昭和18（1943）年4月に大東文化学院（現大東文化大学）に入学。
大東文化学院時代に、祖母（前列右）、母（前列左）、弟（後列左）とともに。
『桂米朝　私の履歴書』日本経済新聞社より

Special Talk

大東文化大学創立80周年記念◎特別対談

人間国宝 桂米朝師匠、大いに語る

濱久雄（はま・ひさお）●大正14（1925）年生まれ。中央大学法学部卒。大東文化学院本科卒業。元大東文化大学教授。文学博士。中国思想史専攻。
主な著書に、『蘭学事始（現代語訳）』『西太后』教育社、『王陽明の詩（訳注）』『山田方谷の文』明徳出版社、『公羊学の成立とその展開』国書刊行会などがある。

戦争で食うものにも事欠く暗い時代にもかかわらず、講釈場通いの日々を送る。

濱●あれが一番最初、五言古詩のね。

米朝●巻頭ですね。

濱●よく覚えてる。物すごい。

米朝●詩は好きでね。もう本当に、『唐詩選』なんかは好きでしたよ。

濱●『唐詩選』の七言絶句は「九月九日望郷台。他席他郷客を送るの杯。人情すでに厭ふ南中の苦、鴻雁なんぞ北地より来る」あれから始まるんですよ。

米朝●ああ、それは。

濱●今は九月九日（くがつここのか）と読む先生が多いけどね、昔の先生は九月九日（くげつくじつ）と読んだんですよね。

米朝●わざとそういうふうに。『和漢朗詠集』か、ああいうのは独特の読み方があった。仮名がついたやつ、片仮名でね。

濱●その『和漢朗詠集』的な漢文の読み方は、江戸時代の漢詩の読み方とは違うんですよね。やわらかい感じの。またひとつの味がありますよね。

米朝●そうですよね。非常に送り仮名なんか複雑でね。

濱●時々漢文の本なんか読んでいますか。

米朝●いや、もう詩ぐらいですね。

濱●詩はだれのを読んでいますか。

米朝●笠井先生の『漢詩の味』か何かいう本がある。あれは書道の本に連載したものを集めたものらしい。あれは分かりやすくて、いろいろ脱線の仕方もおもしろいしね。まあ、大体唐詩から始まって、晋の「菊を採る東籬の下」。

濱●陶淵明のね。

米朝●陶淵明の詩がかなりの量載っているわ。李白と陶淵明と、白楽天もちょっと出ているけど、王安石とかね。王安石なんて人は、あんな詩人やとは思わんかった。

濱●「王荊公詩集」という立派なのがありますよ。もうとにかく優秀なんですよね。

米朝●また、詩文ができなんだら、政治家にもなれなんだ。

濱●科挙の試験に受からない。

米朝●そうや。

濱●みんな優秀ですよ、中国人は。書もうまいしね、みんな。

米朝●うまいなあ、もう。無造作に書いてあるのでも。日本人も本当に樋口一葉の日記というのはね、影印本で出たらしいけど、新聞で見たけど、見事な字ですよねえ、あんな若くして。今度5,000円札か何かに載るんで、今取り上げられている。

濱●そうそう、樋口一葉ね。

米朝●ちょっと読めんけど、うまいなあと思って。日記なんやからね、人に見せようと思って書いたもんやないんやから。あんな若いのに、先輩の小説家をかなり手厳しくその日記の中では批評しているらしいんでね、長いこと活字にならなんだ。その影響が、それを斎藤緑雨とか幸田露伴なんか、自分がかなりきつく書かれているのに、いやこれは出版すべきであるとか言うて、一遍出たことがあるらしい。今度はその筆跡はそのままで出るというような。ところで、このごろ私は本が読めなくなってね。

濱●私も、最近はね。

米朝●近年本当に読めませんな。書くことどころか、読む方もだめですわ。

濱●しかし文章は、特に枝雀さんについて書かれたあの文章は僕は名文だと思う。簡にして要を得て、やっぱりピシャッと決めている。いや、枝雀さんは大東の文学部特別講義に来られて、たっぷり90分間話をして頂いたのですが、自殺するような雰囲気なんか全然なかった。才気煥発でね。

米朝●ワァワァワァワァ言わさんと気が済まん男やからね。

濱●僕も一緒に写真撮ったのを整理しなくて、探し

米朝 とにかく私は、いろんな勉強ができましたよ。学校の勉強もせずにね。もちろん寄席へも芝居にも行く。

『公羊学の成立とその展開』国書刊行会
著者・濱 久雄
初版・平成4（1992）年6月

てきたんだけど、なくてね。今度あったら伸ばして送りますよ。

米朝●それは珍しい写真ですね。

濱●研究室で何人かで写真撮っているんですよ。特別講義で、大東には2回来てますからね。

米朝●私も二度行ったな。

濱●そうですね。文学部の特別講義でね。だから枝雀さんも喜んで、大学生を前に、もう張り切っちゃってね、英語の落語もやったしね。よかったですよ、あれは。

昭和17（1942）年ごろの目白駅付近の風景

米朝●もう、本当に燃焼し尽くしたんでしょうね。

濱●やっぱりそうでしょうね。

米朝●もう大欝になってしもうてね。ちょっと何か言うたら、ポロポロと涙をこぼし出すしね。

濱●それは亡くなるどのくらい前なんですか。

米朝●一遍ちょっとよくなって、また再発して。もうあれで、うちの事務所はもう大変に困ったわけなんです。もう仕事を受けていたのをキャンセルする。必死になってこっちも損もし、かなり損をしキャンセルした。調子がようなる。「迷惑かけました。もう大丈夫です。仕事とってくれ」なんか言う。とったら、また当日前になると、とても出られへん。

濱●それは気の毒だったですね。

米朝●そんな状態で、1年半ぐらい前からそういう躁、欝が繰り返しに。躁状態にまたなって、また欝になったり。ジキルとハイドやないけど、だんだん欝の方が時間が長くなってね、躁の時間がだんだん短かくなって、しまいにはもう完全に欝になってしまった。

食べる物もないのに講釈場通い

米朝●今振り返って見ると本当に、僕らの学生時代である池袋の時代というものは、何しろ食べるものはないし、酒なんかはないし、本も簡単に買えない時代やったからなあ。

濱●太平洋戦争の真っ只中で、米はもちろんイモでさえ、貴重品の時代でしたからね。米朝さんは、目白のどこら辺に下宿してたんですか。

米朝●学習院大学と女子大学との間ぐらいの路地をずっと入ったところなんですよ。

濱●僕はあそこの目白小学校を出てるんですよ。昔の高田第五小学校。

米朝●学生時代はまあ、僕にとってはおもしろかったです。

とにかく私は、いろんな勉強ができましたよ。学校の勉強はせずにね。もちろん寄席へも行く、芝居にも行く。講釈場なんてところは、若い者一人も行ってなかった。ですから、あの時分の戦中の講釈場の味なんか知っているのは、もうおらんね。

濱●講釈場というと、特別のものがあったんですか。

米朝●講談だけの寄席なんです。

濱●それを講釈場と言うんですか。

米朝●これは江戸時代からあるんです。明治時代は東京だけで30軒ぐらいあったんやないかな。もうあの時代、2軒だけ残っていましたよ。八丁堀に「聞楽」というのと、深川の高橋というところに永花亭というところと2軒だけありました。それやとか、そんなところを見に行って、いろんな人の話を聞いたり、それからお神楽というのが、テケテッツクテテツクテレツクという、あのお多福の面とひょっとこの、ああいう神社でやってまっしゃろ。

濱●やってたんですよ。

米朝●あれ、関西にないのですよ。

濱●関西にないんですか。

米朝●ないんですよ、あれは。田舎へ行くと里神楽と、これはまた大分雰囲気の違うものがあるけれども、町中ではない。

濱●ひょっとこみたいなのは出てこないのですか、関西では。

米朝●関西では、とにかく京都や大阪には、あの種

関西にはない文化に触れ、いやがうえにも芸心を刺激された東京での日々。

のものはないんです。あれは、やっぱり翁というお能の方の、あれに、三番叟も出てくるけれども、あれのパロディというか、あれをちょっとおもしろく変えたようなものが始まりらしい。

濱●それがどうして神社と能楽が結びつくのですかね。

米朝●神社と翁の能楽は結びつくのですよ。お能の翁のそれこそ崩したものというようなもの、芝居でも一応あるけどね。お神楽のそういう起源について書いた本があるはずやねんけどな。技術的なことは松本源ノ助社中という人が伝えてて、それを伝えている人は今でもある。

米朝師匠が通ったころの
大東文化学院の校門

濱●例の「古事記」にある天の岩戸の天の宇受売の命踊る。

米朝●「裳の緒を番登に忍し垂りき」という。『古事記』でもみんな書いてあるからね。

濱●それで、岩戸をあけたらば、みんなの顔が白いからおもしろいということになったとか。

米朝●ですから、あれは鳥居の始まりやね。鶏をこの台の上に乗せて並べた。鏡を用意して榊に、それでワーッと天の宇受売の命が踊ってみんなでヤンヤと騒ぐさかい、私が岩戸へこもっているのはみんなシュンとなっているはずやのに、何でこんなに騒いでいるのかしら。すばらしい神様がお越しになったので喜んでいるのですわ。どんなやつかとあけて覗いて見ると、鏡を出した。自分の顔が映っているんですわな、天照大神の顔が。何がすばらしいんだとか言うたか何か知らんけど、ともかくもうちょっと見ようとあけると、手力男命がウワッと引きあけると一遍にパーッと明るくなって、鶏が一斉に鳴いて、鶏がこういう台の上に立っていたので、鳥居というのの発祥なんだ、これが。

濱●あ、それなんですか。

米朝●まあ、俗に読み解いたらそんなことですよ。

濱●『古事記』は大東でやらなかったですね。

米朝●やりませんな。

濱●『万葉集』もやらなかったんですよ。

米朝●あ、『万葉集』もやらなんだか。いや、高等科入ったらやったん違う。

濱●我々の前に金子元臣先生が『万葉集』をやって、僕はあの先生の本をみんな持ってたんですが、我々の入ったときに、病気か何かで亡くなってんですよ。それでやらないんですね。鳥野幸次先生には『古今集』を習いましたね。

米朝●鳥野という先生はうまい講義でした。大宮人という感じがする。あのヒゲといい、淡々と進めて。

濱●淡々とね。

米朝●何か味のある人やったなあ、あの講義も。お歌所の寄人。大した先生がそろってたんでしょう。

濱●それはもう超一流ですよ。

米朝●あんたが「大東文化学院の想い出」に書いているようにね。

濱●本当ですよ。

米朝●あれにも書いてあったけど、吉田精致さんの倫理学。あの本買うて来たら一字一句違わんのにはもうびっくりした、あれは本当に。

濱●『倫理学原論』ね。もう言うことと先生の本と、一字一句違わない。

濱●あの頃、大東では食堂があったでしょう。

米朝●なさけない食堂がね。

濱●飯と味噌汁で。

米朝●そうそうそう、それしかないの。

濱●それがまた、雰囲気がよかったですね。

米朝●私は、あそこ、あの時分食べるのは大変やったから、安いしよく利用はしましたけどね。私は、あんたは家から通ってたから知らんやろうけど、下宿している連中は外食券というものを持って、それを持って行かないと食堂へ行ったって、御飯は米の飯は出してくれない。もうそのうちに出してもだめになってきたけどな。

濱●我々も勤労動員で浦賀ドッグに行ったって、もう

濱 それは大阪じゃなくて、東京で体験した
というところに意味があったんですね。

『笑』作品社
著者・桂 米朝
初版・昭和59(1984)年1月

雑炊ですもんね。ひどかったですよ、戦争中は。

米朝●あれはもう、それだけの配給はちゃんとあっても、みんなには雑炊しか食わさないんだ。

落語家桂米朝を育てた東京時代

米朝●私は東京の寄席のことでも、東西の噺家ひっくるめて、私より1つ、2つ上の人がまだ2、3東京にいますけど、もういなくなってしまいました。ことに講釈場のことなんか知っている人は、今の伯竜と芦川という古い講釈師が2人だけ。

濱●講釈場ですか。

米朝●そう、講釈場。これは明治時代にできた狂詩の本なんかにも講釈場が出てきます。洋弓場へとかそんなのと一緒に狂詩の本に、七言絶句か律かで狂詩の本があの時分随分出ています。復刻されたりしてちょいちょい欲しいのが出てますわ。やっぱり大変喜こばれたと書いてあるな。そんなんで、あの時代結局東京には1年半ぐらいしかおらなんだけれども、私はいろんなところを見て回ったりしたおかげで、あの学生時代に貴重な体験をするということは生涯残ります。10代後半のね。(編集委員会注:狂詩は狂歌に対して云う。内容は滑稽なもの)

濱●それは大阪じゃなくて東京で体験したというところに意味があったんですね。

米朝●そうなんですな。

濱●大阪にはなかったんですか。

米朝●講釈場はもうなかった。小芝居は、全然ないことはない。京都に一軒、兵庫の方に一軒。大阪には小芝居はもうなかったな。東京にはまだ、本所の緑町に寿座という小芝居があって、そこへよく行った。

濱●それは、米朝さんの自伝の『私の履歴書』には出てないですね。今の話した物語は。

米朝●それも本にするについて大分書き足したんですがね。

濱●今の話は非常に貴重ですよ。

米朝●お芝居の方は、演劇の研究家はたくさんいるから、これはもうそんなに詳しく言及している人がたくさんおりますけど、寄席の方は余りそれがないんでね。正岡さんのものなんかも大変な記録としても貴重なんですよ、今。

米朝●我々の同級生で、もう亡くなってしまった中嶋岩雄君を偲ぶ会をやったとき、私仕事受けてたんで行けなかったんや。

濱●やはり仕事があると来られないですよね。スケジュールが組まれていると。

米朝●家族が死んでもそれだけやってから飛んで帰ってくるというような、私かわりがないんですよ。まだ少し前なら枝雀が私のかわりに行けば、それで代理で務まった。

濱●枝雀さんを後継者に目していたんですか。

米朝●今は私が何かで行けなくなったから代わりといったら、古い春団次とか文枝とかいう私よりちょっと歳下やけどな、そこいら。それは病気で倒れたと

知的でユーモアに満ちた米朝師匠の洒脱な語りに、
魅了された観客は我を忘れて聞き入ります
撮影・宮崎金次郎

か入院したとかいうんなら、それはそれでうちの弟子でも納得するやろうけど、そのほかのことでは、納得してもらえないでしょうね。いわゆる興行として、やはり興行者は客が集まってくれないと困るからね。

落語は文学か否か?

濱●それはそうですよね。ところで、例の「落語の記録」も30集出されて、「落語全集」も出されたというでしょう。しかもそれが埋もれていた東西の古典落語を数多く発掘したんですからね。これは文学的に言っても大きな功績ですよ。

そこで、「落語は文学かどうか」について米朝さんのご意見を聞きたいのですが。つまり落語はいわば文学作品に匹敵する中身でもあるわけでしょう。

話芸である落語は、しゃべり手によって文学作品にもなれば、ただの演芸で終わることもある。

米朝●そうなんです。前にも今は文庫本になっている『落語と私』という本に書いてるんやけど、「すばらしい内容があっても、それを下手な落語家がしゃべると文学作品でも何でもなくなってしまう。」ということがあるのです。

濱●しゃべり手によって、変わってしまう。

米朝●そうそう。話芸であるから、しゃべり手によって80点のものが40点になってしまう。そこがちょっと問題やということをね。ですから活字にして読む場合には、いい内容のものは立派な作品ですよ。

濱●つまり活字化された落語の中身、内容というのは、文学作品に値するわけでしょう。

米朝●活字に書かれたものは、これは文学作品と言っていいものは幾つもあります。

濱●あるでしょうね。特にいろんなパロディあたりのものなんか、これまとめたらおもしろいと思うのですがね。

米朝●たくさんあることはあるんやけどね。パロディというのは、もとを知らなんだら成り立たないわけ。

濱●そのもとを、特に漢文と関連するパロディあたりで、そのもとの漢文と落語の作品との比較をつくったら、これはおもしろいですね。

米朝●寺子屋の教育がかなりのものであったと思うのは、壁に穴あけて泥棒が手を出して、そいつを家の者が見つけてつかまえて、けしからんやっちゃと、ここに縄でくくって、ここへ釘づけしろとか何とか言うてると、儒者が、そんな乱暴なことをしてはいかん。よほど困ったからやろうと言うて、何ぼかわずかな金をその手に握らせてやる。その手をあけてみて、「少なきかな仁」と言うた(笑)。

濱●いや、それは、程度高いですよ、これ。「巧言令色少なし仁」、あれから来ているわけ。これはおもしろい。そういうものでまとめたらどうです。

米朝●いや、まとめるったって、思いついて今ふっとひとつ思いついたけど、まだもっとあるでしょう。あるけれども、探したりまとめたり書いたりするのも大変でできないんでね。その程度の寺子屋の教育でも、そういうものは大衆のお笑いの落語の中には出てくるということね。

濱●でも、今それ言ったって、笑うその原典が、知っている人は共感を覚えて笑うけれども、わからない人は笑えない。

米朝●「巧言令色少なし仁」というのは、あれは『論語』の一節ですよね。

濱●ところで落語には定本というのはあるのですか。

米朝●定本があるようでないんですよね。

濱●米朝さんはそれをつくったということになるんでしょうね、定本を。それが「落語全集」ですね。

米朝●今の時点における私の解釈による定本です。

濱●これがいわゆる古典落語定本。

米朝●それは先々ずっと定本とはいかんけども、一応ほかにないからね。

濱●これを正岡容という第一師匠がこういうものをつくろうと工作したんですか。

米朝●あの人はむしろ、落語なんて定本なんかない

米朝 すばらしい内容があっても、それを下手な落語家がしゃべると文学作品でも何でもなくなってしまう。

『米朝・上岡が語る昭和上方漫才』朝日新聞社
著者・桂 米朝／上岡 龍太郎
初版・平成12（2000）年7月

ものだというのが持論やったような気がするな。定本の内容のすばらしさは十分認めているんやけどね。あの人の場合はこの演者がやったときにすばらしかったということがあるでしょうね。

濱●正岡容という人について、米朝さんは「破滅型の奇人」だと書いてあるけど、「破滅型の奇人」という表現はおもしろいと思いますね。

米朝●そうでも言わなしょうがないからね。

濱●もう1人の人が正岡容のことを書いているこの文章ね。これもまたおもしろい。

米朝●最近小沢昭一がエッセイを集めたようなものを出して、その中に正岡容のことが書いてあって、昔私が正岡容について書いた文章も引用してありましたが、彼も正岡容のいわば弟子やからね。変なのが門下にいるんですよ。

濱●何か破門された人も結構多いと。

米朝●すぐまた仲直りするんやけどね。絶交状を送った次の日に、おれが考え違いしてたって謝りにやってくるというようなね。

濱●人のいい人なんですね。

米朝●まあまあ、根は善人でしたよ。まことに変わった人でね。

濱●ところで落語研究家と言わないで、寄席研究家で作家と書いてあるんですよね。

米朝●落語だけじゃないんですよね。

濱●寄席研究家というと、落語以外の話芸も入ることとなる。

米朝●もう浪花節も入ってりゃ、漫才も入ってりゃ、手品も曲芸も入ってりゃ、百面相のようなものでも、もうそういうふうなちょっと広い範囲になる。

濱●そういう意味で寄席と言ったんですね。そうですか。

米朝●本当に不思議な人やった。けどもそのときに、小沢昭一が引用している私の文章のおしまいのところに、「けれども非常に低く見られていた落語とか寄席とかいう世界を、学生層とかインテリ層に認めさせたという功績においては、もう多大なものがある」。最初であったかもしれん。それまで落語を認めていた人は、皆いわゆる通人型の江戸趣味の人とか、そういう人は大変高く買うてたけども、それを昭和の10年代ぐらいから学生が興味を持つようになったのは、これは正岡容の力やと思います。

濱●そうでしょうね。やはりいい師にめぐり合わせると、その弟子はやはり伸びますね。もちろん才能がなければ、その弟子は伸びないけれども。

米朝●そうですな。私も師匠の米団治という人が、生涯売れなかった人ですけどね。陰気な噺家でね、いわゆる稽古場名人みたいな意味においては。ですから先代の春団治師匠なんかでも自分の息子をうちの師匠のところに稽古にやったりという、そんなことをする。うまいとは皆認めているけれども、ちっとも売れなんだ、あの人は。

濱●何かずぼら、紋付着てそのまま寝転んじゃって。

当時の大学生や専門学校生は、皆詰襟の学生服に学生帽の出で立ちだった

米朝●そうそう、そんなことは日常茶飯事。だから、もう高座着がいつもしわくちゃになってしまう。酒がめちゃくちゃ好きでね。金が欲しかったには違いないけど、太鼓持ち的によいしょするというようなところはまるっきりなかったですね。自分をわかってくれるお客とは大変低姿勢で親しく話をするんやけど、こいつはちょっともわかってないなと思うたら、もうね、途端に冷淡。

人間国宝米朝たる所以

古典落語を発掘し今日へと伝え残し、さらに後進を育ててきたことが、桂米朝師匠の最大の功績であろう。

(写真上)戦場へと次々と送られていった壮行会学友。昭和19(1944)年
(写真下)平野教授による詩経の講義の様子。昭和12(1937)年

濱●ところで、現在落語家の中から、これから人間国宝に指名される人というのは、僕はほとんどもういなくなってしまうのではないかと思うのですが。

米朝●志ん朝が死んだんでね。彼は次の候補やったんやけどな。

濱●今候補って、いるんですか。小さんっていう人は亡くなったでしょう。

米朝●そのちょっと前に志ん朝が先へ死んだ。これは志ん生さんの息子で、志ん朝がおるから東京はまあ大丈夫やというふうに。一時代前の圓生さんは、その時分は人間国宝とかそういうものの対象に落語がなってなかったですからね。なってたら、一番になった人でしょう。

濱●米朝さんの場合、人間国宝になった理由の中に、古典落語を発掘して将来に伝える功績というのが高く評価されているでしょう。

米朝●それから後進を育てたということが。

濱●この『私の履歴書』にも書いてある。落語家は食えないよと言われたって。確かに大変ですよね、これは。

米朝●文楽の連中に聞くと、しかし考えてみれば松竹の時代の方がよかったとも言えると。本当に食えない。今は最低生活保障してくれる、国が。これは良し悪しだと言うんです。

濱●それで芸が落ちてしまう。

米朝●もう努力しなくなる。

濱●司馬遼太郎さんが米朝さんのファンだったという有名な話がありますね。

米朝●一番最初に会うたのは、何か物書きやら作家やらそんな連中が集まっている席で私も一緒に連なってたんやけど、「実は米朝さん、あんたのレコード全部、おれ持ってるんのや。それを毎晩聞いているんです。あれぐらい寝やすいものはない」と言って(笑)。子守唄。あれぐらい気持ちよう寝られるものはない。その時分はLP、もうカセットになってたやつで、それを聞きながら床につき、眠ってしまってもテープの方はカチャッといって勝手にとまってしまう。

濱●それは大阪弁のリズムかしら、子守唄っていうのは。

米朝●それもあるんですけどね。とにかく、実は私は隠れたるファンなんですよと言われて、ただ一遍も生を聞いてない。一遍聞いてくださいと言って招待して、サンケイホールかなんかへやって来た。その後の打ち上げのちょっと軽いパーティやったんですけれども、

濱 将来、貴重な資料が沢山ある米朝さんの蔵書は、日本で唯一の落語図書館にでもなると良いでしょうね。

『上方落語ノート』青蛙房
著者・桂 米朝
初版・昭和53（1978）年12月

先生ちょっと一言と言うたら、「実は私20年来米朝さんを聞いているんやけども、生で聞いたのはきょうが初めてや。この人には何とも言えん色気がある」ということをしきりに言うてくれた。書いてもくれています。私のことを、著書にかなりページ数を費やして書いてくれてます。

濱●いや、僕は米朝さんは初代だと思ったら、三代だというでしょう。

米朝●今までの二代は、みんな大きい存在になったら名前をかえていって。

濱●でも、この『桂米朝　私の履歴書』という本がなければ我々は何も知らないですよ。これはいい本ですよ。

米朝●日本経済新聞社から、たびたび話を持ってこられてとうとう書いた。考えてみたら今しかないかもしれんな思うて、それで去年の11月に。

濱●米朝さんの蔵書の数が多いのは有名ですが、相当すごいんでしょう。

米朝●私は実は整理してどこかへおさめるところへおさめてしまい、それがなかなかできない。ちょんまげ時代の出版した噺本なんかは今は高価なんです。私が古本屋回りをしていた時代は、それは昭和20年代、30年代は安かったんです、そういうものは。落語に関する本なんて非常に安かった。明治の末に出た『文芸倶楽部』の臨時増刊なんていうのは、1冊あの時分500円かな。1,000円しなかったんです。そんなんでどんどん買い集めていた。今は1冊が3,000円ぐらいする。江戸時代の噺本、大概あれは5冊が単位なんですよ。5冊本なんかは、ちょっと高いなと思うたけど2万円ぐらい出して買うたようなもんが、今はやっぱり40～50万です。そういうのはちょっと別にして、雑多な本はもう整理しようと思うて。

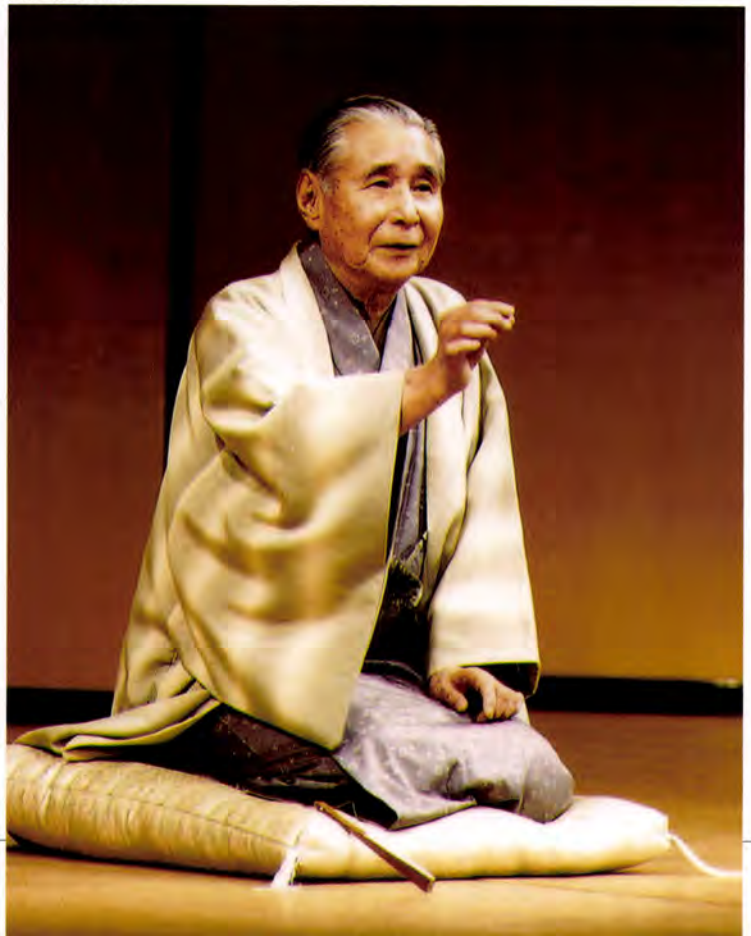
濱●そうですね。将来への貴重な資料が沢山ある、米朝さんの蔵書は、日本で唯一の落語図書館にでもなると良いでしょうね。ところで、最後に、現在の若者に対して一言、今後の抱負についてお聞かせ願います。

米朝●ウーン、もうこの歳ですから、今後の抱負などありません。今の若人には、古い文化の蓄積というものを見直してもらいたい。それと日本には資源がないということ、石油も金属もパルプも木材もすべて輸入に頼っている。ストップしたら車も走れない。パンも麺類もなくなる。豊富にあるのは水だけです。何もない国であることを再認識してもらったら、生活態度も変わるでしょう。

濱●本日は貴重なお話をお聞かせ頂き誠にありがとうございました。1人でも多くの大東生が、本日の米朝さんのお話に触発されて、自分の夢や希望を大きく持ち、それに向かって努力し、各分野で活躍され、自分たちの夢や希望を実現させてくれることを願っています。このことが、大東文化大学が今後90周年、100周年へと大きく発展する原動力になると信じているからです。

米朝さんもきっと同じお考えだと思います。本日はありがとうございました。

米朝「ウーン、もうこの歳ですから、今後の抱負などありません。
今の若人には古い文化の蓄積というものを見直してもらいたい……」
撮影・宮崎金次郎



知的活動を支えるための環境整備は、
大学にとって、いわばもう一つの教育でもあります。
美しく整った快適な教育空間で、
柔軟な思考力と豊かな感性を育みたい。
本学では、板橋キャンパスの再開発をはじめ、
セミナーハウスや合宿所などの施設整備を着々と進め、
ソフト・ハードの両面から学究活動を支える
様々な体制の拡充に尽力しています。

キャンパスの整備

着々と、発展

第2章●新たなる時代へ

第6節

キャンパスの整備 1

知の殿堂としてさらに充実へ、板橋キャンパスに新校舎

板橋キャンパス整備の第一期工事の開始など、個性をのばす知の空間を構築。図書書庫棟、徳丸研究棟も建設。

緑の中庭を中心に、人と人との出会いと交流を育む地域にも開かれた魅力的なキャンパスを目指して。

完成後の板橋キャンパス・イメージパース

「緑のキャンパス」をテーマに、板橋キャンパス再開発

平成14(2002)年8月に始まった板橋キャンパス整備の第一期工事は、狭い校地を再開発して機能性や効率性を高めるばかりでなく、空間をさらに魅力的なものにし、学生や教職員、地域の人たちからも愛され、親しまれ、ヒューマニティあふれる環境とすることを狙いとしています。

大きな特徴は、大東文化大学のスクールカラーである「緑」をキーワードにした「緑のキャンパス」の創出です。東の中庭はハードな路盤と落葉樹の高木で造成され、学生同士や学生教員間のコミュニケーションが取れる活動的な緑の空間「交流の杜」とします。西側には、斜面を横切る小径に沿って「思索の杜」を点在させ、緑濃く奥行き感をもたせて「一人になれる」静かな空間を造ります。このようにして、中央棟・図書館を東と西の異なる2つの中庭で包み込むように配置し、人と人の交流を生む空間を造り、食堂やカフェ、体育館などの各館につながるように設計されています。

キャンパス内では学生同士、学生と教職員の交流ができ、教育研究活動が活発に行われるように、大学機能が有機的に連結されています。3号館の南側には、「スパイン空間」と名付けた交流空間を設け、人と人の出会いの場を造ります。「交流の杜」に面し、暖かな日差しがそそぐ立地を利用し

再開発前の板橋キャンパスの風景

て太陽光発電装置を設置し、また環境共生への取り組みとして、屋根には風力発電のための風車を取り付けます。3号館の1階から2階は教室ゾーンに、3階から5階は研究室ゾーンとし、低層でのびやかに各層が連結し、人の流れと交流の場を造り出します。さらに屋上は緑化し、「ヒートアイランド現象」の防止に役立てるほか、ほかの階とは違った趣のラウンジを造り、静かな環境を形成しています。

板橋キャンパスの完成予想模型。
(写真上)左から1号館(既設)、中央棟・図書館、体育館・厚生棟、3号館
(写真下)手前の木々に覆われた庭が「交流の杜」

体育館・厚生棟には、公式のバレーボール・バスケットボールコートが十分にとれる体育館と、学生活動の中心となる部室棟を整備します。アメニティ施設として中央棟・図書館の北側は福利厚生を中心に配置し、南側に食堂とカフェと書店をもち、北側道路からも利用できるようにして郵便局や売店をおきます。上階には文化系サークルの部室と学生自由ホールを配置して、学生の生活環境の中心とします。3号館の教育・研究ゾーンと体育館ゾーンにはさまれ、交流と憩いの空間になります。

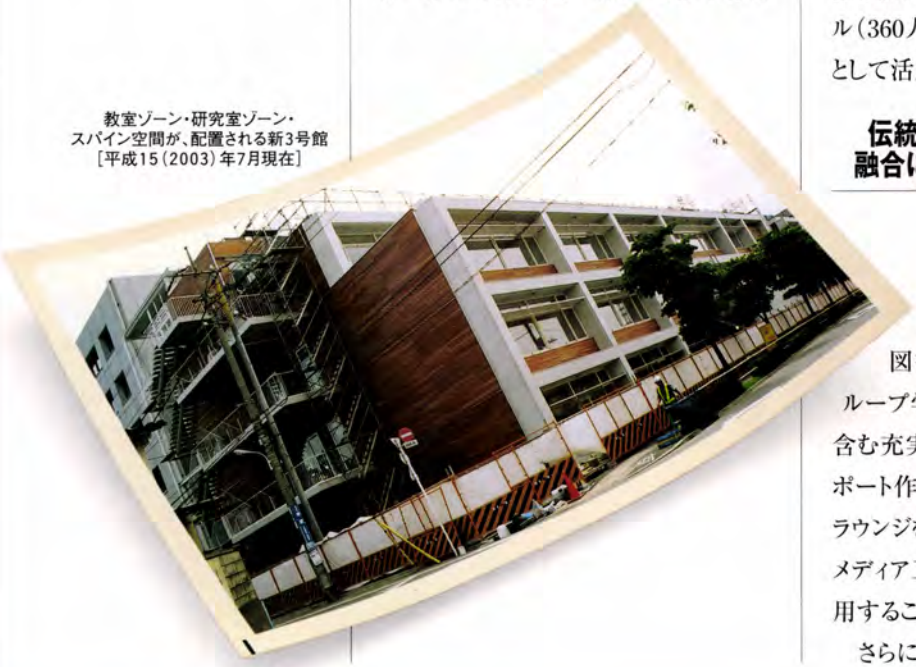
キャンパスの中心には、文化的シンボル(中央棟・図書館)を建設し、十分な蔵書数および閲覧席を確保するだけでなく、情報メディアの自由な利用が可能な創造の場とします。2階から5階に図書館をおき、3階には1号館の情報教室群と図書館を連携する情報センターを設置。中央棟・図書館2階テラスには開放的な情報ラウンジを設け、学生が常に利用できるようにします。この場所は図書館出入り口のすぐ脇であり、大学全体を見渡せることから、学生主体の情報発信基地としてもふさわしい場所となるでしょう。また、地下には、20万冊が収納できる図書館の自動化書庫を設けています。書庫の書籍などは2階の事務室内のカウンターまで機械化されたシャフトで運ばれます。外部は晴れた日にはくつろぐことができる大階段を設けます。階段の下は多目的ホール(360人収容)となり、自由な活動の場として活用されます。

中央棟・図書館は、メディアミックス型図書館として、情報メディアの自由な利用が可能な創造の場。

伝統的な学問と先端技術の融合による新たな価値の創造

平成15(2003)年9月に完成した板橋キャンパス中央棟・図書館は、メディアミックス型図書館として建設されました。グループ学習室および個人用閲覧席を含む充実した図書館機能に加えて、レポート作成にも使えるPCフロアと情報ラウンジをもち、さらに情報教室・マルチメディア工房・LL教室をも一体的に利用することができます。

さらに、中央棟・図書館の真価は設



教室ゾーン・研究室ゾーン・スパイン空間が、配置される新3号館
[平成15(2003)年7月現在]

マルチメディアを駆使して提供する国内外の情報によって、国際化し多様化する教育・研究の現場をサポートしている図書書庫棟。

情報メディアなどを自由に利用できる、創造の場としての中央棟・図書館［平成15（2003）年7月・現在］

備だけではなく、伝統的な学問と先端技術の融合による新たな価値の創造にあります。本学の新たな発展基盤を支えるため、図書館と学園総合情報センターが協働で運営にあたります。

蔵書約70万冊とマイクロフィルム約3万4,000リールの収容を誇る

板橋校舎の図書書庫棟は、平成10（1998）年4月に完成しました。建築面積522.8㎡、延床面積1,487.25㎡、鉄筋地上3階建ての造りです。

書庫内には7段式の集密書庫が設置され、蔵書収容冊数は約70万冊、マイクロフィルム約3万4,000リールが保管できます。最新式の循環式空調設備により、書庫内は常時、温度22℃、湿度50%に保たれています。

図書館では平成8（1996）年から、学内の図書・雑誌のコンピューターによる検索に加え、インターネットやCD-ROMを通じての国内外の図書・雑誌の情報サービスが開始されました。これにより、世界の和文・欧文の雑誌記事情報や図書情報の検索・提供など実現し、教育・研究の国際化に対応して幅広い利用がなされるようになりました。

平成11（1999）年2月徳丸研究棟が竣工。東洋研究所が3月から使用

大東文化大学徳丸研究棟は、平成11（1999）年2月20日に完成しました。平成10（1998）年9月から工事が始められ、板橋区徳丸2-19-10に建設されました。本学板橋校舎と最寄り駅である東武東上線東武練馬駅のほぼ中間に位置しています。

建物は鉄筋コンクリート造りの地上3階、塔屋1階で、敷地面積458.37㎡、建築面積273㎡、延床面積837.04㎡。1階は事務室、共同研究室、書庫、資料庫、マシンルームなどがあり、2階には研究室6室、書庫、倉庫、3階には会議室3室と書庫などが設けられています。同年3月から東洋研究所が利用しています。

東洋研究の殿堂「徳丸研究棟」。平成11（1999）年2月竣工

キャンバスの整備 2

陸上競技部の新合宿所の愛称は「ATHLETE-EGG」

未来のスポーツマンが羽ばたいていくイメージを込めて、「卵」をモチーフに設計した新合宿所が完成。

陸上競技部の新合宿所「ATHLETE-EGG」（アスリート・エッグ）が、平成9（1997）年9月に完成しました。「卵」をモチーフに設計した建物で、未来のスポーツマンが羽ばたいていくイメージが込められています。建築面積395.71㎡、延床面積732.93㎡。鉄筋コンクリート造りで、2階建て。1階にはエントランスホールと中庭（トレーニングスペース）が設けられ、学生室4室、トレーナー室、事務室、食堂、浴室、2階には学生室16室があります。

完成を祝って行われた竣工式で、森崎震二理事長代理が「箱根駅伝や全日本大学選手権で優勝経験が多く、卒業生はオリンピックに出場するなど目覚ましい実績を誇ります。今後も努力を重ねて大きな成果をあげられることを期待します」とあいさつ。陸上競技部を代表して青葉昌幸監督が「念願の夢がかない、感謝の気持ちでいっぱいです」とお礼の言葉を述べました。

玄関には、愛称である「ATHLETE-EGG」のレリーフが掲げられている

新設された陸上競技部の合宿所。平成9（1997）年9月完成

「さらなる大きな成果に期待」森崎震二理事長代理
「念願の夢がかない、感謝の気持ち」青葉監督。

キャンバスの整備 3

平成11（1999）年5月、ラグビー部合宿所が竣工

現役・OBの部員はじめ部長や理事長らが出席。完成を祝い、和やかな雰囲気の中で竣工式を開催。

ラグビー部合宿所の完成を祝って、平成11（1999）年5月に竣工式が行われました。

新設の合宿所はこれまで合宿所があった敷地に建設され、鉄筋コンクリート造り、地上4階建て、敷地面積496.63㎡、建物面積313.19㎡、延床面積969.36㎡。堅固な屋根が設置され、夏でも最上階の室内気温が上昇しないように特別の設計がなされています。外壁はグレイのタイル貼りで、比企丘陵の自然に美しく溶け込んだ外観が目を引きます。1階は玄関ホール、マネージャー室、多目的室、厨房、食堂兼ミーティングルーム、浴室、脱衣室など。2階から4階は学生室で、各階とも10室計30室が設けられています。

竣工式には、竹内哲夫理事長や須藤敏昭学長、ラグビー部の中本博皓部長、中野敏雄前部長・名誉教授、現役のラグビー部員らが出席し、和やかな雰囲気の中で完成を祝いました。

グレーを基調とした落ち着いた外壁の真新しい合宿所

ラグビー部合宿所の竣工式。平成11（1999）年5月28日

鉄筋4階建てで、堅固な屋根を設置し、夏でも最上階の室内気温が上昇しない造り。

キャンバスの整備 4

交換留学生が安全で快適に生活できるために

駐車場と談話室を備えた3階建て16室の留学生会館 各国からの留学生たちが毎日の生活を送っています。

周囲と調和したタイル張りの瀟洒な外観 北坂戸駅から徒歩3分の好立地に建設。

大東文化大学留学生会館が平成10(1998)年3月、坂戸市に完成しました。同年の4月からアメリカ、カナダ、オーストラリア、韓国、中国、台湾、インドネシアなどからの交換留学生たちが、ここで毎日の生活を送り、通学しています。

留学生会館は、海外からの交換留学生たちが、安全で快適に留学生活を送れるようにという目的で建設されました。立地は最寄りの北坂戸駅まで徒歩3分で行き来でき、交通の便も良い場所にあります。

建物の外観は茶色のタイル張りで、周囲の住宅と美しく調和しています。建築面積は232.29㎡、鉄骨鉄筋コンクリート造りの3階建てで、1階には談話室と駐車場があり、2階と3階に宿舎として計16室が設けられています。所在地は埼玉県坂戸市溝端町4-10。

埼玉県坂戸市に完成した「大東文化大学留学生会館」。平成10(1998)年3月

キャンバスの整備 5

教育研究における情報環境の進展

学内の情報環境は常に時代の先端に近い状態が保たれ、教育・研究において快適な利用環境の提供を目指しています。

平成13年から学内の全員が利用者IDをもち、自由にインターネット等を利用しています。

情報分野の技術進歩は特に急速で、大学の情報環境はできる限り時代の先端に近い状態を保ち、教育・研究に快適な利用環境を提供しています。

情報実習教室数・学生利用可能パソコン台数は、平成6(1994)年の5教室253台(板橋2教室・80台、東松山4教室173台)から、平成13(2001)年28教室993台(板橋10教室290台、東松山18教室703台)へと年々充実してきています。パソコンOS(オペレーティング・システム)は、WindowsのほかにUnix系OSのLinuxを搭載し、少数ですがMacOSも完備しています。

また、インターネット利用サービスは、平成12(2000)年度には在学生のほぼ8割弱が利用し、平成13(2001)年4月から、在学生と教職員全員に利用者IDを付与して、パソコンで自由にインターネット利用(メール送受信、ホームページ作成など)ができるようになりました。

ネットワーク環境は、学内LANの敷設および整備を順次実施し、学外との接続では、平成4(1992)年10月、JPNIC(現日本ネットワークインフォーメーションセンター)からIPアドレスの割当認可、平成5(1993)年2月ドメイン名(daito.ac.jp)承認、同年4月TRAIN(現東京地域アカデミックネットワーク協会)加入による学術ネットワーク(SINET)への接続開始で、インターネット利用の幕が開きました。

回線速度は、段階的に増強して現在では1.5Mbpsとなっています。また、学外からの利用を可能とするダイヤルアップ接続サービスを、板橋校舎は平成9(1997)年5月、東松山校舎は同年7月に開始しました。平成11(1999)年1月には、東松山校舎から商用ネットと接続してインターネット環境を充実し、ダイヤルアップ接続サービスの代替として、平成15(2003)年5月より、インターネット経由で学内サーバ(メール等)の利用を実現しています。

本学では、学生全員にIDとメールアドレスが与えられ、自由にパソコンおよびインターネットが利用できるようになっています

キャンバスの整備 6

平成6(1994)年6月、菅平セミナーハウスが完成

ラグビーのメッカ「菅平高原」に厚生施設が完成。落成を祝い、関係者らが盛大に祝賀会を開催。

ラグビーのメッカとして知られる長野県菅平(小県郡真田町)に、平成6(1994)年6月、菅平セミナーハウスが完成しました。

平成5(1993)年7月から建設されていた同施設は、宿泊収容人数40人、全天候型のテニスコートや多目的グラウンドが設けられています。1階にある吹き抜けのラウンジは、天気の良い日は北アルプスまで眺められ、「ダボススキー場」も一望できます。

建物の地下1階には大小浴室、ランドリー、乾燥室、1階はラウンジ、食堂、ゼミ室2室、管理人室など、2階は宿泊室10室、談話室などがあります。信越本線上田駅からJRバスで60分、徒歩20分。平成11(1999)年には、シャワー棟を建設。

学生や教職員の研修と福利厚生の目的で建設された「菅平セミナーハウス」

広々とした空間のラウンジには、暖炉も設置されています

40人収容、テニスコートなどを備えた宿泊施設 天気の良い日は北アルプスまで望めます。

キャンバスの整備 7

嬬恋セミナーハウス 学問(まなび)の湯

浅間山などの秀峰を望む上信越高原国立公園内に湧くスクールカラーと同じエメラルドグリーンの温泉。

「嬬恋セミナーハウス」(群馬県吾妻郡嬬恋村)に温泉施設「大東嬬恋温泉　学問(まなび)の湯」が完成し、平成9(1997)年7月に温泉開きを行いました。

学問の湯は、岩風呂から浅間山などの秀峰を望むことができます。温泉の色はスクールカラーと同じ、澄み切った緑色のエメラルドグリーン。源泉の温度は摂氏64℃で、毎分66ℓの豊富な湯量を誇っています。温泉の泉質はカルシウム・ナトリウム硫酸塩温泉(石膏泉)。平成5(1993)年秋に現地調査を始め、平成7(1995)年6月にボーリングを開始。500mを掘削して湯層に当たり、平成8(1996)年10月に完成。冬期間の閉鎖を経て平成9(1997)年7月から利用が開始されました。

群馬県嬬恋村に建設された「嬬恋セミナーハウス」

嬬恋セミナーハウスは、各サークルやクラブ活動の合宿所として学生の利用が多い

恵まれた自然の中に『まなびの湯』の誕生 合宿やゼミ、交流の場として活用。

スポーツ、文学、芸術など、
文武両道に秀でた本学の学生たちが、
日々、研鑽を重ねてきたその成果を発揮し、
賞賛という形で実を結んでいます。
限りない夢と、大いなる希望に向かって
ひたむきに努力する大東文化大学の気風こそ、
我々に与えられた唯一無二の財産であり、
本学の存在意義がそこにあります。

輝く学生の栄光の記録

賞賛と、功績

第2章●新たなる時代へ

第7節

輝く学生の栄光の記録 1

充実の司法試験コース 高度な実力を養成

最難関の国家試験・司法試験に本学から初めて永井美奈さんが合格。翌年には永嶋実さんも続く。

永嶋さんが研修室員として勉学に励んだ法学研究所研修室が、司法試験合格の礎。

最難関といわれている国家試験・司法試験。この平成10(1998)年度の司法試験に、本学から初めて永井美奈さん(大学院法学研究科法律学専攻博士前期課程1年)が合格しました。2年生の春休みから本格的に司法試験の勉強を始め、3度目の挑戦で超難関を突破しました。この永井さんの合格に続き、翌年には、平成8(1996)年度本学法学部法律学科を卒業した永嶋実さんも、司法試験4度目の挑戦で見事合格しました。

4度目の挑戦で司法試験に合格した永嶋実さん

本学初の司法試験合格者となった永井美奈さん

永嶋さんの司法試験合格の礎となったのが、在学時から研修室員として連日勉学に励んだ法学研究所。この研究所は法律学科所属の教員を中心に法律学に関する研究を行うほか、東松山と板橋校舎にそれぞれ研修室を設置。研修室には勉学の便を図るために20程度のデスクもあり、永嶋さんのように研修室員として個人のデスクをもつこともできます。司法試験をはじめ資格試験の受験を希望する学生や卒業生に対し、充実した受験指導を行って高度な実力を養成しています。

輝く学生の栄光の記録 2

文学界新人賞の橘川有彌さんが、学長賞も受賞

日本文学科在籍中、第85回文学界新人賞に輝く。小説の創作を始めて応募、2作目にしての快挙。

目標は大きく、将来ノーベル文学賞を受賞できる日を夢見て頑張りたい。

平成9(1997)年、本学の日本文学科3年の橘川有彌さんが、第85回文学界新人賞(文芸春秋主催)を受賞しました。この名誉ある賞を射止めた作品のタイトルは『くろい、こうえんの』。幻想や理想像ではない普通にいるような女の子を主人公に現代の若者風俗を描いた作品です。小説を書き応募を始めて2作目にしての快挙でした。前年応募した作品も候補作に残り、創作についての選考委員や編集者の指摘を参考にしながら、半年をかけて110枚を書き上げたと言います。

この受賞により橘川さんは、平成10(1999)年度の卒業式で学長賞に輝きました。受賞の際に「学長賞という名誉ある賞を頂き大変光栄に思っています。卒業後も文学の道を続けて、大東文化大学の名前に恥じないように努力して行きたい。目標はできるだけ大きい方が良いと考え、将来ノーベル文学賞を受賞できる日を夢見て頑張りたいと思っています」との言葉を残しています。

在学中に文学界新人賞を受賞した橘川有彌さん

輝く学生の栄光の記録 3

権田瞬一さんが、在学中に日展に3回入選

第28回日展に初出品で入選を飾る。本学初！1年生で初めての入選。

日本の美術界をリードし続け、日本の美術振興を目指す、日展。平成8（1996）年に開催された第28回日展第5科の書で、本学中国文学科1年の権田瞬一さんが初出品ながら見事入選しました。1年生の入選は本学で初めてです。権田さんは「一生懸命いいものを作ろう、せっかく作ったものだから出品してみようと思ったまでで、入選して驚いています。今後もいい作品を出品していきたい」と喜びを語りました。権田さんは在学中に、篆刻で3度も入選し、卒業時に学長賞を受賞しました。

日展に3度入選の
快挙を成し遂げた権田瞬一さん

尊徳性道問学 4.9×4.9 権田逸廬

翰墨游戯 3.8×3.7 権田逸廬

「一生懸命いいものを作ろう、せっかく作ったものだから出品してみよう」と権田さん。

輝く学生の栄光の記録 4

第14回スペインギター音楽コンクールで優勝

本学教育学科を卒業した下田純義さんが、第14回スペインギター音楽コンクールでグランプリに。

クラシックギター音楽の普及と向上を目指すとともに、優秀なギタリストを発掘し世に送り出すことを目的に開催されている「スペインギター音楽コンクール」（日本・スペインギター協会主催、スペイン大使館後援）。平成8（1996）年10月に行われた第14回大会で、プロのギタリストら64人の中から見事優勝したのが、本学の卒業生である下田純義さん。下田さんは、ピアニストの叔母の影響で幼少のころから音楽に親しみ、12歳でギターを始め、古瀬恵一、田部井辰雄、佐野正隆の各氏に師事しました。コンクールでは第1、2次予選後の本選で課題曲のアルベニス作曲「朱色の塔」、自由曲トローバ作曲「ソナチネ」を演奏。「美しい音、巧みな歌い口で課題曲はベストの演奏をした」と審査員にも評されました。優勝後、下田さんは「小学校教諭と演奏活動との両立を目指すとともに、クラシックギターの美しさ、しなやかさをアピールしていきたい」と語っています。

本学教育学科卒業生の
下田純義さん

「美しい音、巧みな歌い口で課題曲はベストの演奏をした」と評された入魂のギター演奏。

輝く学生の栄光の記録 5

アトランタ・オリンピックのマラソンとレスリングで、本学OBが健闘

第26回オリンピックが、平成8（1996）年、米国アトランタで開催。卒業生2人がマラソンとレスリング競技に選手出場。レスリングではOBの下田正二郎氏が、全日本監督として活躍。

日本レスリング協会の強化委員長に、下田正二郎氏が就任

本学卒業生の下田正二郎氏

日本レスリング協会の強化部門の最高責任者である「強化委員長」に、同協会コーチ委員で、OBの下田正二郎氏が就任しました。バルセロナ・オリンピック以降、低迷を続ける日本レスリングの再興という重大な使命を背負い、アトランタ・オリンピックで金メダル獲得を目指して全日本チームの強化に当たりました。下田氏は「日本のレスリングが一番厳しいこの時期だからこそ、自分が推されたと思います。オリンピック選手にもなれなかった私がやるということは初めてのことですので頑張らなければ」と決意を語りました。

アトランタに駆けつけた大東文化大学応援団

下田氏は昭和47（1972）年3月に経済学科を卒業。佐藤明弘・レスリング部監督の厳しい指導を受けて練習に汗を流し、2年生の時には全日本レスリング選手権大会に出場。フリースタイル100kg級で優勝するなど輝かしい成績をおさめました。卒業後に渡米して本場のレスリングを学び、昭和51年に帰国。山梨学院大学のレスリング部監督となります。同大レスリング部は平成5（1993）年のリーグ戦3位、バルセロナ・オリンピックにはOB2人が出場するなど、下田監督の指導は着実に実を結んでいます。これらの実績が日本レスリング協会に高く評価され、昭和63（1988）年からの同協会交流副委員長をはじめ、バルセロナ・オリンピックコーチまで数々の重職を歴任。強化委員全員の推薦により、大役決定となりました。下田氏は「大東文化大学のOBとして、自分の役割をしっかりと果たしたい。自己を見つめて我を忘れることなくこの仕事をやっていきたいと思います」と話しました。

大東応援団、緑の小旗で声援

アトランタ・オリンピックの男子マラソンに、実井謙二郎選手［平成3（1991）年経済学科卒］が出場し、本学応援団の声援を背に走り抜きました。実井選手は1年生の時に箱根駅伝第1区で区間賞に輝き、平成2から3（1990から91）年の連覇に貢献。卒業後、平成8（1996）年の東京国際マラソンでは驚異的な追い上げで、日本選手では5年ぶりの8分台となる2時間8分50秒を記録し、オリンピック代表に選ばれました。

大会最終日の8月4日、実井選手は力強い足取りでオリンピックスタジアムを飛び出し、7つの丘を越える史上最も過酷なコースに挑みました。スタートから先頭集団に付けていた実井選手ですが、スローペースのレースに巻き込まれてしまいます。田村房夫常務理事や小野

最後まで力強く走り抜け、戦い続けた選手たち日本中に大きな夢と感動を与えてくれました。

男子マラソンに出場した実井謙二郎選手

緑の小旗を振ってエールを送る大東応援団
大声援を背にOBらは世界の舞台で輝きました。

幸二体育センター所長ら本学関係者らの応援団が、緑の小旗を振って12km地点のピーデモント通りで熱い声援を送りました。しかし、20km地点で先頭のスピードが上がった際に、リズムが合わず後退します。その後は歯を食いしばって走り続け、約7万人の観衆が見守るスタジアムに戻りました。本学応援団の「ジツイー、ガンバレー」との声援の中、最後の力を振り絞ってゴール。その場に倒れ込み、係に抱えられるようにして退場しました。タイムは2時間33分27秒、93位の成績でした。帰国した実井選手は「レース展開を考えすぎ、予想よりずっと遅いペースでレースが進み、リズムが作れず、体力を消耗した。最後は完走するのがやっとだった。今後は今回の反省を生かし、一年一年を大切に頑張りたい」と決意を語りました。

選手に声援を贈る
大東文化大学の応援団

バルセロナ・オリンピックに続いて、アトランタ・オリンピックに出場

アトランタ・オリンピックのレスリングのグレコローマンスタイル130kg級で、下田正二郎氏が監督を務める日本代表チームに、鈴木賢一選手［平成4（1992）年法律学科卒］が前回のバルセロナ・オリンピックに続いて2回目の出場に臨み、合計6試合に出場して3勝3敗の成績でベスト8入りを果たしました。

130kg級には“世界最強の男”と言われ、オリンピック3連覇の偉業を達成したロシアのカレリンが出場し、ジョージア国際会議センターを会場に第1試合から熾烈な戦いが繰り広げられました。

鈴木選手は第1試合でハンガリーのケケシュと対戦し、延長戦に持ち込んだものの、惜しくも判定負け。第2試合は不戦勝。第3試合では、強豪のチュニジアのアヤリに判定勝ち。前半にポイントされたものの、あわてず落ち着いて試合を進め、後半に入って得意のグランドで得点し勝利しました。翌日の第4試合では、タジキスタンのドグバレリを8-0で判定勝ち。試合開始から首投げやがぶり、グランドでキメるなど理想的な試合運びで完勝し、8位以内を決めました。しかし、第5試合では、今大会銅メダルのモルダビアのムレイコにテクニカルフォール負け。7・8位決定戦では、元世界チャンピオンのスウェーデンのヨハンソンにフォール負けに終わりました。

試合後に鈴木選手は「大東文化大OBとして精一杯戦い、6試合もオリンピックのマットに上がれたことに満足しています。私に勝負の厳しさ、うれしさ、そしてレスリングの素晴らしさを教えてくれた大東文化大レスリング部を誇りに思います」と感謝の言葉を述べました。

下田監督率いる日本代表チームで、
グレコローマンスタイル130kg級に臨む鈴木賢一選手（中段一番左）

アトランタオリンピック激励会であいさつする諏訪学長。
壇上右から実井、鈴木、下田の各選手。平成8（1996）年6月

輝く学生の栄光の記録 6

金井選手がアジア大会のテコンドーで銅メダル

金井洋、第13回全日本テコンドー選手権大会2階級制覇で4連覇。平成2(1990)年から13年の間、同大会で通算10回のタイトルを獲得。

納得の練習、コンディションで望んだ第13回アジア大会において銅メダルを獲得。

平成5(1993)年に広島市安芸区スポーツセンターで開催された第13回全日本テコンドー選手権大会で、本学テコンドー愛好会に在籍していた金井洋さん(法律学科2年)が大会随一の激戦区・ライト級で優勝しました。金井さんは、平成2から4(1990から92)年まで1階級下のフェザー級で3連覇をしており、この優勝により見事2階級制覇、通算4連覇を達成。その後の全日本選手権大会でも平成7(1995)年、平成9(1997)年、平成10(1998)年にライト級、平成12(2000)年ミドル・ヘビー級、平成13(2001)年ミドル級で優勝。通算10回もの優勝を飾っています。

銅メダルを下げて、少し照れくさそうな表情の金井洋さん

10歳のころからテコンドーを始めた金井さんは、14歳で全日本選手権に初出場。その後、斉藤博勝コーチに師事するため第一高校に入り、その後本学に入学しました。金井さんの大学時代には愛好会だったテコンドーも、同好会を経て今では部に昇格しています。

また、金井さんは平成10(1998)年の12月にタイのバンコクで開催された第13回アジア競技大会ライト級で見事銅メダルを獲得しました。このほか、平成9(1997)年に全日本テコンドー選手権で、三宮猛司(政治学科4年)が3連覇。世界の大会でも平成12(2000)年韓国オープンで大谷主水(中国語学科2年)が銅メダル、平成14(2002)年には同大会で小杉直樹(英米文学科4年)が銅メダルを獲りました。さらに平成15(2003)年全日本学生選手権では本学テコンドー部は、6階級の制覇と団体優勝に輝き、学生テコンドー最強の座をゆるぎないものとしています。

輝く学生の栄光の記録 7

学生氷上競技選手権大会で、スケート部女子が総合優勝

500m競技で優勝し、1,000mでも3位に入賞。女子スケート部の五味利恵さんが活躍。

チームは2,000mリレーでも1位となり、念願の初の総合優勝を飾りました。

スケート部門女子総合優勝表彰式。
左から、五味利恵、小林和代、鈴木敬子の各選手。
平成8(1996)年1月

平成8(1996)年1月6日から9日に北海道釧路市柳町スピードスケート場などを舞台に開催された、第68回日本学生氷上競技選手権大会(インカレ)において、本学スケート部女子が大活躍。中国文学科4年の五味利恵さんが、500m競技で42秒61のタイムで優勝を飾ったのをはじめ、1,000m競技でも1分29秒05のタイムで3位入賞。さらに2,000mリレーでも2分55秒90のタイムで見事優勝しました。そして総合点数8点で、スケート部女子念願の初の総合優勝の栄冠に輝きました。

滑走中の小林和代選手

輝く学生の栄光の記録 8

清水選手が、一般参加としては大会史上初の優勝

陸上競技部OBマラソン2回目で東京国際マラソンを制す。一般参加としては大会史上初の快挙。

第58回びわ湖毎日マラソンで2時間8分28秒で4位入賞

平成9(1997)年開催の'97東京国際マラソンで、本学陸上競技部OBの清水康次選手[平成4(1992)年法律学科卒、NTT西日本勤務]が、一般参加としては大会史上初の優勝に輝きました。出場したのは、アトランタ・オリンピック銀メダルのエリック・ワイナイナ選手(ケニア)や、谷口浩美選手(旭化成)ら国内外の招待選手27人を含む131選手。ハイペースで進むサバイバルレースとなったこの試合が動き始めたのは中盤以降。清水選手はいったんは離されますが、辛抱強く先頭集団に加わり、終盤39km地点の上り坂で勝負を賭けてスパート。首位を走っていた服部孝宏選手(鐘紡)を一気に振り切り、2時間10分9秒のタイムでゴール。マラソン2回目、自己最高を9分51秒も更新する力強い走りで見事サバイバルレースに競り勝ちました。大会後「優勝できて大変嬉しい。30km過ぎからは前へ前へという気持ちで走りました。チャレンジ精神で走ったのが良かったと思います。100%自分の力をだすことができました」と話しています。

その後も清水選手は、平成10(1998)年の第53回びわ湖毎日マラソンで2時間9分57秒で3位入賞、平成11(1999)年の'99東京国際マラソンで2時間9分00秒で3位入賞、平成13(2001)年の'01福岡国際マラソン大会で2時間9分28秒で2位、第14回アジア競技会で2時間17分47秒で銀メダル獲得、平成15(2003)年のびわ湖毎日マラソンでは自己ベストの2時間8分28秒を出して4位に入賞するなど、輝かしい記録を残しています。

アトランタ五輪銀メダルのワイナイナ選手や、谷口浩美選手ら強豪を抑え、初優勝。

輝く学生の栄光の記録 9

山内選手が学生日本一をつかみ、武蔵川部屋に入門

昭和59(1984)年の相撲部創部以来、全国大会で初優勝。松坂監督との二人三脚による特訓が実を結んだ栄冠。

平成10(1998)年5月大分県宇佐市で開催された第38回全国大学選抜相撲宇佐大会で、本学相撲部の経済学科4年の山内隆志さんが個人戦で優勝を飾りました。相撲部は昭和59(1984)年に創部されましたが全国大会での優勝はこの大会が初めて。山内さんは準決勝で前年度アマチュア横綱の日大・田宮選手(現・琴光喜)を見事な引き落としで破り、決勝で同じ日大の加藤選手(現・高見盛)を寄り切りで破り、栄冠を手にしました。大会前は優勝予想にも上がらない無名の選手で、これまで大きなタイトルを取ったこともなかった山内さんは「優勝できたのは恵まれた環境と"稽古"。12月の終わりから3月までの授業のない日は武蔵川部屋に通い、力士の胸を借りて稽古させてもらったことが自信につながった。大いに感謝しています」と言葉を残しています。

武蔵川部屋の入門記者会見で少々緊張気味の山内隆志さん(中央)

山内さんは、武蔵川部屋に平成11(1999)年に入門。この年の初場所に本名「山内」の四股名で幕下付け出しで白星デビュー。本学から初の幕下力士となりました。

その後、「武州山」と四股名を改名。下の名前も「隆志」から「隆士」に変えました。この四股名を付けたのは、本学相撲部の監督であり学生時代に基礎から指導をし、寝食を共にした松坂憲明さん。「武州山隆士の最初と最後を取ると"武士"になる。山内は心が優しすぎるので、土俵では心を取って武士になれ」と激励したと言います。

武蔵川部屋へ入門。幕下付け出しで白星デビューし、本学初の力士誕生。

輝く学生の栄光の記録 10

Hakuba杯サマージャンプ大会女子の部で金井選手が優勝

ラージヒル出場の金井選手、女子最長不倒のジャンプで「Hakuba杯サマージャンプ大会」女子の部の栄冠に輝く。

平成14(2002)年9月28・29日に長野オリンピックの舞台にもなった長野県白馬村で行われたHakuba杯サマージャンプ大会女子の部(全日本スキー連盟主催)で、本学スキー部の金井理恵子選手(当時・英語学科3年)が見事優勝に輝きました。金井選手はラージヒルに出場し、2回目のジャンプで女子最長不倒の117.5mを飛びました。

金井選手は、長野県飯山南高校出身。小学生のころから、菅平のスキー場でジャンプの練習を始め、高校2年生より本格的に競技に入りました。このHakuba杯サマージャンプ大会前、8月に新潟県塩沢で開催されたジャンプ大会でも優勝しています。

同選手は、平成13(2001)年から3年連続ヨーロッパのFISレディースグランドツアースキージャンプ大会日本代表に選ばれ、平成15(2003)年の大会では日本人選手最高成績となる8位をマークしています。

中央が優勝した金井さん

平成15(2003)年6月
夏の長野・木島平で飛ぶ金井選手

小学生からジャンプの練習を始め、高校2年生から本格的に競技へ入る。

輝く学生の栄光の記録 11

加藤選手、レスリング全日本4大大会で優勝

加藤賢三選手が全日本学生レスリング選手権をはじめ平成14(2002)年度の全日本4大選手権大会を制覇。

平成13(2001)年開催の全日本学生レスリング選手権大会で、本学経済学科3年の加藤賢三選手が、97kg級グレコローマンスタイルで優勝を飾りました。全国大会での優勝は、11年前アトランタ・オリンピックに出場した鈴木賢一さん[平成4(1992)年度法律学科卒]以来でした。

加藤選手の快挙は続きます。経済学科4年に進級、レスリング部のキャプテンとなった平成14(2002)年には、レスリング全日本4大大会でチャンピオンに。まずは、6月開催の全日本選抜レスリング選手権大会では、1回戦シード、2回戦、準決勝を勝ち進み決勝で、太田選手(自衛隊)と対戦。延長に突入するも首投げで3ポイントを取り、栄冠に輝きました。前年8月に行われた97kg級で優勝した全日本学生レスリング選手権大会では、国際階級基準が変更され96kg級へ出場。見事優勝し大会2連覇を成し遂げ、優秀選手にも選ばれています。

11月に開催された全日本大学レスリング選手権大会では、96kg級フリースタイルに出場し、この大会で初めてのフリーでの優勝を決めました。そして、肋軟骨を負傷し、ケガを押して出場した天皇杯全日本レスリング選手権大会でも96kg級グレコローマンスタイルで優勝に輝いています。

藤沢信雄レスリング部監督は「アテネ・オリンピックに出場してくれることを期待している」と話しています。

圧倒的な強さで他を寄せ付けない加藤賢三選手(赤いユニフォーム)

レスリング全日本4大大会優勝によりアテネ・オリンピック出場へも期待。

輝く学生の栄光の記録 12

全国学生躰道優勝大会で史上最多11回の優勝

毎年各大会で輝かしい実績を挙げ続ける躰道部。中でも平成元（1989）年は、史上初の全国学生・全日本・世界の三冠王を達成。

他校を圧倒して優秀な男女選手たちが活躍 数多くのタイトルを勝ち取り続けました。

実践、法形、展開の3競技で競い合う躰道競技

「最もアクロバティックな武道」と呼ばれて海外へも広がりを見せる、日本が生んだ武道・躰道。本学躰道部は平成3から8（1991から96）年まで学生日本一6連覇を果たすなど、全国学生躰道優勝大会において史上最多11回の優勝を誇り、毎年各大会で輝かしい実績を打ち立てています。

中でも4度目の総合優勝に輝いた平成元（1989）年11月に開催された第23回全国学生大会では、宮原輝子さん（当時・中国文学科4年・現躰道部コーチ・就職部職員）が史上初の全国学生・全日本・世界の三冠王を達成し、実践・法形・展開の躰道の3競技全てにおいて全日本チャンピオンに輝くという、躰道史上いまだ破られることのない大記録を成し遂げました。

また平成5（1993）年10月の第27回全国学生大会では、千葉章博主将（当時・経済学科4年）中心に、全9競技中5競技に優勝するという圧倒的強さを発揮し、2位に大差を付けて7度目の学生日本一に輝きました。千葉選手はこの大会の最優秀選手にも選ばれています。

総合4連覇（通算8回目）を達成した平成6（1994）年10月開催の第28回全国学生大会では、本学躰道部初の女子主将となった法月奈津子さん（当時・政治学科4年）が個人女子法形で3連覇を飾り、個人女子実践競技でも2年ぶりの優勝を奪還し、自身2度目の2冠王を達成しました。この大会で法月さんは、個人男子実戦で優勝した日吉正幸さん（当時・英語学科4年）とともに優秀選手に選ばれました。

平成11（1999）年11月に開催された第33回全国学生大会で11回目の学生日本一に輝くとともに、本学躰道部は昭和62（1987）年以来、平成14（2002）年まで、実に16年連続総合3位以内という不滅の金字塔を打ち立て、今年また新たな気持ちで12回目の学生日本一に挑みます。

年毎に輝かしい記録を積み上げていく本学の躰道部員

グローバル化する世界にあって、真の国際人とはどのような人たちを指すのか、その一つの答えが、世界の各地で活躍する大東文化大学の卒業生たちの姿から垣間見えてきます。大東文化大学の未来を語るとき、「東西文化の融合」という建学の精神に立脚しますが、それは、世界の全ての人々に課せられた普遍的かつ根元的なテーマでもあるのです。

大東文化大学創立80周年記念◎特別座談会

第3章

輝ける

明日へ

大東文化大学創立80周年記念◎特別座談会

大東文化大学の

——創立80周年ということで、まず大東文化大学の伝統について、お聞きしたいと思います。

須藤●本学の伝統として最初に言えるのは、中国に強い、アジアに強い、ということですね。私は4年前に学長に就任して以来、大学間の協定締結などの件で海外の大学を訪問する機会に恵まれましたが、とりわけ中国の大学で、本学と中国の大学や研究者とのパイプの太さを、それまで感じていた以上に実感しました。しかも、いまや数多くの日本の大学が盛んに中国の大学と交流をもつ中で、大東はほとんど別格という感じで処遇されるようなところもあって、その重みはスゴイな、という感じがしました。それだけ、長年にわたって積み重ねられてきたものがあるということなんですね。

岡田●そうですね。やはり中国とか漢文とか、そして書道とか、これらこそが大東文化大学の原点であり、伝統なんですね。アジアは本学を語る際のキーワードだと思います。もともと東洋の文化を研究、教育し、創造するという中から、"東西文化の融合"という建学の精神が生まれているわけで、アジアは大東にとって伝統の柱とでも言うべきものです。中国の歴史を専門とする私自身、大東に職を決めたときの理由の一つが、中国に関わる第一人者で優秀な研究者が多数おられたからでした。

マクドナルド●私は大東との関わりがまだ10年しかありませんが、私が感じるいい意味での伝統、それがこの大学にはあると思います。それは、昔からのものをただ単に伝承するのではなく、時代や状況に応じて、どんどん変えていこうとする姿勢。つまり、実行力ということですね。

実際、私が働いていた日本の商社には大東の卒業生が大勢いて、みんな中国語がペラペラだったし、すごくがんばっていた。そんな人たちがいることがうれしくて、大東が誇りをもっていい伝統なんじゃない

学長からキャリア3年の若手まで、いずれ劣らぬ論客が揃い、大学教育への熱い思いを語った。

盛んなスポーツ活動、アジアを中軸に諸国に開かれた国際性、
そして自由闊達な学びの精神。伝統と進取双方の表情をもつ大学として、
国内外に名を馳せる大東文化大学。では、険しさを増す日本の教育システムの中で、
どう未来を見据え、どこへ向かうのか。創立80周年を記念し、
現在、教鞭をとられる先生方に語っていただいた。

現況と未来を語る

かと思ったんですね。

下山●私も卒業生と接して、伝統の重みを感じることがあります。創立当初からある日本文学科は、従来からやはり教員をめざす学生が多いのが特徴の一つですが、今でも教育実習のために全国に散っている学生のもとへ担当教員として呼ばれて行きますと、その学校に大東の卒業生の教師がいる割合がけっこう高いんです。しかも、その教師がまた教え子を大東に送りこんでくれる。それと、ゼミに卒業生が頻繁にやってきては、経験談などに花が咲いたり……。

こうしたゼミの延長やら、先輩後輩やら、卒業後も人間的な交流が続いているケースが多いことも、大東らしい伝統を支えている要因だと思います。

マクドナルド●そういうネットワークは国内だけではなくて、海外にもあるんですよ。この前、仕事でマレーシアに行ったとき、大東文化大学から先生が来るということで、大東を卒業した元留学生が集まってくれました。みんな自分の会社をつくったりして、バリバリやっている人たちでしたが、そこでも交流を大切にする大東の伝統を感じました。

須藤●あとは、スポーツが強いこと。これは一般にいちばん知られているのかもしれないけれど、箱根駅伝にしてもラグビーにしても、本学の看板だね。いろいろなところで、「大東といえば駅伝」のように言われるし、これももう一つの伝統になっているかな、と思います。

モスグリーンのユニフォームは部員の誇り。大東の誇りでもある

Table Talk

大東文化大学創立80周年記念◎特別座談会

大東文化大学の現状と未来を語る

"めんどうみ"のよい大学。外部からもそう評価される点は、伝統ともいえる、強み。

——そうしたさまざまな伝統のある大東文化大学。では、その特徴という点について、現状、強み、弱みなどを含めて、見解をお願いいたします。

須藤●ここ数年来、全学をあげて組織やカリキュラムの改革に努めてきた中で、これは伝統ということにもつながると思うんですが、決して好条件ばかりではないのに、ウチは非常にめんどうみのいい大学だと改めて感じた次第です。その点では、先生と学生の距離が近くて、親密に交わっているという外部からの評価もあるくらいで、これは大事にしたい強みだな、と思っています。

岡田●先生と学生の親密さでは、我が国際関係学部は大東一ではないかと自負しています。何しろ、国際関係学科と国際文化学科合わせて200人の定員に対し、教員は計40人。かなり行き届いた教育ができるわけです。しかも学生は1年から4年までずっと東松山で、徹底した少人数教育の中でいっしょに過ごしますからね。

中でも数年前に目玉的に始めたのが、1年生向けのチュートリアルという基礎ゼミ的な授業です。約12人を1クラスとしていて、すぐにお互いに名前も覚えるような家庭的な感じの授業で、図書館の利用方法をはじめ、大学生活に早くなじんでもらうためにサポートしたり、さらに大学の講義についていけるよう「読み・書き・まとめ」の仕方などについてもガイダンスしたりします。

で、その後2年、3年でゼミをこなして、4年で卒論。こうして、自分が興味をもったことをじっくりと、あたたかい雰囲気の中で勉強できるというのは、大学4年間の過ごし方としてはたいへん大事なことで、大学側もそれをもっと生かしてあげることが必要なのではないかと思いますね。

須藤●国際関係学部の場合は、4年間一貫して同じキャンパスにいるというのが大きいですよね。私から見ても、いろいろなイベントをやったりして、みんな非常によくまとまっているようだし、いい友だちを

意欲と目標、それさえあれば、相当な力を発揮すると思います。ウチの学生をみていて、そう思います。

須藤敏昭●すとう としあき

学長・文学部教育学科教授●専門は教育学、教育方法学。本学には教育学科開設から3年目に着任し、今年で30年目を迎える。4年前に学長に就任。学内の改革などに精力的に取り組む一方で、学長に就任しても担当しているゼミあるいはメールなどを通じて、学生とのコミュニケーションも怠らない。大東文化大学をいかにして発展させていくか日夜奮闘する、気さくな学長である。昭和18(1943)年生まれ。

濃密な時間を過ごした学生たちは、卒業後もよく顔を出してくれます。

非常に大規模なのに、学生の個性を尊重する。大東の不変の特徴ですね。

つくっているな、という印象を受けます。その点では、日本文学科のほうが条件は悪いかもしれないという状況の中でも、よくめんどうみているな、という気がするんですが、どうでしょう。

下山●確かに、国際関係学部に比べたら、日本文学科の学生数に対する教員数の割合は約半分。その差はいったいどうしたことなのかと……(笑)。もっとも、そういうことも含めて、現在、学科を改革中なんですけれども。

その一つとして、日本文学科の新カリキュラムの中に、国際関係学部のチュートリアルに相当する授業があります。日本文学基礎演習というんですが、東松山の1年の段階で、やはり図書館の利用方法や自分で勉強するためにはどうすればよいのかといった初歩的なことから指導を始めて、2年になると文学部ではとくに必須である読解の訓練などへと進みます。このあと板橋に移り、3年から4年のゼミと卒論という順ですが、できるだけ少人数にして、めんどうをみる側もみられる側も、結果的にとても密度の濃い時間を共有しています。

マクドナルド●私が卒業したブリスベンの大学は、全体でも5,000人くらいの小規模なところだったんです。その大学を10年ぶりに訪ねたとき、驚いたことに、先生たちが私の名前を覚えていたんです。でも、もっと驚くのは、大東にもそういう親しい関係があるということ。大東の方がずっと規模が大きいのに。それが、この大学のいいところなんですね。

そして、経営学部にも1年生に基礎演習というプレゼミ的な授業がありますし、3年から4年生のゼミも充実しています。でも、私の基礎演習をとった学生には、「私のゼミに入らないで、他のところへ行きなさいよ」と勧めるんです。というのも、学生はいろいろ挑戦してみたいだろうし、社会に出たときの準

輝ける明日へ Special Column

法科大学院(ロースクール)は法学部出身者だけでなく、広く社会人にも門戸が開放されています。

【大学院・大学ロースクール/法曹養成教育シンポジウム】

本学では平成16(2004)年4月開設に向けて法科大学院(ロースクール)の設立準備を進めています。法曹人として、21世紀の司法を担いうる人材を幅広く養成するために設立されることになったのです。

このため、法科大学院入学者は法学部出身者だけでなく、文学系・経済系学部出身者はじめ広く社会人にも門戸が開放されます。入学定員は50人を予定しています。

本学では、「地域に根ざしつつ、アジア・世界に発信する」という教育理念に基づき重点目標を設定しました。

教育プログラムでは理論研究を土台と

法科大学院(ロースクール)の設立を目指した様々な検討が、進められています

しながら実務教育が重視され、教授陣にも多くの実務家教員が加わります。専任教員14人のうち半数の7人は実務家教員で(裁判官出身者2人、検事出身者1人、弁護士3人、立法関係公務員経験者1人)、まさに、理論と実務を架橋するにふさわしい教員構成です。

法科大学院修了者には法務博士(専門職)の学位が与えられます。その上で新司法試験を受験することになります。

それだけに授業は厳しく、少人数による徹底した双方向授業が行われます。もちろん、自発的学習も重要で、このため交通至便なJR信濃町駅ビルの3階(約700坪)に校舎を設置することにしました。早朝から深夜までの利用が可能になり、また広く市民に開放するため法律相談所を併設します。

国際関係学部の主な学習対象はアジア。広域で、民族や言語も多種多彩なだけに、教える側も学ぶ側もやりがいがある。

備としても、大学時代に多くの出会いがあったほうがいい、というのが私のポリシーだからです。こういった大東のシステムが学生の個性を生かすことにもつながっていると感じています。

岡田●つながりますね。手取り足取りの指導で少人数教育のゼミを重視しているというのは、最終的には学生一人ひとりがきちんと学問を身につけてほしいからであって、それは私たちに課せられた役割、義務でもあります。とくに、国際関係学部にはかなり個性の強い学生も少なくありませんから。

須藤●そういえば、エジプトに留学している本学の学生から私あてにメールがきたことがあります。向こうでエジプト人の親友ができて、その親友がこちらに留学したいというんで、それこそ親身になって心配して相談してきたんです。これなんか、まさに学生までが大東のめんどうみのよさを実践している例で、そこまで溶け込んでやっているのか、と驚かされました。

留学生が行ったり来たり 有意義な学生生活

岡田●実際、国際関係学部の卒業生には、学生時代に留学し、海外で就職している人もたくさんいて、活躍しているんですね。これもやはり大東文化大学の伝統、そして特長として、もっと世の中にPRして、広めてもいいのではないかと思っています。

須藤●そうなんですね。それも含めて、本学が努力してきた国際化への対応について、社会的に充分認知されるほどには、情報発信しきれていないということは、弱点なのかもしれません。その責にある者として、もっと社会に知ってもらう必要性は感じています。奨学金留学制度とか、交換留学とか、制度的には完備しているほうだという自信はあるんですから。

岡田●とくに、学問の対象となる地域をアジアに限定している国際関係学部では、正規の教育課程の一環として、現地研修という形でアジアの9つの地域への短期留学を実施しています。これにほとんどの学生が参加しているという事実はPRに値するはずです。留学先の受け入れ大学が体制を整えてきちんとサポートしてくれることもあって、私たちもたいへん安心なんです。そのほか、主に英語圏には全学科共通の奨学金給付派遣留学生制

春3月、卒業証書と未来への希望を胸に、母校となる大東から巣立つ

**状況はいろいろあっても
学生自身に「哲学」が
あるかどうか、が基本。**

**意欲と目的意識。これさえ
あれば、力はつく。
すでに学生が証明済みです。**

留学していたときも、日本人の友だちがたくさんできたんですけどね。そして、国際関係学部でアジアの言語を勉強している学生たち、学内にあふれる留学経験のある学生たち。そういうインターナショナルな感覚の中で勉強するのは、大東では当たり前のことになっている。これが、ホントの国際化だと思うんですよ。

下山●そうは言っても、外国語と母国語との関係でいうと、やはり自分がネイティブで育った環境でしっかりものを読んだり、考えたりしなければ、外国語で挨拶ぐらいはできても、深いところのことまではやりとりできないわけでしょ。だから、やっぱり基本は自分が立っている場所で深く掘り下げて、それから外国との関係をつくる。それが重要なのではないかしら。

須藤●意欲だよね、結局。意欲と目当て。それさえもてれば、相当な力を発揮すると思うんですよ。これまでの偏差値序列なんてあんまり関係ない、という感じがするくらいに。ウチの学生たちを見ていて、そう思います。

——かなり有意義な学生生活が送れそうですね。その一方で、大東を含め、日本の大学教育がおかれた状況での課題にはどんなことがあるのでしょうか。

マクドナルド●日本の教育について、まだはっきりしたイメージをつかんでいるわけではないんですが、一つ言えることは、ホントの先生とはどういう存在で、度もありますし、私費留学する学生も多い。それぞれ行った先の言語はもちろん、文化や歴史、そのほかの専門分野を学ぶことで、将来の糧になります。ことに海外での学習という点では、かなりシステムが整っているから興味のある学生はそれを利用しない手はないわけです。

下山●交換留学とか奨学金給付留学は、文学部や経済学部にも広がっていて、最近では倍率が高くなってきたと聞きます。それとは逆に、大東には、海外から来ている留学生も多いですよね。

マクドナルド●そうなんです。もう一つの大東の国際化の特徴は、ここにいながらにして、多くの違う文化と接触できること。世界のいろんな国からの留学生もいれば、私みたいな外国人の先生もいる。大東がスゴイと思うのは、留学生を日本人の学生と一緒にして授業を受けさせるところ。そのおかげで、私が

いかに学びの環境を向上できるか。
それは今、本学の課題であり、
私にとっては任務でもあります。

岡田宏二●おかだこうじ

国際関係学部国際文化学科教授。
専門は東洋史(中国史・民族史)。
特に中国王朝の民族政策や少数民族の
歴史的研究を中心テーマとする。
本学での教員歴は、今年26年を迎える。
東松山校舎を拠点にしてきたこともあり、
昨年度、東松山学部連合教務委員会
委員長に就任し、目下、
東松山における教育改革に携わるなど、
大東文化大学の向上、
発展に尽力する熱き教授である。
昭和20(1945)年生まれ。

ホントの学問とはどういうことなのか、を考えてみるべきだということ。先生が広い教室で何百人もの学生の前で一方的に講義して、学生は一生懸命にノートとって……みたいなスタイルではなくて、先生はどういうふうに勉強すればいいかを教えると同時に、学生自身がその方法を開発できるように導く、というスタイル。つまり、先生も学生もそれぞれのレベルにありながら、一緒に勉強していくことですね。

それができれば、たとえば、私が教えている「問題解決法」などでも、学生自身が自分のアタマで考えてもっと実践的な方向に進めるはずですし、そういう能力こそ、いまの日本企業に求められているものだと思うんです。大学で学んだことが、実社会であまり役立たないといわれている日本で、その状況を変革することが、私たち大学関係者の課題なのかもしれません。

須藤●確かに、マクドナルド先生のそのビジョンは重要かつ最先端の課題だと思うんですが、実際には、すべて少人数、問題解決型の授業というわけにはいかない事情もいろいろとありますからね……。

下山●でも、教員のあり方が重要だという考えには、私も同感ですね。どういうふうに学生に接し、何を伝えていくのか。やはり教員も大いに勉強していかなくてはいけない、これに尽きると思うんですよね。

というのも、学科主任をやらせていただくことになって、教育基本法を読み直してみたんです。すると、抽象的だとか理想論だとか、敬遠されているけれども、なかなかちゃんとしていることが改めてわかりました。その第6条に、教員の役割は「全体への奉仕者」だとうたってあって、学校の教育は社会的に、また世界の中でどうあるべきか、ということを示唆しているんですね。

だから、学生と関わっていく上では、目指すところは何かを考えることが、どうしたら全体が向上するのかということにつながるわけです。しかも、アクティブに現在と関わり、発信していくことが重要です。これからの時代は、謙遜しているつもりで遠慮して前へ進まないでいるようなスタンスでは、教員も大学も存在し続けられないでしょうから。

Table Talk

大東文化大学創立80周年記念◎特別座談会

大東文化大学の現状と未来を語る

Table Talk

大東文化大学創立80周年記念◎特別座談会

大東文化大学の現状と未来を語る

教養教育と専門教育。どちらも必要かつ深めていかなくてはならない。大学の存在意義はそこにあるから。

課題山積だが、教育の理念を追求して

須藤●大学の役割とか使命とか、そういうことを日本全体でも考えなくてはいけないし、ウチの大学としてもきちんと検討していかなくてはいけない。その中に、いくつかの重要な課題があると思うんです。ざっと

挙げてみると、ひとつは大学の種別化の動きに対する対応、次に教養教育の問題。これには、教員の教育と研究の関係という問題もからんできます。また、大学評価システムの問題もありますね。

中でも、教養教育と専門教育の在り方については慎重に議論を重ねていくべきだと感じています。就職に有利な資格などに結びつく学科や学部は、本学でも人気が高いわけで、実社会へ向けての専門的な実力養成という点では、それも大事です。その一方で、人間としてものを見る基本を養うための教養教育。それは文学でも、社会科学でも得られると思うんだけれども、どうやって身に付けていくか。これも大事。その両輪を大切にしていくという点で、方向性をどうたどっていけばいいのか……。

岡田●須藤先生のおっしゃることは、たいへん重要だと思います。大学という場には、研究と教育という両輪をもった教員がいて、さらに教養教育と専門教育という両輪もある。理想的には、どちらもバランスよく追求していきたいけれども、現状がそれをなかなか許してくれない。18歳人口の激減による全入時代が遠からず到来するということは、やはり教養教育の重要性を認識する時期なのではないか、と。しかも、教員の問題も付随してきますから、やり始めたら相当たいへんなことになるでしょう。

現に、東松山学部連合教務委員会では、すでにいくらか議論を重ね、大東文化大学独自のものといえる改革案を進めています。そうした改革の仕事に携わって、私個人としては、人文科学とか社会科学、自然科学といったカテゴリーに入る科目が学問の一番基礎にあって、そういう知識教養を大学教育の中で、学生にきちんと身に付けさせて、社会に出すことが私たちの使命ではないか、と感じましたね。

笑い声が絶えないキャンパスは、学生のコミュニケーションステージ

**地域社会や多様な分野と
ともに歩んでいく
大学を目指したいですね。**

**人間教育の
基本としても
教養教育は必要です。**

マクドナルド●要は、中身なんですよね。仕組みも大事だけれど、一歩踏み込んだ勉強ができればいい。たとえば、歴史なんて、それを書く人の立場や視点の違いで、まったく別のものになってしまうでしょ。だからおもしろくもなるんですが、経営学部だからといって、哲学が関係ないわけじゃない。企業をどういうふうにしていくのか、学問をどうしていくのか、そこにこそ、哲学が必要だと思います。

須藤●そう、哲学とか理念とか、そういうことを踏まえて教養教育を、さらに専門も含めた大学教育をどうやっていくのか。実は、文部科学省の政策のブレなどの苦い経験もあって、いま、ある種の軌道修正が必要だと思います。人間として、市民として、どこでどういうものの見方ができるか。そういう教えにくいものを、学生が自分で身に付けていく、その保障を教養教育でやらなくてはいけないのではないかと……。

下山●昔は、教育といえば、「読み書きそろばん」でしたが、いま求められているのは、大学を卒業したら、せめてこの部分はマスターしているんだ、この部分は信用してくださいよ、というようなことを社会に発信できる教育だと思われます。大東もそれを目指していかなくてはならないし、その根底には、理念をきちっと打ち立てていることが大前提でしょう。学長がおっしゃるような、人間として、この社会でどうしていくのか、というような。

岡田●そのためにも、いままで触れられてこなかった部分にも大ナタを振るって、教養教育とは何か、ということからしっかり認識する必要がありますね。

——それでは最後に、大東文化大学は、今後、どういう方向を指向していけばいいとお考えでしょうか。それぞれのビジョンをお聞かせください。

マクドナルド●難しいテーマですが、変化のスピードが非常に速くなっていると同時に、状況が決して明確ではない社会状況の中で、どんなビジョンを描けばいいのか。それを自分なりに考えたら、コミュニティとダイバーシティ(多様性)というキーワードがあるんじゃないかな、と思います。まず、学生と教員、教育のプロフェッショナルとしての大学職員、それとここなら板橋という地域社会を含めた社会環境、キャンパス外のビジネスの現場など、教育というつながりのなかでオープンな可能性をもつ場。それが私のい

今後、大学全体が一丸となって、
互いに切磋琢磨していくべきでしょう。
よき学舎としての光を放つためには。

下山嬢子●しもやまじょうこ

文学部日本文学科教授●
専門は日本近代文学。とくに島崎藤村や夏目漱石のほか、明治から昭和における日本文学とキリスト教との関わりなどを研究テーマとする。
昭和54(1979)年に日本文学科に着任して以来、25年目にあたる
今年4月からは、学科主任の職に就任。
現在は、少人数教育など、さらに高品質な大学を目指し、学科改革のために奔走中の、優しくも厳しい教授である。
昭和23(1948)年生まれ。

社会にとって必要な人材・人財をより多く育むためにも、理念をもった大学教育が望まれる。

うコミュニティです。

一方、ダイバーシティというのは、人間は違いがあるからおもしろいんだという発想から、個人個人の個性を認めて、それを応用できる教育があること。そこからもっともっと新しいことが広がっていくようなキャンパスになって欲しいですね。

須藤●そうですね。すでに一般向けの公開講座とか、板橋区との共同研究や高校との高大連携も一部は始動しています。今後は、こうした活動をもっともっと発展させていきたいと思っています。

下山●将来のことを考えると、少子化や文部科学省の教育改革といった波もあって、大東は規模が大きいだけに、やっぱりのんきにしてはいられないですね。だから、それぞれの分野でどうしたいのか、よくしたいのかという、熱い思いと言えばいいのかしら、そういう"思いの共有"が各部署で起こって、各自が努力し、私たち教員ももっと切実に取り組まねば……ということを痛切に感じるわけです。そうしないとこの先、やっていけなくなるでしょう。

そこで、みんなで切磋琢磨していく必要があるんですね。結局、高校生が、あの大学にはああいう先生がいるとか、ああいう場があるとか、希望をもって入って来られるような場に、さらに質を高めていかなくてはいけないということなんでしょうね。そういう意味での切磋琢磨なんです。

須藤●そう、切磋琢磨は大切ですよ。本学が学生による授業評価を他大学に先駆けて行ったり、第三者評価を受けたりしたのも、そういう発想からだったんです。今後はそれをもっと実のあるものにしていきますよ。事務職員の方でも3年間の経営革新運動（MIP）を経て、今年度から新人事システムがスタートしました。評価（考課）が公正に行われ、職能開発制度が十分に活用されるなどして、真の活性化・切磋琢磨につながっていってほしいと思っています。

岡田●下山先生がおっしゃったとおり、やっぱり大学は本当に厳しいです。大東文化大学も例外ではありません。この状況をいかに安定し、発展させていくか。そのためには、今後の方向性をきちっと見定める必要が

未知の可能性を秘めた学生の、力と夢を引き出す場であり続ける

どの改革を進めるにしても、きめ細かい教育の大東は忘れたくないですね。

旧来のあり方を打破するような改革を進めたい。ロースクールもそのひとつ。

ありますね。例えば、学部教育では専門性をもった教養人の育成を目指し、その先の高度な専門については大学院に任せる、とか。これを確認した上で、大学院から各研究所、それから各学部学科までの改革に取り組んでいかなくては、と思います。

いま、学部学科間の相互乗り入れが始められています。これは、カリキュラムや教員の専門など、すべてを情報公開することで、大学全体の再編に役立てていこうとする動きです。いま勤務している先生方に横断的に動いていただけば、ある程度、効率がよくなりますよね。

そのほか、研究所機関の充実やクラス担任制の復活、学生による授業評価の続行、外国人留学生の教育の見直し等々、やるべきことはまだまだたくさんあります。でも、手をこまねいていないで、関係者の皆さんと一つひとつ積み重ねていって、きめ細かい教育という大東の看板を自信をもって掲げられるようにしたい、というのが私の希望なんです。

須藤●先生方にほとんどの問題について触れていただいた感じですが、やっぱり大事なのは“文化”というものがもつ意味ですよね。国際的視野を備えながら“文化”の意味を大切にしているという本学の個性。そういう強みをさらに打ち出していく必要があると思うわけです。経済的合理性を追求する傾向がますます強まっている世の中だからなおさらのこと、“文化”が重要です。

また、個々の改革テーマなど、すでに取り掛かっていることはグレードアップあるいはスピードアップし、これからのことで言えば、例えばロースクール（法科大学院）の開設などに果敢に挑戦する。そんな気持ちです。

学びの共同体。もっと言えば、生き生きとした学びの共同体。私は大東文化大学をそういうものにしたいんです。そう常々言ってきているわけなんだけれども、これからはその中身を一層グレードアップしていくことが大事かな、と思うんですね。学生主体の授業や学園運営に対して学生がもっと発言できるシステムとか、大学内外のコミュニティの創造とか、とにかく一つずつ、着実に……。期待していてほしいですね。

——本日は、どうもありがとうございました。

変化の激しい社会に対応しながら学生と先生が一緒に学んでいく。それが私の考える理想の姿勢です。

ダレン・マクドナルド

経営学部企業システム学科講師●専門は人的資源管理。とくに日本企業におけるビジネス環境変化と企業文化を研究テーマとする。オーストラリア・ブリスベンにあるグリフィス大学アジア研究学科を卒業したあと、大東文化大学に留学。その後、日本企業で働くなど、実践的経験を積み、再び大東へ。教員としては3年目だが、将来を期待される人材である。昭和43（1968）年生まれ。

資料編

大東文化大学80年の軌跡

大東文化大学の前身である大東文化協会は、大正12(1923)年国会の決議によって創設されました。
このことは、東洋の文化を基礎として西洋の文化を吸収し、東西文化を融合して新しい文化の創造を図ろうとする有識者の提案によるものです。
無批判に西洋化する日本を憂い、自国の文化、アジアの文化を知り、ゆるぎないアイデンティティに基づいて西洋文化の良さを吸収していこうとする、まさに現代の国際社会の規範ともなる考え方が、80年前からはじまっていたのです。
大東文化学園は、東西文化の融合の在り方を説いたこの理念を、建学の精神としています。

大正12(1923)年9月20日	財団法人大東文化協会設立並びに大東文化学院(本科・高等科、旧制専門学校)設立認可
大正13(1924)年11月	校舎と事務所を麹町区富士見町6丁目16番地に置く
昭和 7(1932)年10月	創立10周年記念式典挙行(於日本青年館)
昭和16(1941)年 2月	九段より豊島区池袋3丁目に移転
昭和19(1944)年 3月	校名を大東文化学院専門学校と改称
昭和20(1945)年 4月	戦災により池袋校舎焼失
昭和21(1946)年 2月	葛飾区青砥に校舎移転
昭和24(1949)年 4月	新学制に拠る大学(東京文政大学)設置認可
	文政学部(日本文学専攻・中国文学専攻・政治経済学専攻)
	大東文化学院専門学校を廃止
5月	法人名を財団法人東方文化協会と変更
6月	新学制に拠る大学(東京文政大学)開講
10月	池袋の旧地に校舎完成復帰
	東京文政学院(各種学校)設置認可
昭和26(1951)年 2月	法人名を学校法人文政大学と改め、校名を文政大学と変更
昭和28(1953)年 3月	法人名を学校法人大東文化大学と改め、校名を大東文化大学と変更
昭和30(1955)年 3月	文政学専攻科(日本文学専攻・中国文学専攻・政治経済学専攻)設置認可
4月	文政学専攻科(日本文学専攻・中国文学専攻・政治経済学専攻)開講
10月	文政幼稚園設置認可
昭和35(1960)年 6月	法人名を学校法人大東文化学園と変更
12月	大東柔道整復専門学校設立認可
昭和36(1961)年 4月	大東柔道整復専門学校を大東医学技術整復専門学校に名称変更、衛生検査科を増設
	東洋研究所設立
8月	大学を池袋より板橋区志村西台町に移転
	併設校大東文化大学第一高等学校設立認可
	東京文政学院廃止認可
昭和37(1962)年 1月	文政学部を改組し、文学部日本文学科・中国文学科、経済学部経済学料の設置認可
4月	文学部日本文学科・中国文学科、経済学部経済学科開講
	併設校大東文化大学第一高等学校開校
12月	経済学部経営学科設置認可
昭和38(1963)年 4月	経済学部経営学科開講
	文政幼稚園廃止認可
昭和39(1964)年 3月	大学院文学研究科日本文学専攻(修士課程)・中国学専攻(修士課程)設置認可
4月	大学院文学研究科日本文学専攻(修士課程)・中国学専攻(修士課程)開講
昭和41(1966)年12月	文学部英米文学科設置認可
昭和42(1967)年 3月	大学院文学研究科中国学専攻(博士課程)設置認可
4月	文学部英米文学科開講
	大学院文学研究科中国学専攻(博士課程)開講

昭和42（1967）年 4月	大東文化大学東松山校舎（東松山市岩殿）開校
6月	大東医学技術整復専門学校を大東医学技術専門学校と名称変更
12月	文学部外国語学科設置認可
昭和43（1968）年 4月	文学部外国語学科開講
昭和45（1970）年 6月	第一高等学校新校舎落成
昭和46（1971）年12月	大東医学技術専門学校の衛生検査科を臨床検査科と名称変更
昭和47（1972）年 1月	文学部教育学科設置認可
	文学部外国語学科を改組し、外国語学部中国語学科・英語学科設置認可
3月	学校法人盈進学園との合併認可（大東文化大学附属盈進高等学校、大東文化大学附属盈進中学校、
	大東文化大学附属盈進小学校、大東文化大学附属盈進幼稚園）
	大学院文学研究科日本文学専攻（博士課程）設置認可
	大学院経済学研究科経済学専攻（修士課程）設置認可
	大東文化大学附属青桐幼稚園設置認可
4月	文学部教育学科開講
	外国語学部中国語学科・英語学科開講
	大学院文学研究科日本文学専攻（博士課程）開講
	大学院経済学研究科経済学専攻（修士課程）開講
	大東文化大学附属青桐幼稚園開園
昭和48（1973）年 2月	法学部法律学科設置認可
4月	法学部法律学科開講
10月	板橋校舎に50周年記念館を竣工
昭和49（1974）年 3月	板橋校舎第二校舎を高島平9丁目に竣工
4月	大東医学技術専門学校を第二校舎に移転
	大東文化大学附属盈進幼稚園を改組し、大東文化大学附属第二青桐幼稚園設置
昭和50（1975）年 4月	大東文化大学附属第二青桐幼稚園を大東文化大学附属盈進幼稚園と名称変更
5月	嬬恋セミナーハウスを群馬県吾妻郡嬬恋村に竣工開設
昭和51（1976）年12月	大東文化会館を板橋区徳丸2丁目に竣工開設
昭和52（1977）年 3月	大学院法学研究科法律学専攻（修士課程）設置認可
4月	大学院法学研究科法律学専攻（修士課程）開講
7月	大東文化大学附属盈進高等学校、大東文化大学附属盈進中学校、大東文化大学盈進小学校、
	大東文化大学盈進幼稚園の設置者変更（分離）認可　学校法人盈進学園に移行
12月	別科日本語研修課程設置届出受理
	文学専攻科日本文学専攻・中国文学専攻、経済学専攻科経済学専攻設置届出受理
昭和53（1978）年 3月	大学院経済学研究科経済学専攻（博士課程後期）設置認可
	大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）設置認可
4月	大学院経済学研究科経済学専攻（博士課程後期）開講
	大学院文学研究科英文学専攻（修士課程）開講
	別科日本語研修課程開講

昭和53(1978)年	4月	文学専攻科日本文学専攻・中国文学専攻、経済学専攻科経済学専攻開講
	12月	大東医学技術専門学校女子寮を高島平9丁目に竣工
昭和55(1980)年	5月	板橋校舎研究管理棟竣工
昭和58(1983)年	7月	東松山校舎開発造成工事起工
昭和60(1985)年	4月	大東医学技術専門学校柔道整復科二年制から三年制へ移行
	12月	国際関係学部国際関係学科・国際文化学科設置認可
昭和61(1986)年	4月	国際関係学部国際関係学科・国際文化学科開講
昭和63(1988)年	3月	東松山校舎建設および開発造成工事竣工
昭和63(1988)年	4月	板橋校舎新1号館建築起工式
平成元(1989)年	3月	板橋校舎1号館竣工
	12月	法学部政治学科設置認可
平成 2(1990)年	4月	法学部政治学科開講
	12月	文学専攻科教育学専攻設置届出受理
平成 3(1991)年	4月	大学院法学研究科法律学専攻(博士課程後期)開講
		文学専攻科教育学専攻開講
平成 4(1992)年	12月	外国語学部日本語学科設置認可
平成 5(1993)年	4月1日	外国語学部日本語学科開講
		外国語学部中国語学科恒常的定員減(200→180)実施
		外国語学部英語学科恒常的定員減(300→270)実施
		大学院経済学研究科経営学専攻(修士課程)開講
		別科日本語研修課程を東松山校舎に位置変更し開講
	8月17日	大東文化大学附属青桐幼稚園恒常的定員減(400→300)申請
	9月22日	大東文化大学附属青桐幼稚園恒常的定員減認可
	11月30日	大学院法学研究科政治学専攻(修士課程)設置認可申請
平成 6(1994)年	3月16日	大学院法学研究科政治学専攻(修士課程)設置認可
	4月1日	大学院法学研究科政治学専攻(修士課程)開講
	6月27日	長野県菅平セミナーハウス竣工
	11月30日	大学院経済学研究科経営学専攻(博士課程後期)設置認可申請
	12月19日	東松山校舎ボクシング場竣工
平成 7(1995)年	3月16日	大学院経済学研究科経営学専攻(博士課程後期)設置認可
	4月1日	大学院経済学研究科経営学専攻(博士課程後期)開講
	5月22日	大東文化大学第一高等学校新校舎竣工
	6月30日	大学院法学研究科政治学専攻(博士課程後期)設置認可申請
	12月22日	大学院法学研究科政治学専攻(博士課程後期)設置認可
平成 8(1996)年	4月1日	大学院法学研究科政治学専攻(博士課程後期)開講
		博物館学芸員の資格取得のための課程開講
平成 9(1997)年	3月18日	大東文化大学第一高等学校部室棟竣工
	9月2日	陸上競技部合宿所を東松山市西本宿に竣工

平成 10（1998）年	4月7日	図書館書庫棟を高島平1丁目に竣工
	6月30日	大東文化大学大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻（修士課程）設置認可申請
		大東文化大学大学院外国語学研究科中国語学専攻、英語学専攻、日本語学専攻（修士課程）設置認可申請
	8月5日	大東文化大学附属青桐幼稚園恒常的定員減（300→200）申請
	10月14日	大東文化大学附属青桐幼稚園恒常的定員減認可
	12月22日	大東文化大学大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻（修士課程）設置認可
		大東文化大学大学院外国語学研究科中国語学専攻、英語学専攻、日本語学専攻（修士課程）設置認可
平成 11（1999）年	1月30日	長野県管平セミナーハウスシャワー棟（増築）竣工
	2月20日	大東文化大学東洋研究所徳丸研究棟を徳丸2丁目に竣工
	4月1日	大東文化大学附属青桐幼稚園恒常的定員減実施
		大東文化大学大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻（修士課程）開講
		大東文化大学大学院外国語学研究科中国語学専攻、英語学専攻、日本語学専攻（修士課程）開講
	4月15日	インターナショナルハウスを高島平1丁目に取得
	4月30日	大東文化大学経営学部(経営学科・企業システム学科）設置認可申請
	5月31日	ラグビー部合宿所を東松山市岩殿に竣工
	7月31日	大東文化大学文学部書道学科設置認可申請
	9月30日	大東文化大学環境創造学部環境創造学科設置認可申請
	10月22日	大東文化大学文学部書道学科設置認可
	12月22日	大東文化大学経営学部（経営学科・企業システム学科）設置認可
平成 12（2000）年	4月1日	大東文化大学経営学部（経営学科・企業システム学科）開講
		大東文化大学文学部書道学科開講
	7月26日	大東文化大学経済学部経済学科の名称変更について届出《社会経済学科申請》
	7月31日	大東文化大学（臨時的定員の恒常定員化）申請
		大東文化大学経済学部現代経済学科設置認可申請
	10月26日	大東文化大学経済学部現代経済学科設置認可
	12月21日	大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻（博士課程後期）設置認可
		大東文化大学環境創造学部環境創造学科設置認可
平成 13（2001）年	4月1日	大東文化大学環境創造学部環境創造学科開講
		大東文化大学経済学部（社会経済学科・現代経済学科）開講
		大学院アジア地域研究科アジア地域研究専攻（博士課程後期）開講
	10月	板橋キャンパスマスタープラン及び基本計画策定
平成 14（2002）年	8月8日	板橋キャンパス第Ⅰ期工事起工式
	8月31日	大東医学技術専門学校施術所竣工
平成 15（2003）年	4月1日	大学院経営学研究科経営学専攻（博士課程前期・後期）開講
		大学院文学研究科書道学専攻修士課程開講
	8月	板橋キャンパス第Ⅰ期工事竣工
	11月7日	創立80周年記念式典祝賀会（予定）

学校法人 大東文化学園

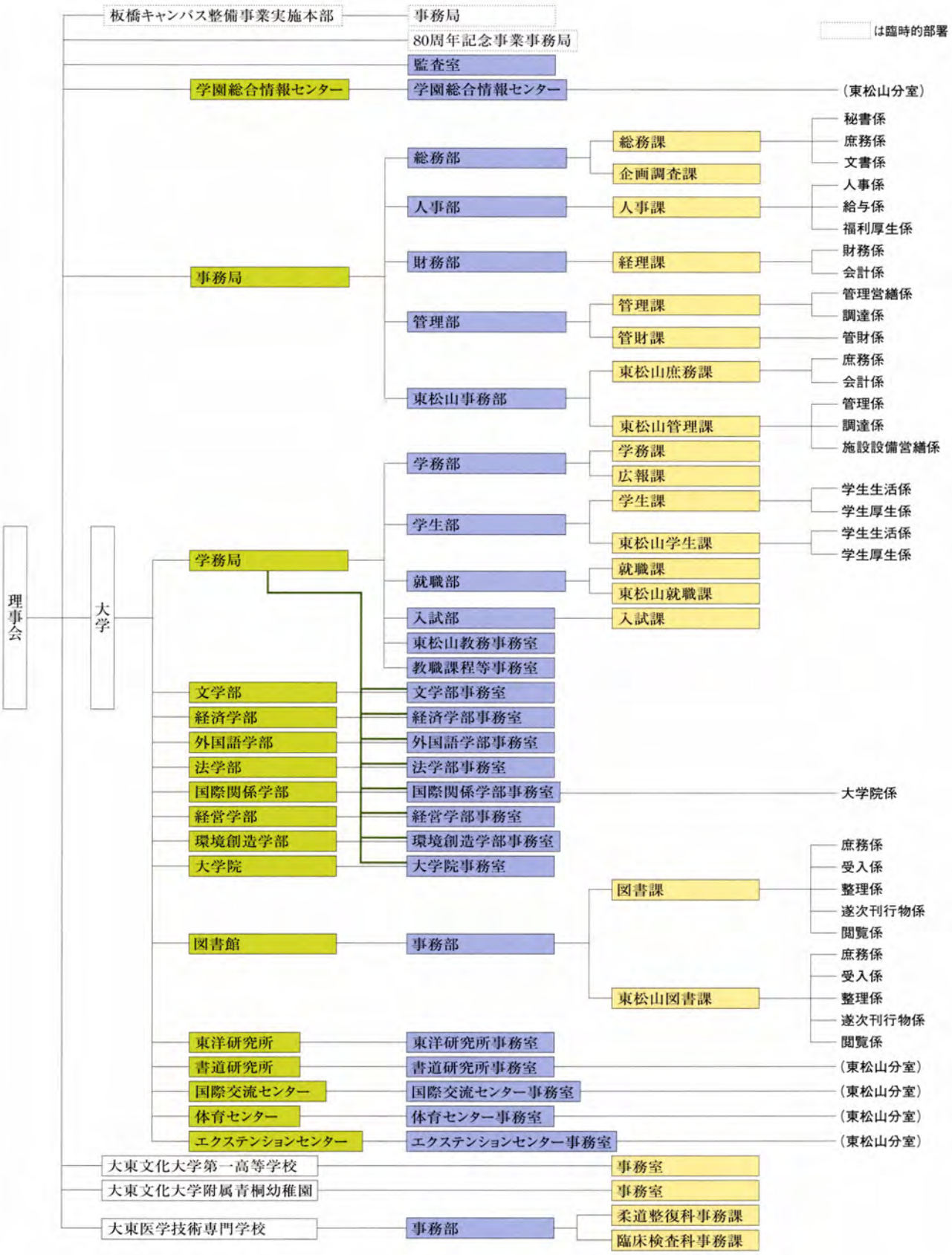
大東文化大学

- **学部**
  - 文学部
    - 日本文学科
    - 中国文学科
    - 英米文学科
    - 教育学科
    - 書道学科
  - 外国語学部
    - 中国語学科
    - 英語学科
    - 日本語学科
  - 経済学部
    - 社会経済学科
    - 現代経済学科
  - 経営学部
    - 経営学科
    - 企業システム学科
  - 法学部
    - 法律学科
    - 政治学科
  - 国際関係学部
    - 国際関係学科
    - 国際文化学科
  - 環境創造学部
    - 環境創造学科
- **専攻科**
  - 文学専攻科
    - 日本文学専攻
    - 中国文学専攻
    - 教育学専攻
  - 経済学専攻科
    - 経済学専攻
- **大学院**
  - 文学研究科
    - 日本文学専攻（博士課程前期・後期）
    - 中国学専攻（博士課程前期・後期）
    - 英文学専攻（修士課程）
    - 書道学専攻（修士課程）
  - 経済学研究科
    - 経済学専攻（博士課程前期・後期）
  - 法学研究科
    - 法律学専攻（博士課程前期・後期）
    - 政治学専攻（博士課程前期・後期）
  - 外国語学研究科
    - 中国語学専攻（修士課程）
    - 英語学専攻（修士課程）
    - 日本語学専攻（修士課程）
  - アジア地域研究科
    - アジア地域研究専攻（博士課程前期・後期）
  - 経営学研究科
    - 経営学専攻（博士課程前期・後期）
- **別科**
  - 日本語研修課程
- **付属機関**
  - 図書館
    - 図書館（板橋）・六十周年記念図書館（東松山）
  - 研究所
    - 東洋研究所・書道研究所・法学研究所・語学教育研究所・経営研究所・経済研究所・人文科学研究所・現代アジア研究所・国際比較政治研究所
  - センター
    - 学園総合情報センター・体育センター・エクステンションセンター・国際交流センター

- 大東文化大学第一高等学校
- 大東文化大学附属青桐幼稚園
- 大東医学技術専門学校
  - 柔道整復科
  - 臨床検査科

事務組織表

平成15(2003)年5月1日現在



区分			土地(㎡)	建物(㎡)	備考(カッコ内は借用土地建物で外数)
合計			361,347.71	144,264.84	
			(57,096.10)	(556.22)	
大学	大学計		330,014.18	128,920.87	
			(57,096.10)		
	板橋校舎計		21,367.00	42,389.78	
	東松山校舎計		291,492.30	76,773.42	
			(2,635.10)		
	校舎等	計	225,152.30	107,451.48	
		板橋校舎	21,367.00	42,389.78	
		東松山校舎	203,785.30	65,061.70	
	運動施設	計	87,707.00	11,711.72	正代グランド含む
			(2,635.10)		
		板橋校舎	0.00	0.00	
		東松山校舎	87,707.00	11,711.72	
			(2,635.10)		
	その他	計	17,154.88	9,757.67	
			(54,461.00)	(556.22)	
		嬬恋セミナーハウス	(53,438.00)	3,208.87	
		菅平セミナーハウス	10,151.00	1,149.04	
		大東文化会館	1,318.99	1,373.88	
		図書館書庫棟	746.00	1,437.34	
		徳丸研究棟	455.40	792.37	
		インターナショナル・ハウス	153.00	262.20	
		徳丸校地	876.03	0.00	バス駐機場
		高坂校地	1,862.00	0.00	バスターミナル
		陸上競技部合宿所	739.00	568.51	
		ラグビー部合宿所	853.46	965.46	
		六の橋借用施設	(1,023.00)	(556.22)	
第一高等学校		高校計	22,518.65	9,471.24	
		校舎等	3,208.00	9,053.91	
		運動施設	19,310.65	417.33	
		その他	0.00	0.00	
幼稚園		幼稚園計	1,772.00	936.64	
		園舎等	849.00	936.64	
		運動施設	923.00	0.00	
医学技術専門学校		医専計	5,494.00	4,936.09	
		校舎等	1,370.96	3,406.82	
		運動施設	3,014.57	0.00	
		その他	1,108.47	1,529.27	
その他		その他計	1,548.88	0.00	
		鳩山町用地	566.00	0.00	
		東松山市南新井用地	611.88	0.00	
		第一板橋区高島平用地	233.00	0.00	
		第二板橋区高島平用地	138.00	0.00	

<学部>

所属学部学科	1年 男	1年 女	計	2年 男	2年 女	計	3年 男	3年 女	計	4年 男	4年 女	計	総計
文学部 日本文学科	169	159	328	174	158	332	140	166	306	193	169	362	1,328
文学部 中国文学科	101	91	192	91	93	184	69	107	176	97	105	202	754
文学部 英米文学科	68	87	155	77	110	187	74	80	154	86	82	168	664
文学部 教育学科	58	83	141	57	90	147	66	106	172	62	85	147	607
文学部 書道学科	16	47	63	9	50	59	14	47	61	13	36	49	232
経済学部 経済学科	—	—	—	—	—	—	4	2	6	653	77	730	736
経済学部 経営学科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	37	4	41	41
経済学部 社会経済学科	247	27	274	284	33	317	254	24	278	—	—	—	869
経済学部 現代経済学科	168	17	185	163	17	180	170	14	184	—	—	—	549
外国語学部 中国語学科	87	79	166	61	96	157	67	76	143	80	86	166	632
外国語学部 英語学科	90	159	249	80	162	242	83	144	227	118	150	268	986
外国語学部 日本語学科	20	43	63	17	51	68	13	40	53	18	45	63	247
法学部 法律学科	222	56	278	339	85	424	236	94	330	252	67	319	1,351
法学部 政治学科	185	45	230	200	51	251	161	37	198	154	33	187	866
国際関係学部 国際関係学科	66	57	123	93	47	140	81	50	131	76	55	131	525
国際関係学部 国際文化学科	56	71	127	58	79	137	42	94	136	50	84	134	534
経営学部 経営学科	226	61	287	238	74	312	210	67	277	191	46	237	1,113
経営学部 企業システム学科	175	44	219	169	48	217	121	48	169	136	29	165	770
環境創造学部 環境創造学科	123	63	186	124	58	182	125	47	172	—	—	—	540
学部合計	2,077	1,189	3,266	2,234	1,302	3,536	1,930	1,243	3,173	2,216	1,153	3,369	13,344

<大学院>

博士課程前期・修士課程	1年 男	1年 女	計	2年 男	2年 女	計	総計
文学研究科	16	10	26	10	9	19	45
経済学研究科	8	9	17	14	9	23	40
外国語学研究科	10	9	19	15	22	37	56
法学研究科	5	3	8	16	2	18	26
アジア地域研究科	4	2	6	17	10	27	33
経営学研究科	8	1	9	—	—	—	9
計	51	34	85	72	52	124	209

博士課程後期	1年 男	1年 女	計	2年 男	2年 女	計	3年 男	3年 女	計	総計
文学研究科	5	1	6	2	1	3	12	6	18	27
経済学研究科	1	1	2	1	1	2	6	4	10	14
法学研究科	1	0	1	2	1	3	5	1	6	10
アジア地域研究科	3	4	7	3	1	4	4	2	6	17
経営学研究科	3	0	3	—	—	—	—	—	—	3
計	13	6	19	8	4	12	27	13	40	71

外国人留学生数一覧

平成15（2003）年5月1日現在

			中国	韓国	台湾	マレーシア	タイ	英国（香港）	クウェート	トンガ	バングラディシュ	ベトナム	アメリカ	モンゴル	オーストラリア	コンゴ民主共和国	イラン	スリランカ	カナダ	インド	エジプト	パキスタン	合計
学部	1年	男	37	4	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	46
		女	53	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60
		計	90	10	2	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	106
	2年	男	33	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37
		女	49	2	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56
		計	82	3	5	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	93
	3年	男	12	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
		女	28	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35
		計	40	7	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52
	4年	男	15	2	3	1	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
		女	19	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22
		計	34	5	3	1	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48
	小計	男	97	8	6	3	3	1	2	4	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	126
		女	149	17	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	173
		計	246	25	12	3	4	1	2	4	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	299
大学院	修士（博士前期）	男	22	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
		女	30	3	2	0	3	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	44
		計	52	4	2	0	3	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	67
	（博士後期）	男	4	4	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	13
		女	7	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12
		計	11	5	5	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	25
	別科	男	17	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
		女	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
		計	23	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25
	交換留学生	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3
		女	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3
		計	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	6
	科目等履修生	男	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
		女	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
		計	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	大学院研修生	男	27	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28
		女	24	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	29
		計	51	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	57
	大学院委託研修生	男	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
		女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		男	169	17	8	3	3	1	2	4	2	0	2	1	1	1	0	2	0	1	1	0	218
		女	217	30	11	0	5	0	0	0	1	1	0	4	1	0	1	0	1	0	0	1	273
		計	386	47	19	3	8	1	2	4	3	1	2	5	2	1	1	2	1	1	1	1	491

●歴代総長

初代総長 平沼騏一郎
大正12(1923)年9月から
大正14(1925)年2月まで

第2代総長 井上哲次郎
大正14(1925)年2月から
大正15(1926)年10月まで

第3代総長 大島 健一
大正15(1926)年10月から
昭和2(1927)年6月まで

第4代・5代総長 鵜沢 総明
昭和2(1927)年6月から
昭和3(1928)年12月まで

第6代総長 大津淳一郎
昭和3(1928)年12月から
昭和7(1932)年1月まで

第7代総長 加藤政之助
昭和7(1932)年1月から
昭和13(1938)年2月まで

第8代・10代総長 松平 頼寿
昭和13(1938)年2月から
昭和15(1940)年3月まで
昭和18(1943)年8月から
昭和18(1943)年9月まで

第9代・12代総長 鵜沢 総明
昭和15(1940)年12月から
昭和18(1943)年8月まで
昭和21(1946)年9月から
昭和23(1948)年3月まで

第11代総長 酒井 忠正
昭和18(1943)年9月から
昭和20(1945)年12月まで

第13代総長 藤塚　鄰
昭和23(1948)年3月から
昭和23(1948)年12月まで

第14代総長 土屋 久泰
昭和23(1948)年12月から
昭和24(1949)年3月まで

●歴代理事長

初代理事長 鵜沢 総明
昭和20(1945)年12月から
昭和22(1947)年11月29日(2年0カ月)

第2代理事長 土屋 久泰
昭和23(1948)年3月10日から
昭和29(1954)年12月(6年9カ月)

第3代理事長 尾張真之介
昭和29(1903)年12月1日から
昭和36(1961)年6月30日(6年6カ月)

第4代理事長 南条 徳男
昭和36(1961)年7月1日から
昭和44(1969)年5月14日(7年10カ月)

第5代理事長 金子　昇
昭和44(1969)年5月14日から
昭和54(1979)年7月20日(10年2カ月)

第6代理事長 時枝 満康
昭和54(1979)年7月20日から
昭和56(1981)年3月31日(1年8カ月)

第7代理事長 鈴木 則幸
昭和56(1981)年4月1日から
昭和58(1983)年4月5日(2年0カ月)

第8代理事長 大西 経信
昭和58(1983)年4月6日から
昭和60(1985)年6月29日(2年3カ月)

第9代理事長 下田 博一
昭和60(1985)年6月30日から
昭和63(1988)年7月7日(3年0カ月)

第10代理事長 鎌形　剛
昭和63(1988)年7月7日から
平成元(1989)年5月17日(0年10カ月)

第11代理事長 鈴木 武夫
平成元(1989)年5月24日から
平成9(1997)年1月29日(7年8カ月)

第12代理事長 田村 房夫
平成9(1997)年1月30日から
平成9(1997)年6月29日(0年5カ月)

第13代理事長 諏訪 義英
平成9(1997)年6月30日から
平成10(1998)年7月1日(1年0カ月)

第14代理事長 竹内 哲夫
平成10(1998)年7月2日から
現在に至る

●歴代学長

初代学長 土屋 久泰
昭和24(1949)年5月1日から
昭和33(1958)年3月31日(9年0カ月)

第2代学長 平島 敏夫
昭和33(1958)年4月1日から
昭和37(1962)年11月30日(4年8カ月)

第3代学長 南条 徳男
昭和37(1962)年11月30日から
昭和44(1969)年3月31日(6年4カ月)

第4代学長 佐伯 梅友
昭和44(1969)年4月1日から
昭和50(1975)年3月31日(6年0カ月)

第5代学長 池田 末利
昭和50(1975)年4月1日から
昭和58(1983)年3月31日(9年0カ月)

第6代学長 清原 道壽
昭和58(1983)年4月1日から
昭和59(1984)年3月31日(1年0カ月)

第7代学長 香坂 順一
昭和59(1984)年4月1日から
昭和62(1987)年3月31日(3年0カ月)

第8代学長 杉本 良吉
昭和62(1987)年4月1日から
平成2(1990)年3月31日(3年0カ月)

第9代学長 穂積 重行
平成2(1990)年4月1日から
平成5(1993)年3月31日(3年0カ月)

第10代学長 佐藤 定幸
平成5(1993)年4月1日から
平成8(1996)年3月31日(3年0カ月)

第11代学長 諏訪 義英
平成8(1996)年4月1日から
平成11(1999)年3月31日(3年0カ月)

第12代学長 須藤 敏昭
平成11(1999)年4月1日から
現在に至る

高大連携・多様なカリキュラム・国際理解教育で特色ある学校づくりを積極的に推進

秩父宮ラグビー場で応援。
平成14(2002)年11月

新校舎の完成と共学への転換

平成4(1992)年、第一高校は狭い校地と古くなった校舎という不十分な教育施設の中、創立30周年を迎えました。当時、本校教育の発展のためには、抜本的な教育環境の整備が不可欠でした。そして、平成7(1995)年5月末、パステルカラーの4階建ての新校舎が完成しました。耐震性と最新設備を整えた近代的な校舎は、急速に進む国際化と情報化社会を見据えた、都市型校舎のモデルとして注目されました。さらに同年、33年間続いた男子校に終止符を打ち、男女共学に転換。創立以来培ってきた固有の伝統と校風を、現代社会が求める男女共生の理念と融合させ、新しい大学付設高校としてスタートを切りました。

多様な進路保障を目指す

経済環境と社会情勢が急変する中、生徒の将来の職業観や志望進路も多様化してきました。この傾向は、共学へ移行後さらに顕著となり、カリキュラムに選択科目を数多く設け、平成13(2001)年度2学年より3類型(大東文化大学への推薦入学を中心とした一般文系クラス、文系他大学受験クラス、理系進学クラス)の学級編成を開始しました。また、平成9(1997)年度から、授業に"シラバス"方式を導入する一方で、課外補習を強化。指定校推薦制度の拡大もあって、本校の進学実績は年々高まってきています。

高大連携の具体化

本校の特色づくりを推進する上で、「高大連携」の具体化は、大きな課題の一つです。大学教員による学部・学科紹介や特別講座(3学年大東文化大進学者対象)や、全校生徒による東松山校舎見学・模擬授業受講のほか、平成13(2001)年度から大学で開講した「板橋環境創造講座」を本校生徒が履修(単位認定)するなど、大学・高校間の教育の連携を推進しています。

国際交流・国際理解教育の推進

平成元(1989)年Avondale College(ニュージーランド・オークランド市)との定期交流を皮切りに、本校の国際理解教育は飛躍的に前進しました。平成6(1994)年に中国へ修学旅行を開始、翌年には定期交流をアメリカのTimpview High School(ユタ州)へと広げました。また、平成11(1999)年10月、北京市回民学校と友好姉妹校関係を締結する一方、ニュージーランドおよびアメリカの姉妹校と協定を結び、平成12(2000)年4月より長期交換留学制度を開始しました。

活躍する部活動

近年、全国的に高校生のラグビー離れ傾向がありますが、本校ラグビー部はこの10年間で全国大会に4回出場、平成14(2002)年夏にはニュージーランドに遠征するなど、都内ではトップ校に位置づけられています。また陸上部は、都内高校の中で駅伝有力校として毎年関東大会に出場、平成13(2001)年度に2年生がインターハイに駒を進め、都道府県対抗駅伝や北京市友好駅伝にも選抜出場しました。さらに、平成14(2002)年フェンシング部が16年ぶりに東京都で団体優勝し、インターハイ出場を果たしました。

一方、文化活動は共学化以降、年々盛んになっています。文化祭での芸術発表や合唱コンクールなど生徒の多彩な活動や表現が見られ、課外クラブ活動においても、全国水準にある書道部や弁論部の活躍のほか、特に吹奏楽部は定期演奏会や各種コンクールへの出場、地域での演奏活動、他校とのジョイント・コンサートなど積極的に活動しています。

漢字による幼児教育を実践する ユニークな幼稚園として全国的に知られる

昭和47(1972)年「大東文化大学附属青桐幼稚園」を設置

文政幼稚園から青桐幼稚園へ

大東文化大学附属の幼稚園は、昭和26(1951)年豊島区池袋3丁目に「文政幼稚園」として大学内に設置されたことがありました。その後、池袋から板橋区西台(現高島平)へ大学が移転しました。高度経済成長により不足する住宅を供給するため、高島平に大規模な住宅団地が造成されました。これに伴い同地で幼稚園が不足し、板橋区からの要請を受けた本学は、高島平団地に隣接する高島平3丁目に、昭和47(1972)年「大東文化大学附属青桐幼稚園」を設置しました。このとき大学では、新たに外国語学部を設置し、文学部、経済学部と合わせて、人文・社会系の総合大学として歩み始めていて、文学部に教育学科(小学校・幼稚園教諭養成)を増設し、大東文化大学のシンボルマークである「青桐」をとり、新しく生まれ変わった幼稚園の名称としました。

昭和53(1978)年に就任した石井勲園長は、古くから『三つ子の魂百まで』と言われてきたように、幼児期に養われたあらゆる能力がその後の一生を決定するという大脳生理学の理論に基づき、漢字による独特の幼児教育法を提唱しました。石井氏は、昭和48(1973)年、アメリカのフィラデルフィアで開催された『第6回人間能力開発世界会議』において「人類の進歩に貢献する有益な研究」と認められ、同会議で最も名誉ある金賞を授与されました。

漢字による幼児教育の実践は、本園の教育方針の重要な柱の一つとして位置付けられ、またこの理念は『幼少教育研究所』として結実し、全国の幼稚園や保育施設などへの普及・啓蒙活動を展開し、多くの実績をあげました。

近10年の歩み

開設当時は、4歳児クラスと5歳児クラスだけでしたが、昭和63(1988)年から地域の要望も多く、3歳児保育を導入しました。知育、徳育、体育とバランスのとれた人格形成を主眼に教育を進め、一層の教育効果をあげてきました。

平成13(2001)年度からは、未就園児(2歳児)対象の「つぼみ組教室」を週に1回、月に3回開いています。

質の高い医療技術者養成を目指し、教育内容の改革に取り組む

臨床実習の教育を強化するため
大東接骨院を開院

時代のニーズに即応して

日本の医療は、質・量ともに飛躍的な進歩・発展を遂げてきました。一方、医療環境を取り巻く医療制度や医療従事者の教育制度面でも、人間性の向上や職種の多様化が図られてきました。今や社会科学と自然科学（医学）との境界線は、急速に融合しつつあります。

専門的な技術と知識、そして高い倫理観を兼ね備えた資質の高い人材の育成は、21世紀の医療界において必然的な要請事項となってきています。

大東医学技術専門学校は、医療の高度化および社会環境の変化、さらに地域社会からの要望に的確に対応する必要があると考え、これまで本校で培ってきた医療技術者養成の伝統をもとに、よりレベルの高い臨床検査技師および柔道整復師養成を目指してきました。

各学科のあらまし

本校は、柔道整復科（定員60人・夜間3年課程）と、臨床検査科（定員80人・昼間3年課程）の2科からなります。

柔道整復科では、柔道整復師の資質向上を図るため、平成13（2001）年度から新カリキュラムを導入したほか、平成14（2002）年9月18日に大東接骨院を開院し、学生に対する臨床実習の教育を強化しました。

臨床検査科では、平成13（2001）年度の新カリキュラム導入に加え、現在、「人間健康学部」（仮称）の新設の検討が行われています。新設されることとなれば臨床検査科は、この中で健康科学科として生まれかわることになります。

「人間健康学部」は、従来の臨床検査科の域を超え発展的に新たな社会の変革を把握し、既成概念にとらわれることなく、社会科学と自然科学の融合のもとに、新しい分野を確立しようとするものです。

検討されている新学部では、人間と自然との共生を全円的環境規模で追究する能力を修得させ、社会の変化に速やかに対応できる人材の育成を目的としています。

臨床検査技師および柔道整復師養成を
目指す大東医学技術専門学校

平成14（2002）年9月18日に
開院した大東接骨院

●父兄会

平成13(2001)年に大東文化大学父兄会は、40周年を迎えました。学園の創立50周年には、大東文化会館と嬬恋セミナーハウスの建設を父兄会事業として行いました。毎年夏休みには全国で支部総会が開催され、大学との意見交換を行うなど、学生と教職員と父兄の間のパイプ役となっています。箱根駅伝などスポーツ活動の応援も年中行事の一つです。

父兄会47支部			
東北地区	北海道支部	近畿地区	三重支部
	青森支部		滋賀支部
	岩手支部		京都支部
	秋田支部		奈良支部
	山形支部		和歌山支部
	宮城支部		大阪支部
	福島支部		兵庫支部
関東地区	群馬支部	中国地区	鳥取支部
	茨城支部		島根支部
	栃木支部		岡山支部
	埼玉支部		広島支部
	東京支部		山口支部
	千葉支部	四国地区	香川支部
	神奈川支部		徳島支部
	山梨支部		高知支部
中部地区	新潟支部		愛媛支部
	富山支部	九州地区	福岡支部
	長野支部		佐賀支部
	静岡支部		長崎支部
	岐阜支部		熊本支部
	愛知支部		大分支部
	石川支部		宮崎支部
	福井支部		鹿児島支部
			沖縄支部

●同窓会

大東文化学院高等科・本科卒業生900余人と新制大学卒業生を合わせて、大東文化大学の同窓生は8万人を超えました。

学園の50周年には50周年記念館建設のために、また、10周年ごとの記念には会員から募金を募集して、学園に寄附しています。毎年度始めには、同窓会総会を開き、在学生の活動を支援する事業を推進しています。

同窓会53支部		
北海道支部	石川支部	島根支部
北海道南支部	福井支部	鳥取支部
青森支部	山梨支部	岡山支部
岩手支部	長野支部	広島支部
宮城支部	長野中南信支部	山口支部
秋田支部	長野東信支部	徳島支部
山形支部	岐阜支部	香川支部
福島支部	静岡支部	愛媛支部
茨城支部	静岡西部支部	高知支部
栃木支部	静岡東部支部	福岡支部
群馬支部	愛知支部	佐賀支部
群馬東毛支部	三重支部	長崎支部
埼玉支部	滋賀支部	熊本支部
千葉支部	京都支部	大分支部
東京支部	大阪支部	宮崎支部
神奈川支部	兵庫支部	鹿児島支部
新潟支部	奈良支部	沖縄支部
富山支部	和歌山支部	

編集後記

本学は、本年9月20日をもって、創立80周年を迎えることとなるため、この創立80周年記念事業の一環として、『大東文化大学80周年誌』を刊行することとなった。が、通史としては、既に10年前に『大東文化七十年史』を刊行していることから、本格的な通史の作成は創立100周年記念事業に譲ることとした。本誌では、近10年間の本学の歩みに焦点を当てることとし、かつ、100周年をも射程に入れた上で未発表資料の発掘・収録に力点をおき、基本的にできるかぎりビジュアルを中心にしていく"目で見る大学史"を、という編集方針が決定された。この編集方針に従って編まれ、今回お届けするものが本誌である。

但し、近10年間の本学の歩みに関しては、諸般の事情から「大東文化新聞」の記事を中心にして収録すべき項目を取捨選択せざるを得なかったため、できる限りの努力はしたが、思わぬ収録漏れを生じているかも知れない。より完成された『100年史』を目指すためにも、関係各位の忌憚のないご助言、ご叱正をお待ちする次第である。

なお、今回の編集作業の経験からするならば、『100年史』作成のためには、少なくとも3年程度の準備期間が必要であり、編纂室を設けて『100年史』の編纂に専念するスタッフを配置するなどの体制づくりを真剣に考える必要があるものと思われる。

最後に、本誌の刊行に際して、ご協力、ご支援を賜った方々に厚くお礼申し上げたい。

創立80周年誌編集推進委員会委員長　吉田 憲夫

大東文化大学
創立80周年誌編集推進委員会

委員長 吉田 憲夫（経済学部教授・図書館長）
旧委員長 添田 和郎（元常務理事 平成15年6月まで）

委員 金丸 邦三（外国語学部長）
黒柳 米司（法学部長）
小野 隆（図書館事務部長）
大木 誠（入試部長）
旧委員 菟原 明（元法学部長 平成14年9月まで）
古川 陽二（前法学部長 平成15年3月まで）

幹事 佐藤 保子（学務部広報課）
井口 直也（学務部広報課）
多ヶ谷 公佑（学務部広報課）
旧幹事 吉田 博（元東洋研究所事務長 平成14年12月まで）

80th 創立80周年 DAITO BUNKA

心は放て天地間、
まなこはさらせ世の移り
大東文化大学創立80周年誌

【発行日】
平成15（2003）年9月20日

【編集】
大東文化大学創立80周年記念事業委員会
80周年誌編集推進委員会

【発行者】
学校法人 大東文化学園
理事長 竹内 哲夫

【発行】
学校法人 大東文化学園 80周年記念事業事務局
〒175-8571 東京都板橋区高島平一丁目9番1号
電話 03-5399-7309

【制作・印刷】
株式会社 ぎょうせい

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOYINK 環境に優しい大豆インクを使用しています

心は放て天地間、まなこはさらせ世の移り

大東文化大学創立80周年誌

発行日●平成15(2003)年9月20日／編集●大東文化大学創立80周年誌編集推進委員会／発行●学校法人 大東文化学園 創立80周年記念事業事務局／制作・印刷●株式会社ぎょうせい